

日田地区遺跡群発掘調査報告 8
日田市埋蔵文化財調査報告書第70集

吹
上
IV
— 6次調査の記録 —

吹 上 IV

— 6次調査の記録 —

日田市埋蔵文化財調査報告書第70集

2006年

日田市教育委員会

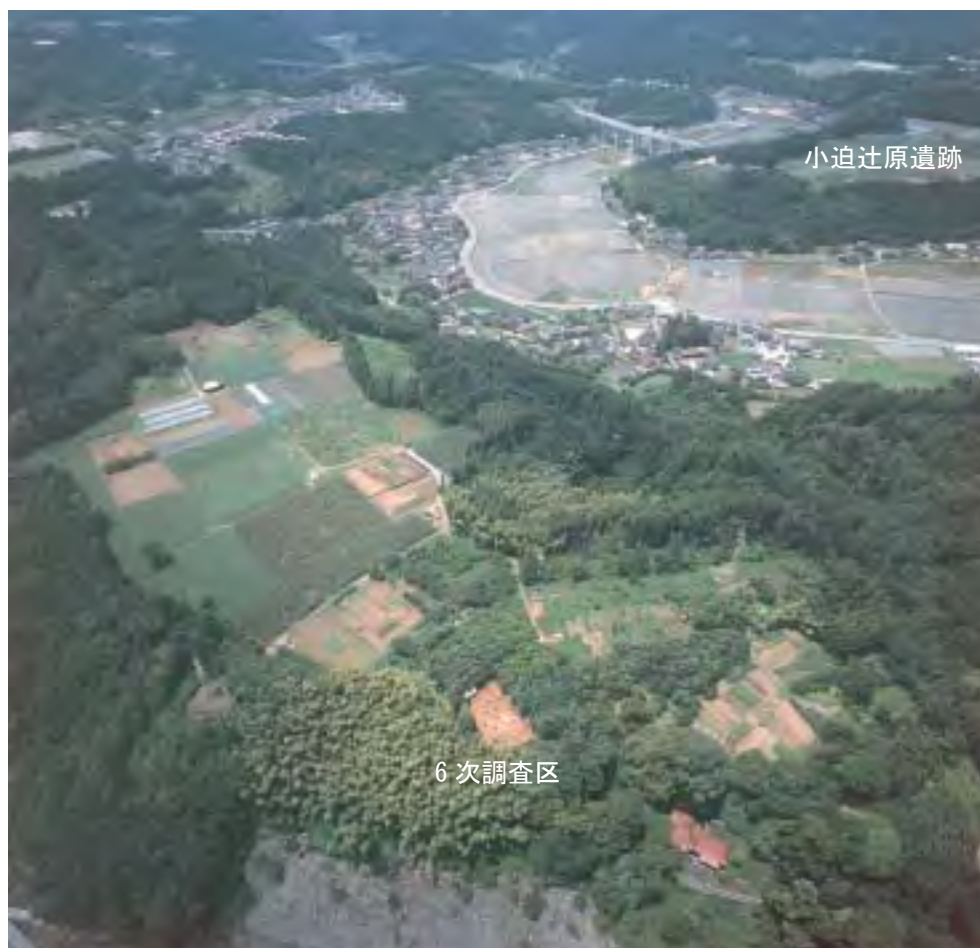
2006年

日田市教育委員会



吹上台地を望む（南方向から）

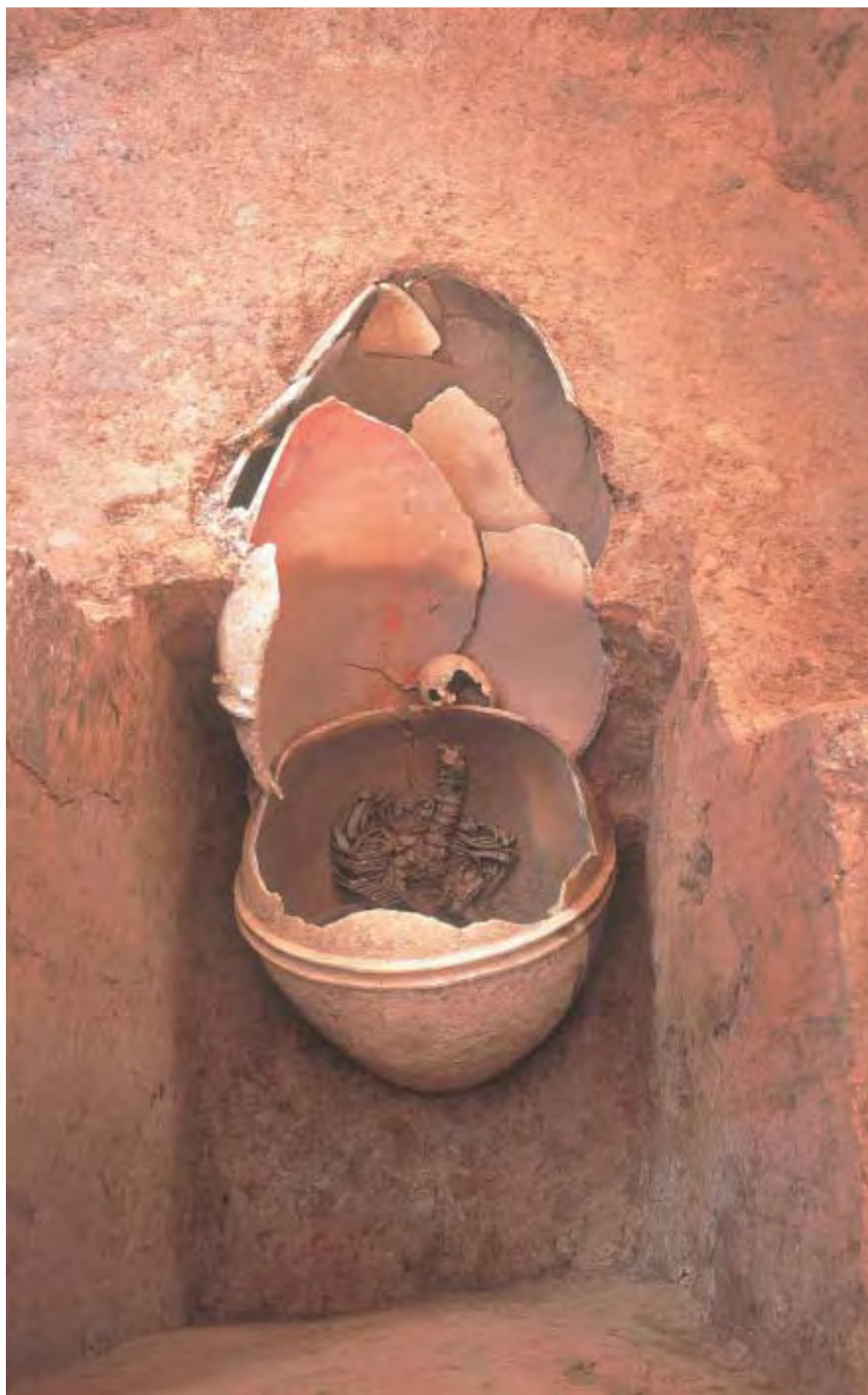




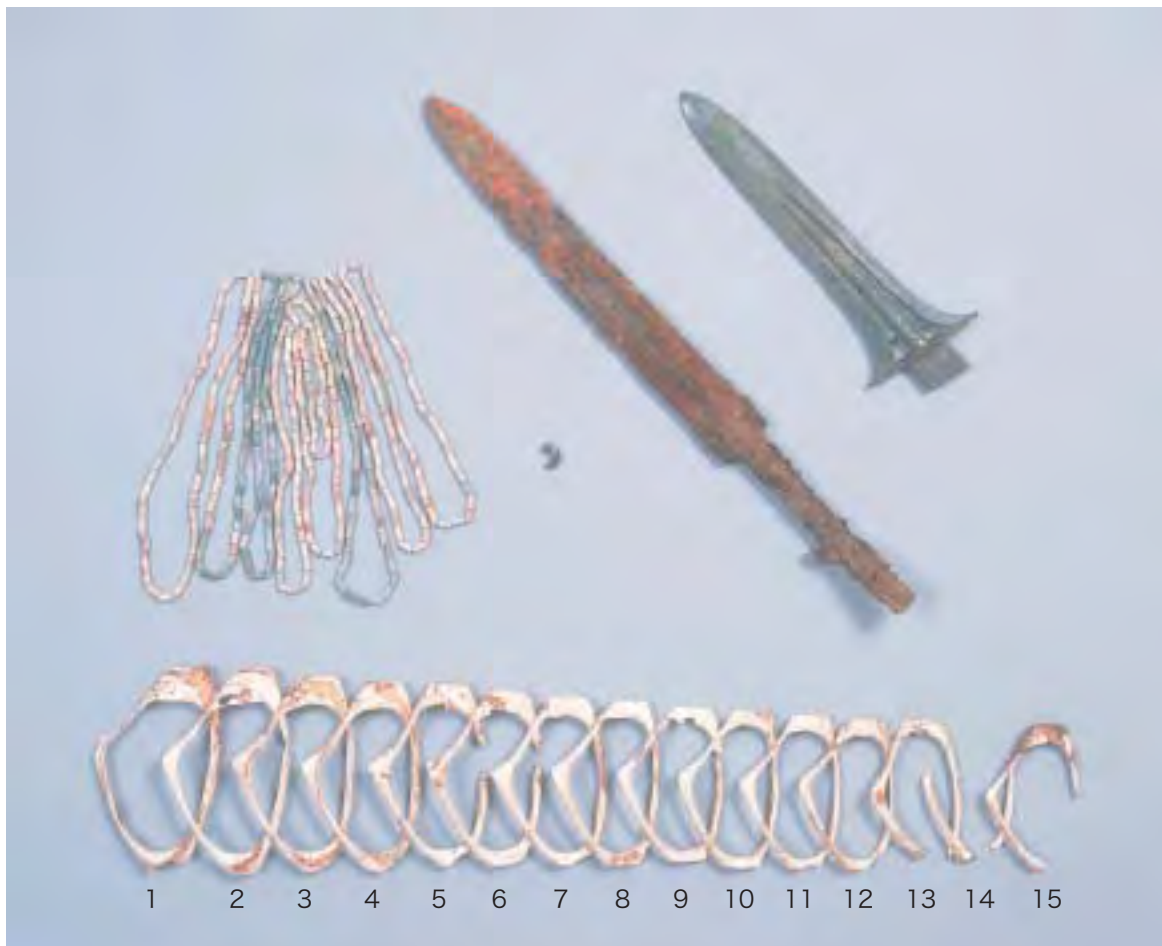
調査区遠景（東南上空から）



調査区全景（真上から）



4号甕棺墓



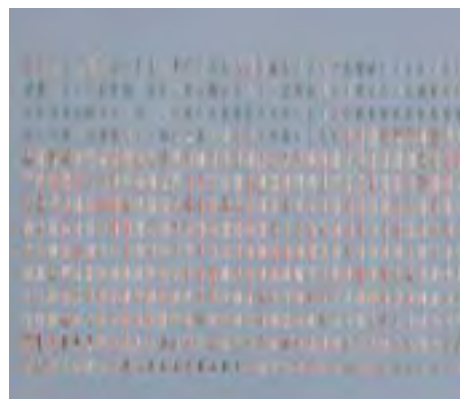
4号甕棺墓副葬品



銅戈



鉄劍



左から
貝輪 (1と15)
勾玉
管玉 (1部)



5号甕棺墓



5号甕棺墓人骨出土狀況



5号甕棺墓副葬品（左 貝輪、右 勾玉）



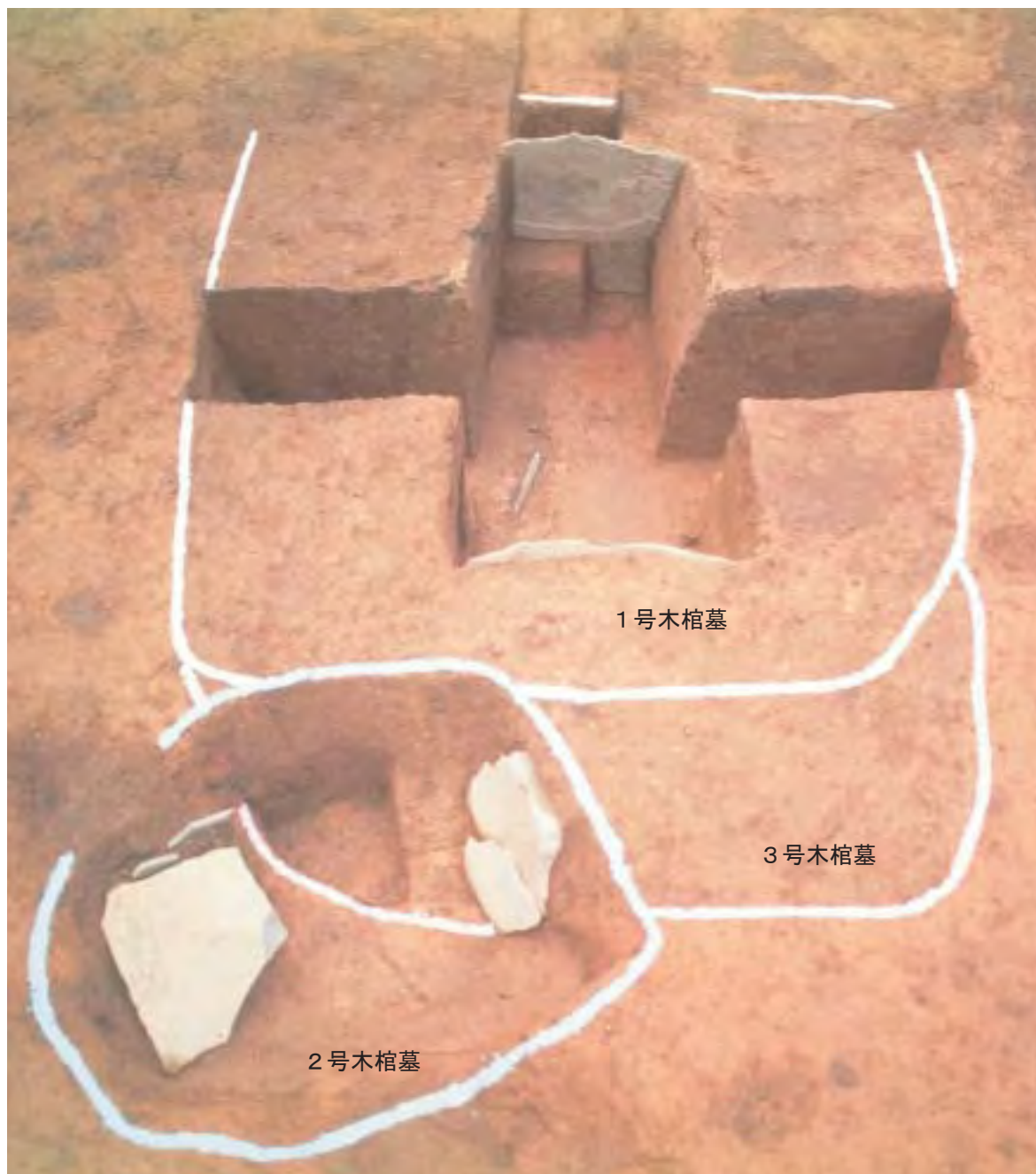
2号甕棺墓



2号甕棺墓銅戈出土狀況



銅戈



1～3号木棺墓



1号木棺墓出土の副葬品（銅剣と把頭飾）



1号経塚



経筒と埋納遺物（左 刀子、右 小壺）

序 文

本市に所在の吹上遺跡は、県内でも古くから大規模な弥生時代集落遺跡として知られ、今でも遺跡のある畑では土器や石器を拾うことができます。

遺跡はこれまでに当委員会が 11 回の調査を行い、当時の住居や墓などが発見されると共に多くの遺物が出土しています。

特に今回報告いたします 6 次調査では、青銅武器や鉄製武器のほか貝製腕輪などの豊富な副葬品が納められていた甕棺墓や木棺墓が発見され、一躍注目を浴びました。この場所は関係者の理解と協力によって保存されることになり、現在大分県指定史跡として保護され、日田市が用地を公有化し管理を行っております。

また、出土した資料は日田市埋蔵文化財センターで展示や保管を行っており、その活用・普及に努めています。

本書はこれまで吹上遺跡で発掘調査を行なった記録報告の 4 巻にあたり、今後の埋蔵文化財保護や地域の歴史、学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保護にご理解頂くとともに甚大なる協力を賜りましたエヌ・ティ・ティ九州移動通信網株式会社（現株式会社エヌティティドコモ）様、調査から報告書作成に至るまで、多大なるご指導を賜りました関係機関の方々と、調査への協力をいただきました皆様方に対し、心から厚くお礼を申し上げます。

平成 18 年 3 月 31 日

日田市教育委員会

教育長 諫 山 康 雄

例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が国庫・県費の補助を受けて実施した吹上遺跡の発掘調査報告書である。
2. 吹上遺跡の調査報告書については分冊発行とし、本書では6次調査分を『吹上IV』として刊行する。
3. 6次調査にあたっての調査組織及び調査協力者については『吹上I』第1章第4節に記し、本報告においては報告書作成にかかる組織及び協力者について記載している。
4. 調査現場での実測は調査担当者が行ったほかは、人骨に関しては九州大学の協力による。写真撮影は調査担当者が行い、長谷川正美氏の多大なる協力を得た。
5. 本書の調査報告の記録に用いた航空写真は、平成7年度に株式会社スカイサーベイに撮影委託した成果品を使用し、遺物写真は雅企画有限会社の撮影による。
6. 本書に掲載した遺物実測は調査員が行ったほかは、雅企画有限会社の委託によるものを使用し、一部を図版作成協力者によるものを使用した。製図は調査員が行ったほかは雅企画有限会社の委託によるものを使用し、一部中川照美（文化財保護課調査補助員）の協力を得た。
7. 玉の石材鑑定については熊本大学大坪志子氏に依頼した結果による。なお正式な詳細報告は後の機会を予定している。
8. 写真図版中の番号は、全て挿図番号と一致する。
9. 出土遺物及び記録類（図面、写真等）は、日田市埋蔵文化財センターに保管している。なお、出土人骨については、九州大学に依頼し、管理・保管している。
10. 本書の構成は土居が行い、執筆と編集は渡邊が行った。このうち、3～5号甕棺墓の人骨及び副葬品出土状況については、九州大学田中良之教授と金宰賢助手（現東亜大学校人文学）の調査所見をもとに、田中教授と協議を行い執筆している。
11. 題字は、元日田市文化財調査員である武石邦男氏の揮毫によるものである。



日田市の位置

目 次

第11章 6次調査の記録	1
第1節 調査の概要	3
第2節 調査の内容	7
(1) 貯蔵穴	7
(2) 土坑	12
(3) 溝	14
(4) 甕棺墓	15
(5) 木棺墓	49
(6) 経塚	55
(7) その他の遺物	57
第3節 小結	58
(1) 弥生時代の遺構と遺物	
①生活遺構	58
②墳墓群	58
(2) 古代の遺構と遺物	64
(3) おわりに	65

挿 図 目 次

第1図 6次調査の位置 (1/2500)	2	第17図 3号甕棺人骨出土状況実測図 (1/10)	24
第2図 6次調査区的位置図 (1/1000)	4	第18図 3号甕棺実測図 (1/8)	25
第3図 6次調査区遺構配置図 (1/100)	6	第19図 4号甕棺墓実測図 (1/20)	27
第4図 1号貯蔵穴実測図 (1/40)	7	第20図 4号甕棺墓人骨・遺物出土状況実測図 (1/10)	28
第5図 2～5号貯蔵穴実測図 (1/40)	9	第21図 4号甕棺墓管玉出土状況実測図 (1/2)	29
第6図 貯蔵穴出土遺物実測図 (1/3)	10	第22図 4号甕棺実測図 (1/8)	31-32
第7図 1～5号土坑実測図 (1/40)	11	第23図 4号甕棺墓出土鉄剣・銅戈・勾玉実測図 (1/2)	34
第8図 7～11号土坑実測図 (1/40)	13	第24図 4号甕棺墓出土管玉実測図 (1/2)	35-36
第9図 1～4号溝実測図 (1/80)	14	第25図 4号甕棺墓出土貝輪実測図 (1/3)	37-38
第10図 溝出土遺物実測図 (1/3)	14	第26図 5号甕棺墓実測図 (1/20)	40
第11図 1号甕棺墓実測図 (1/20)	16	第27図 5号甕棺墓人骨・貝輪出土状況実測図 (1/10)	41
第12図 1号甕棺実測図 (1/8)	17	第28図 5号甕棺実測図 (1/8)	42
第13図 2号甕棺墓実測図 (1/20)	19-20	第29図 5号甕棺墓出土勾玉実測図 (1/2)	42
第14図 2号甕棺実測図 (1/8)	21		
第15図 2号甕棺墓出土銅戈実測図 (1/2)	22		
第16図 3号甕棺墓実測図 (1/20)	23		

第30図	5号甕棺墓出土貝輪実測図(1/3) …	43-44	第37図	木棺墓出土遺物実測図(1/3) ……………	53
第31図	6号甕棺墓実測図(1/20) ……………	46	第38図	2号木棺墓実測図(1/20) ……………	54
第32図	6号甕棺実測図(1/8) ……………	47	第39図	1号経塚実測図(1/20) ……………	55
第33図	7号甕棺墓実測図(1/20) ……………	48	第40図	1号経塚埋納遺物実測図(1/3) ……………	56
第34図	7号甕棺実測図(1/8) ……………	49	第41図	その他の遺物実測図(1/3) ……………	57
第35図	1号木棺墓実測図(1/20) ……………	51-52	第42図	遺構変遷図(1/200) ……………	60
第36図	1号木棺墓出土銅剣・把頭飾実測図 (1/2) ……	53			

図 版 目 次

巻頭図版1	吹上台地を望む(南から)	図版7	1号甕棺墓発掘状況(東から)
巻頭図版2	調査区遠景(東南上空から) 調査区全景(真上から)	図版8	1号甕棺墓発掘状況(南から)
巻頭図版3	4号甕棺墓	図版9	2号甕棺墓発掘状況(真上から)
巻頭図版4	4号甕棺墓副葬品	図版10	2号甕棺墓発掘状況(東から)
巻頭図版5	5号甕棺墓	図版11	2号甕棺墓発掘状況(南から)
巻頭図版6	5号甕棺墓人骨出土状況 貝輪・勾玉	図版12	3号甕棺墓発掘状況(真上から)
巻頭図版7	2号甕棺墓 2号甕棺墓銅戈出土状況 銅戈	図版13	3号甕棺墓発掘状況(東から)
巻頭図版8	1～3号木棺墓 銅剣と把頭飾	図版14	3号甕棺墓人骨出土状況(北から)
巻頭図版9	1号経塚 経筒と副葬品(左 刀子、右 小壺)	図版15	3号甕棺墓人骨出土状況(北から)
図版1	6次調査区(東から) 6次調査区(真上から)	図版16	4号甕棺墓発掘状況(真上から)
図版2	1号貯蔵穴発掘状況(南から) 2号貯蔵穴発掘状況(北から)	図版17	4号甕棺墓発掘状況(東から)
図版3	3号貯蔵穴発掘状況(北から) 4号貯蔵穴発掘状況(東から)	図版18	4号甕棺墓発掘状況(東から)
図版4	5号貯蔵穴発掘状況(南から) 2号土坑発掘状況(南から)		4号甕棺墓発掘状況(西から)
図版5	3号土坑発掘状況(西から) 7号土坑発掘状況(北から)		4号甕棺墓発掘状況(西から)
図版6	8、9号土坑検出状況(東から) 11号土坑発掘状況(北から)		4号甕棺墓人骨出土状況(西から)
			4号甕棺墓人骨出土状況(西から)
			4号甕棺墓人骨出土状況(東から)
			4号甕棺墓人骨出土状況(東から)
			4号甕棺墓発掘状況 (外甕をはずした状況)(東から)
			4号甕棺墓発掘状況 (外甕をはずした状況)(北西から)
			4号甕棺墓発掘状況 (銅戈・鉄剣出土状況)(東から)
			4号甕棺墓発掘状況 (銅戈・鉄剣出土状況)(西から)
			4号甕棺墓発掘状況 (銅戈・鉄剣出土状況)(西から)

図版 19	4号甕棺墓人骨出土状況（東から） 4号甕棺墓人骨出土状況（東から）	図版 35	1～3号木棺墓発掘状況（東から） 1号木棺墓発掘状況（北から）
図版 20	4号甕棺墓管玉出土状況（東から） 4号甕棺墓管玉出土状況（東から）	図版 36	1号木棺墓銅剣・把頭飾出土状況（北から） 1号木棺墓銅剣・把頭飾出土状況（東から）
図版 21	4号甕棺墓管玉出土状況（東から） 4号甕棺墓管玉出土状況（東から）	図版 37	1号木棺墓銅剣・把頭飾出土状況（北から） 1号木棺墓銅剣取上げ後
図版 22	4号甕棺墓管玉勾玉出土状況（東から） 4号甕棺墓出土状況（東から）	図版 38	1号木棺墓木棺南側土層 1号木棺墓木棺北側土層
図版 23	4号甕棺墓発掘状況（東から） 4号甕棺墓発掘状況（北から）	図版 39	2号木棺墓発掘状況（北から） 2号木棺墓発掘状況（東から）
図版 24	5号甕棺墓発掘状況（東から） 5号甕棺墓発掘状況（東から）	図版 40	経塚検出状況（南東から） 経塚発掘状況（北西から）
図版 25	5号甕棺墓発掘状況（真上から） 5号甕棺墓人骨出土状況（真上から）	図版 41	経塚発掘状況（北から） 経筒発掘状況（北から）
図版 26	5号甕棺墓人骨出土状況（西から） 5号甕棺墓人骨出土状況（北から）	図版 42	経筒発掘状況（北から） 経塚発掘状況（北から）
図版 27	5号甕棺墓人骨出土状況（北から） 5号甕棺墓人骨出土状況（西から）	図版 43	貯蔵穴・溝出土遺物
図版 28	5号甕棺墓貝輪出土状況（東から） 5号甕棺墓貝輪出土状況（北から）	図版 44	溝・木棺・その他の出土遺物
図版 29	5号甕棺墓発掘状況（真上から） 5号甕棺墓勾玉出土状況（真上から）	図版 45	1号甕棺
図版 30	6号甕棺墓石組検出状況（西から） 6号甕棺墓発掘状況（北から）	図版 46	2号甕棺
図版 31	6号甕棺墓発掘状況（北から） 6号甕棺墓発掘状況（東から）	図版 47	2号甕棺墓出土銅戈
図版 32	6号甕棺墓発掘状況（北から） 6号甕棺墓発掘状況（東から）	図版 48	3号甕棺
図版 33	7号甕棺墓発掘状況（北から） 7号甕棺墓発掘状況（西から）	図版 49	4号甕棺
図版 34	① 1号甕棺スタンプ ② 2号甕棺スタンプ ③ 3号甕棺スタンプ ④ 4号甕棺スタンプ ⑤ 5号甕棺スタンプ ⑥ 6号甕棺スタンプ ⑦ 7号甕棺スタンプ ⑧ 甕棺のスタンプ保存状況	図版 50	4号甕棺
		図版 51	4号甕棺墓出土銅戈
		図版 52	4号甕棺墓出土鉄剣
		図版 53	4号甕棺墓出土管玉
		図版 54	4号甕棺墓出土貝輪①
		図版 55	4号甕棺墓出土貝輪②・勾玉
		図版 56	5号甕棺
		図版 57	5号甕棺墓出土貝輪①
		図版 58	5号甕棺墓出土貝輪②・勾玉
		図版 59	6号甕棺
		図版 60	7号甕棺
		図版 61	1号木棺墓出土銅剣・把頭飾
		図版 62	1号経塚出土遺物

挿 図 目 次

写真 1	調査風景	写真 11	肋骨・椎骨下管玉出土状況
写真 2	現地説明風景	写真 12	寛骨上管玉出土状況
写真 3	調査風景	写真 13	4号甕棺墓
写真 4	調査風景	写真 14	5号甕棺墓
写真 5	人骨取上げ風景	写真 15	貝輪出土状況
写真 6	調査風景	写真 16	貝輪出土状況
写真 7	1号甕棺墓	写真 17	6号甕棺墓
写真 8	2号甕棺墓	写真 18	7号甕棺墓
写真 9	3号甕棺墓	写真 19	1号木棺墓
写真 10	4号甕棺墓	写真 20	1号経塚
		写真 21	経筒蓋内面

表 目 次

第1表	甕棺観察表	第5表	出土金属器観察表
第2表	出土土器観察表	第6表	出土玉類観察表
第3表	出土石器観察表	第7表	出土貝輪観察表
第4表	出土土製品観察表		

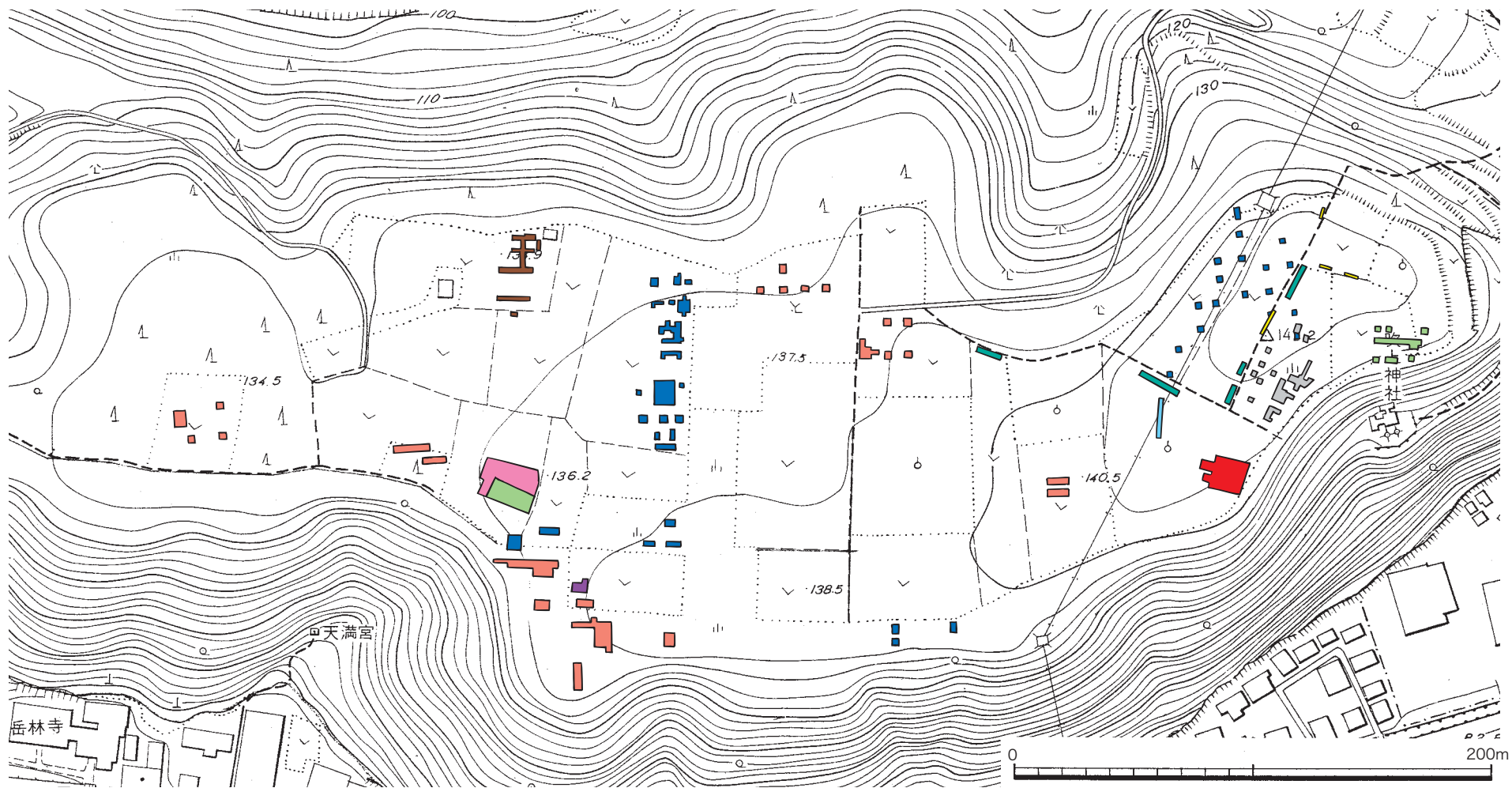


指定買い上げ後の6次調査区

第11章 6次調査の記録



吹上原台地空中写真（白印は調査位置）



- 1次 ■
- 2次 ■
- 3次 ■
- 4次 ■
- 5次 ■
- 6次 ■
- 7次 ■
- 8次 ■
- 9次 ■
- 10次 ■
- 11次 ■

第1図 6次調査の位置 (1/2500)

第1節 調査の概要（第1・2図）

今回の6次調査は、平成6年12月9日付けでエヌ・ティ・ティ九州移動通信網株式会社から日田無線基地局新設計画に伴う埋蔵文化財の所在の有無の照会文書の提出を受けたことに端を発する。この事前照会対象地は周知の包蔵地である吹上遺跡に該当するとともに、過去確認調査を行った3次調査地点に隣接しており、遺構の広がりが予測された。そこで、1月にはその取扱いについての事前協議が必要である旨の文書通知を行い、3月に事業者との事前協議を重ねた。その結果、対象地のうち鉄塔建設予定部分は工法上の保存は困難であると判断され、日田市教育委員会が5月から発掘調査を実施することとなった。その後、鉄塔建設範囲約260㎡を対象として平成7年5月1日付けで日田市教育委員会が受託事業として契約を結び、5月1日～6月16日までの期間で発掘調査を実施することとなった。

調査は平成7年5月8日に着手し、人力により表土除去作業を開始した。5月後半には遺構の検出を行い貯蔵穴群及び溝などの堀下げが行われ、甕棺墓群の存在が認められた。そうしたなか6月9日には経塚、6月13日には4号甕棺墓に人骨及び銅戈・鉄剣・貝輪等の副葬品、6月14日には5号甕棺墓に人骨及び貝輪の副葬品、6月15日には2号甕棺墓に銅戈の副葬品が確認された。これらの事実確認に併行し、福岡大学小田富士雄先生、別府大学後藤宗俊・賀川光夫両先生、九州大学田中良之先生や大分県文化課職員に、現地において遺跡の価値やその調査方法、全面的な保存の必要性等様々な指導を受けた。このような指導のもと、大分県からの現状保存及び将来的な活用を行うべき旨の文書通知を受け、日田市として遺跡の現状保存・公有化の方針を固めることとなった。そこで、事業者との綿密な協議を重ね、対象地の開発中止及び現状保存が図られることとなり、原因者負担による調査から国庫補助事業による確認調査へと切り替えることとなった。この保存に至る経過については吹上遺跡Ⅰ第1章第2節に詳細を記している。

このように全面保存へ向けての取り組みが進むなか、職員は副葬品の盗難等に対応するために昼夜を通した警備に追われ、6月28日には九州大学の協力のもと人骨及び副葬品の取上げが開始されるとともに第1回目の記者発表を行った。こうして甕棺墓を中心とした調査が順調に進むなか、福岡大学武末純一先生をはじめとする多くの来訪者に貴重な意見をいただくとともに、7月2日には現地見学会を開催し豪雨の中多数の見学者が訪れた。このように広報活動が行われるとともに7月14日には人骨の取上げ作業が完了し、続いて7月17日には発掘調査指導委員会を開催し、今後の調査や副葬遺物等の保存処理についての方針が決定した。この結果を受け、各甕棺墓の詳細な調査が実施され、8月7日には鉄剣の取上げが行われ、続く9月後半まで甕棺墓の掘方の確認や土坑の完掘がなされた。9月28日には1号木棺墓の堀下げ作業が開始され、10月2日には銅剣と把頭飾の存在が認められたことから、福岡大学小田富士雄先生をはじめとして調査の指導を受け、10月11日には2回目となる記者発表を実施した。そのような中、10月21日から調査速報展を開始し、22日からは6次調査に関わる公開講座や特別講演会を実施した。10月半ばからは県立博物館山田学芸員の指導のもと、甕棺墓の完掘による破壊を避けるため、甕棺の取上げ後土圧スタンプの樹脂による固化作業が実施され、11月1日には取上げが完了した。11月2日からは遺構図化作業に併行して部分的に真砂土による埋め戻し作業を開始し、翌年1月23日には全ての作業を終了し、現在対象地は公有化が完了して保存が図られている。

調査内容の一部はすでに概要報告等（註1参照）にまとめているので本報告もそれを踏襲してい

るが、一部変更が生じた部分については本報告をもって正式な報告としたい。

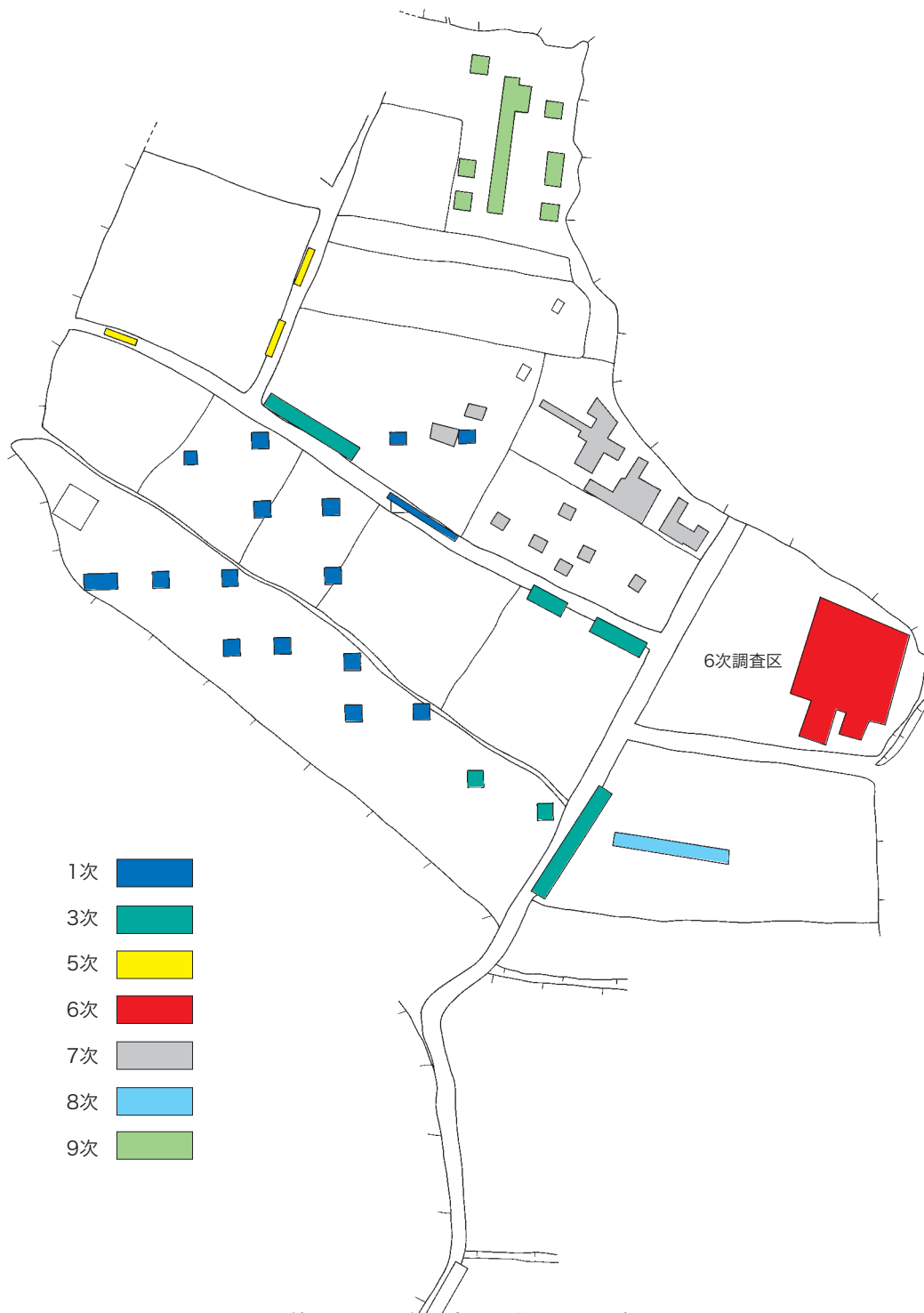
6次調査の最終的な調査面積は227㎡で、史跡に指定された面積は431㎡である。

6次調査の報告に関する平成17年度の組織体制は、以下のとおりである。

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 諫山康雄（日田市教育委員会教育長）

調査指導者 玉川剛司（別府大学講師）



第2図 6次調査区の位置図 (1/1000)

調査統括 後藤清（同文化財保護課課長）

調査事務 高倉隆人（同文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長）

伊藤京子（同文化財保護課専門員）、中村邦宏（同文化財保護課主事補）

報告書担当 土居和幸（同文化財保護課副主幹）、渡邊隆行（同文化財保護課主任）

調査員 今田秀樹（同文化財保護課主任）、行時桂子（同文化財保護課主任）

若杉竜太（同文化財保護課主任）、矢羽田幸宏（同文化財保護課主事補）

なお、報告書に掲載した挿図・図版作成や助言をいただいた協力者は次のとおりである。

協力者 岩永省三、岩井顕彦、石井博司、木下尚子、金宰賢、長谷川和美、溝口孝司
また、遺物整理については平成14年度に実施している。



写真1 調査風景



写真2 現地説明風景



写真3 調査風景



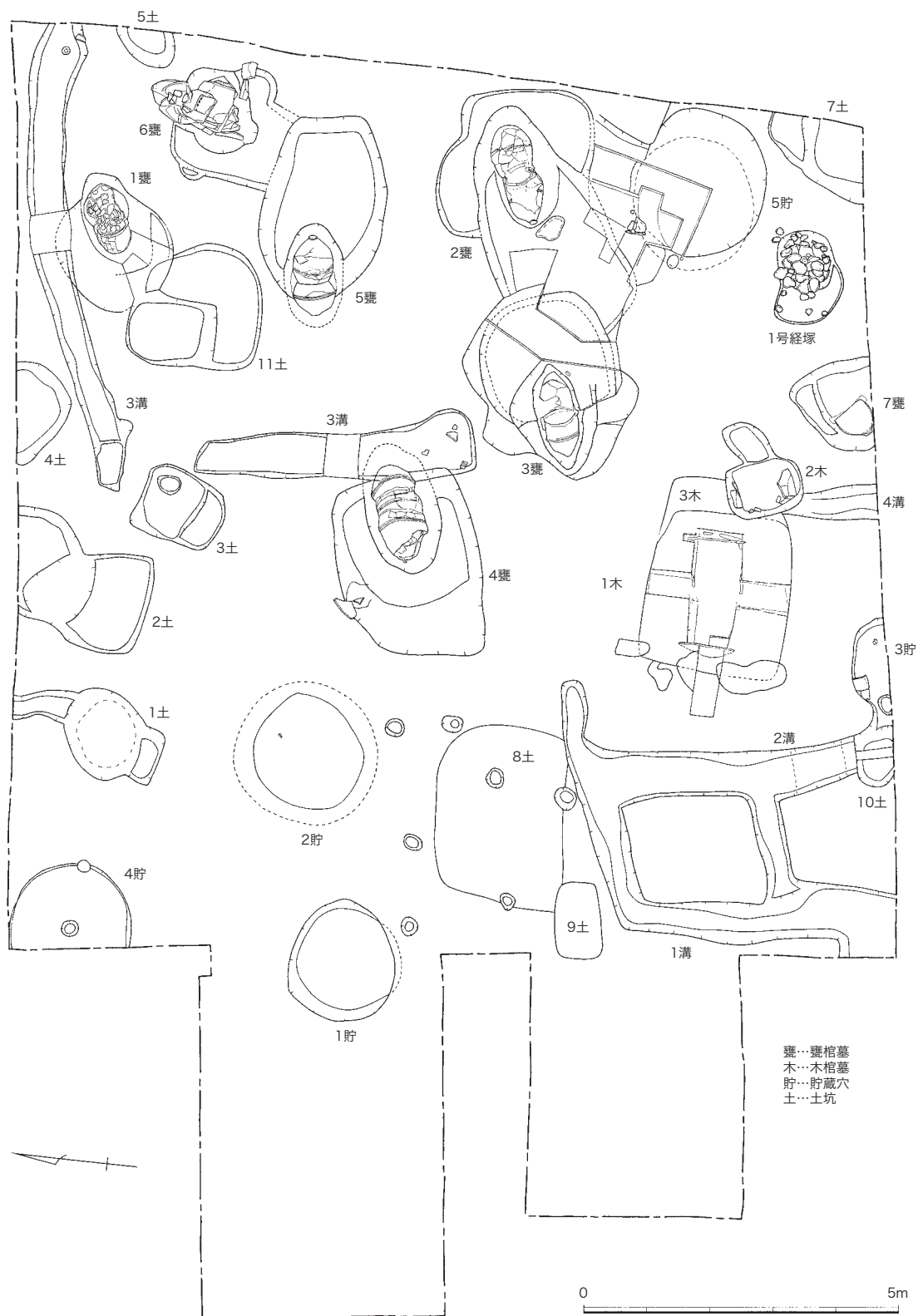
写真4 調査風景



写真5 人骨取上げ風景



写真6 調査風景



第3図 6次調査区遺構配置図 (1/100)

第2節 調査の内容 (第3図)

調査区は南側数mほどで比高差約60m程の極端な崖になっており、眼下に日田盆地中心部が広がる吹上原台地上でも最も見晴らしのよい好立地と言える。調査区は鉄塔及び付帯施設を対象範囲としたため、約14×15m四角形の西辺に2箇所の突出部をもつ形状を呈する。調査区内での地形はほぼ平坦で標高約141.5mを図り、現地表下約30 cm程度で黄褐色ローム土の地山が検出された。ローム土に掘りこんだ遺構群の埋土は、暗茶褐色のものが多く見られた。検出された遺構は成人用甕棺墓7基・木棺墓3基・経塚1基・貯蔵穴5基・土坑8基・溝4条・柱穴で、このうち墳墓群は調査区中央より東側に多く見られる。

検出された遺構のうち、土坑や貯蔵穴はほぼ完掘しているのに対し、溝はベルトを残し、甕棺墓と経塚は掘方等の完掘を避け、部分的に上面での検出のみに一部留めている。特に甕棺墓は掘方等の完掘をせず、主体部のみの調査を行うことで保存に努めた。保存手法として、甕棺取上げ後に土圧スタンプを残す方法を採用したため、甕棺墓の構造等全容を解明するには至っていない。そのため詳細な記録等が作成出来ておらず、後述する詳細な記録において不十分な点があることは御了承いただきたい。また、今回の報告は既に概要報告等^註がなされており、その報告等と一部異なる点があるが本報告を以って正式な報告とする。なお主な変更点は、8号甕棺墓としていた遺構は5号貯蔵穴の一部であったものと考えられ、本報告において欠番とすることとした。

以下に各遺構毎にまとめる。

(1) 貯蔵穴

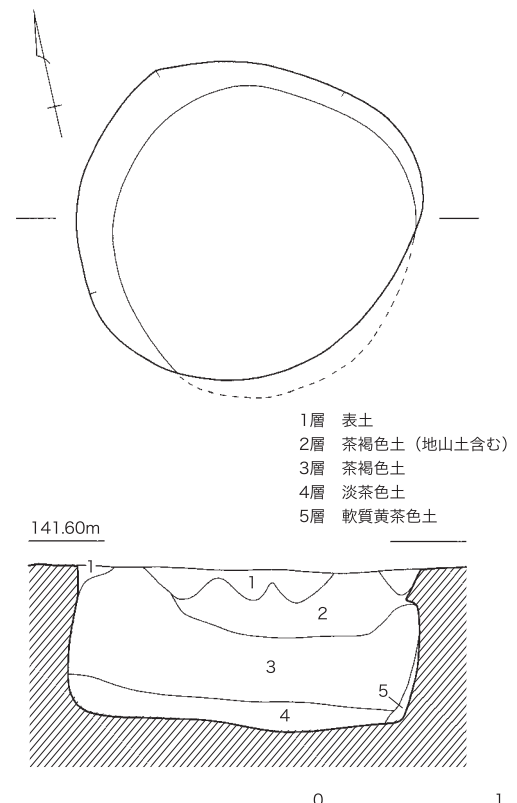
全部で5基の貯蔵穴が確認されている。うち3～5号貯蔵穴の番号は調査期間中に数度入れ替わっており、5号貯蔵穴に至っては土坑や甕棺墓としても扱われている。これらの混乱は整理段階において解消されていない可能性が高く、以下の報告においても遺物が混在している可能性を否定できない。

1号貯蔵穴 (第4図、図版2)

調査区西側で検出した袋状貯蔵穴である。円形を呈し、断面はやや袋状に窄まる。確認面での規模は径約1.7m、深さ約0.85m、底径約1.7mを測り、床面は平坦である。埋土は主に2～4層がレンズ状に堆積している。このうち2層は黄茶褐色ブロックを多く含む茶褐色土で、その下層の3層に茶褐色土、4層に淡茶色土がレンズ状に入る。3・4層の堆積後に2層によって埋め戻された可能性が想定される。また5層は軟性が高く地山崩落土の可能性もある。

出土遺物 (第6図、図版43)

第6図1は貯蔵穴上層より出土した遺物である。甕の胴部破片で外面に沈線が巡り外面は沈線より上がヨコハケで沈線下はタテハケ調整で、中期初頭の範疇に収まるものとする。



第4図 1号貯蔵穴実測図 (1/40)

2号貯蔵穴（第5図、図版2）

調査区中央よりやや西側で検出された袋状貯蔵穴である。上面を削平されているのか、かなり浅いが、平面形はほぼ円形を呈し、断面は大きく外へ開く袋状である。確認面での規模は径約1.8m、深さ約0.7m、底径約2.3mを測り、床面はほぼ平坦である。埋土は主に1・2層に分けられ、ブロックが見られない茶褐色土・黄茶褐色土によって自然に堆積したものと思われる。

出土遺物（第6図、図版43）

2～10は出土遺物で2・4・6・9は上層、それ以外は下層より出土した。2は甕の口縁で、如意形を呈し、口縁端部に刻目を施し頸部下に1条の沈線を巡らす。内外ともにハケ調整。3は壺か。口縁端部に刻目を施す。4は甕の口縁から胴部下位である。胴部に突帯を持ち、その頂部に刻目を施す。5は壺の頸部で、外面に3列に亘って羽状文が施される。内外共にナデ調整である。6～10は甕の底部である。うち6～9は平底で外面ハケ調整である。10はややアゲ底を呈する。何れも概ね中期初頭～前半代に収まるものと考えたい。

3号貯蔵穴（第5図、図版3）

調査区南端で検出された貯蔵穴で、10号土坑、1・2号溝と切り合うもののその前後関係は不明である。南側は調査区の制約を受けており、未検出であるが、平面形はほぼ円形を呈するものと思われる。底面にこの遺構に伴うものか不明な柱穴が掘りこまれ、断面は逆台形状を呈する。土坑とも考えられるが遺物が出土したことなどからここでは貯蔵穴として報告する。確認面での規模東西幅約1.4m、南北長約0.5m、深さ約40cmを測る。

出土遺物（第6図、図版43）

第6図11～14は出土遺物である。11・12は甕の口縁部である。如意形を呈する。13、14は甕の底部である。13は胴部が張り出し、内外ハケ調整である。14は胴部にかけて外側に開く平底である。概ね中期前半に収まり、13は後期の所産か。

4号貯蔵穴（第5図、図版3）

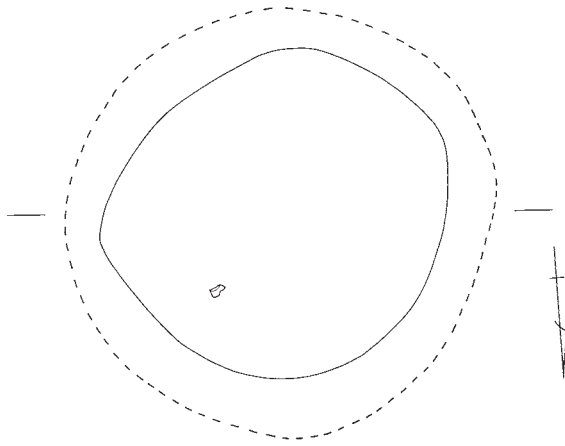
調査区北西端で検出された貯蔵穴で、西側は調査区の制約を受けており、未検出であるが、平面形はほぼ円形を呈し、底面に柱穴が掘りこまれ、断面は台形状を呈する。土坑とも考えられるが遺物が出土したことなどからここでは貯蔵穴として報告する。確認面での規模は径約1.9m、深さ約0.4mを測り、床面はほぼ平坦である。

出土遺物（第6図、図版43）

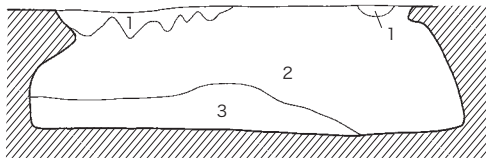
第6図15～20は出土遺物である。15・16は甕で、口縁部は如意形を呈する。15は口縁端部に刻目が施され、頸部下に断面三角形の突帯が巡り、その頂部には刻目が施される。外面はハケ調整である。17は大型成人用甕棺の口縁部破片である。口縁部はT字状の鋤先口縁を呈し、端部は比較的シャープに作られる。18～20は甕の底部で平底を呈する。いずれも前期末～中期前半に収まるものと考えられ、うち17は須玖式と考えられる。

5号貯蔵穴（第5図、図版4）

調査区東側で検出された袋状貯蔵穴で、2号甕棺墓、経塚に隣接している。平面形はほぼ円形を呈し、断面は大きく外へ開く袋状である。確認面での規模は径約2.3m、深さ約1.5m、底径約2.0mを測り、床面は東側がやや窪む。埋土は大きくに3層に分けられ、上層は地山ブロックが混じる3層や比較的暗色の2層により一気に埋没したものと想定される。中層は比較的明るい茶褐色系の

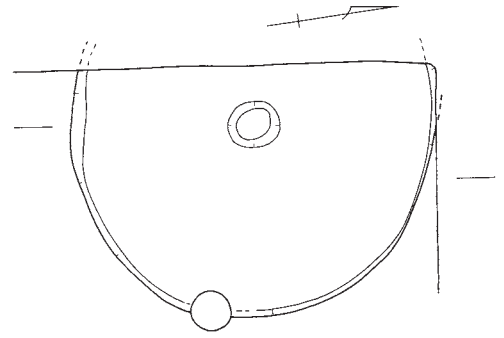


141.60m

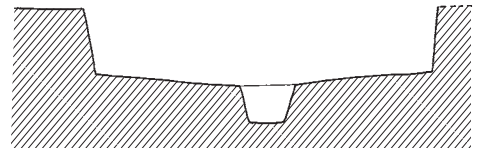


2号貯蔵穴

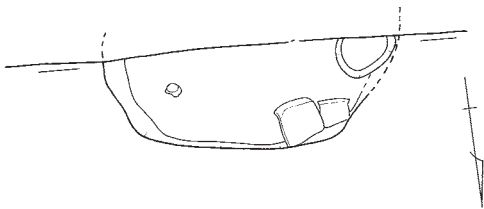
- 1層 表土
- 2層 茶褐色土
- 3層 黄茶褐色土



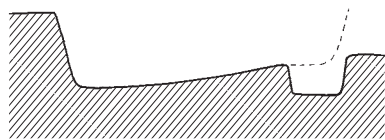
141.60m



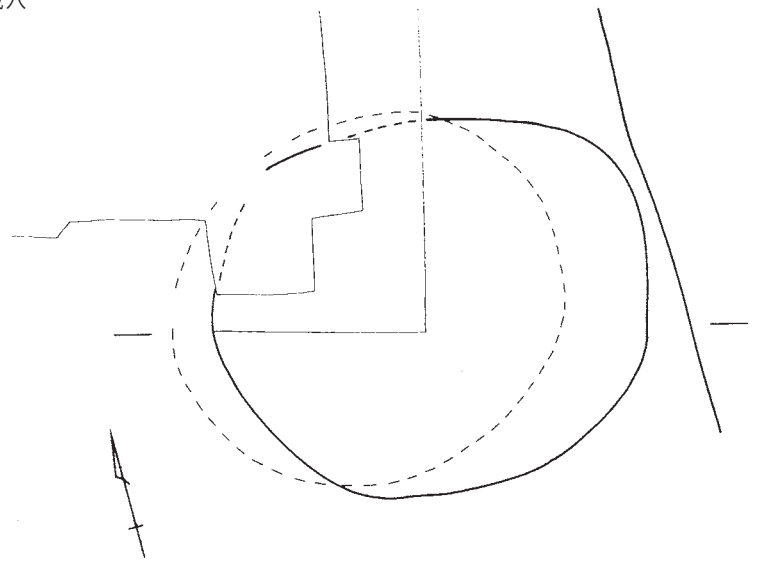
4号貯蔵穴



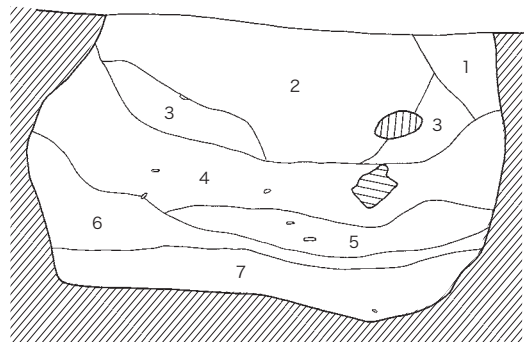
141.50m



3号貯蔵穴



141.60m

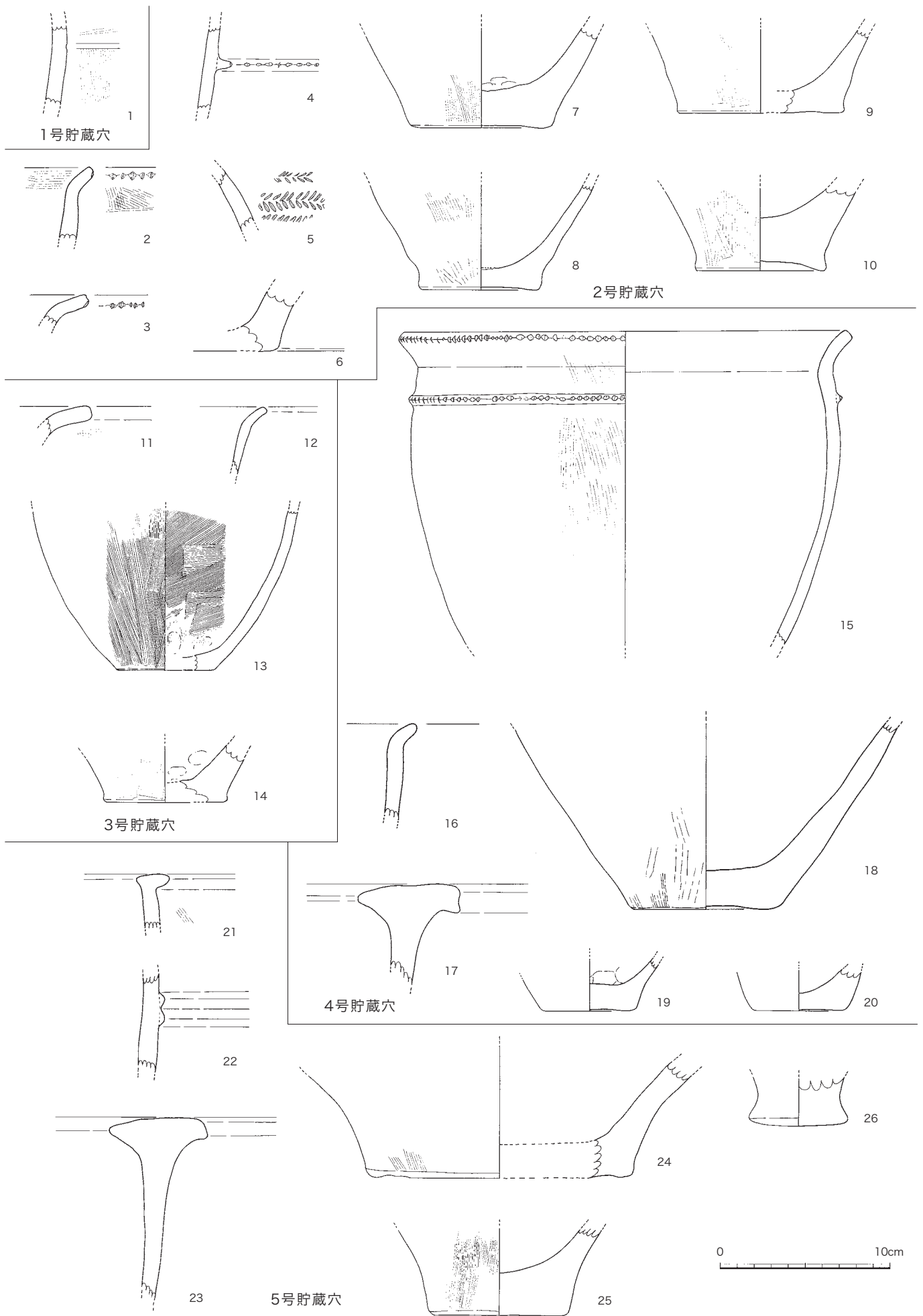


5号貯蔵穴

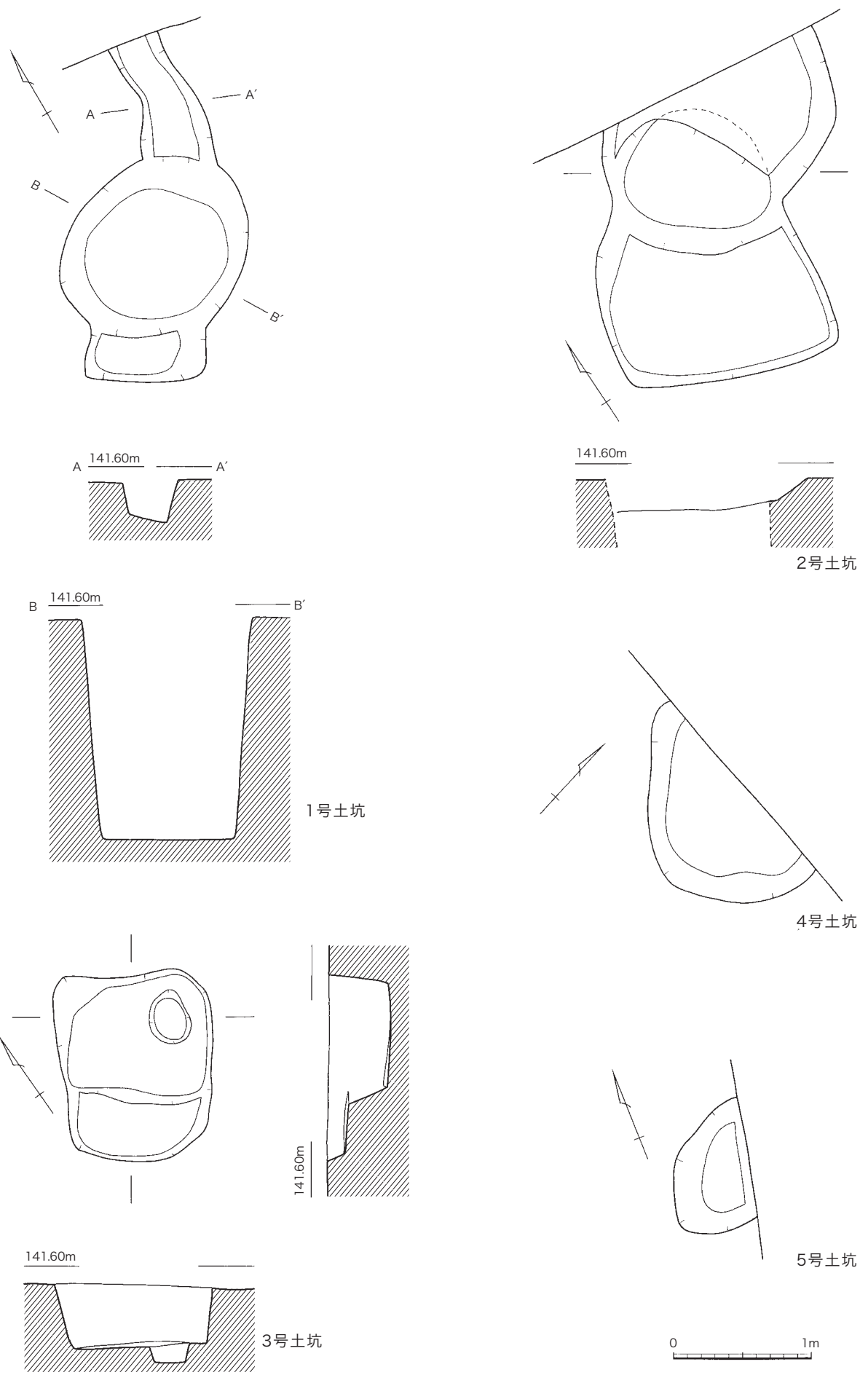
- 1層 青灰色土
- 2層 暗黄褐色土
- 3層 茶褐色土 (地山土含む)
- 4層 明茶褐色土
- 5層 茶褐色土
- 6層 黒色土
- 7層 暗灰褐色土



第5図 2～5号貯蔵穴実測図 (1/40)



第6図 貯藏穴出土遺物実測図 (1/3)



第7图 1~5号土坑实测图 (1/40)

4・5層がレンズ状に堆積している。下層では炭化物による可能性が高い黒色土の6層が薄く堆積し、最下層にも黒色系の7層が堆積し、有機物廃棄の可能性が窺える。

出土遺物（第6図、図版43）

21～26は出土遺物で、上下層等は混在により不明である。21は甕の口縁部で亀ノ甲タイプである。外面ハケメが施される。22は甕の胴部かM字状突帯が巡る。23は大型成人用甕棺の口縁部で、T字状の鋤先口縁を呈する。24～26は平底の底部で、うち24は大きく外に開くことから壺と思われる。いずれも概ね中期初頭～前半に収まるものと思われる。また23は須玖式と想定される。

(2) 土坑

調査区全体に分布しており、不定形のものが多い。このうち一部の図面において不備があるため断面を掲載出来ていない。また8・9号は未掘のため写真のみを掲載し（図版6）、6号は欠番となっている。

1号土坑（第7図）

調査区西端にて検出された土坑である。土坑の両側に溝状の掘り込みが見られる。溝部分は南北方向に伸び、確認面での幅約50cm、深さ約30cmを図る。土坑部分の平面形は円形を呈し、確認面での規模は径約1.3m、深さ約1.6mを測り、床面はほぼ平坦である。土坑の中でも最も深い土坑で、貯蔵穴等の可能性も考えられる。

2号土坑（第7図、図版4）

調査区北側にて検出された土坑で、1・3号土坑に隣接し一部が調査区外へと続く。平面形は不整形を呈し、南北にテラス状の段がつき、中心部が若干深い土坑である。確認面での規模は、長さ約 $2.3m + a$ 、幅約1.7mを図る。床面は一部未掘のままのため詳細不明である。遺物の出土は見られなかった。

3号土坑（第7図、図版5）

調査区中央部にて検出された土坑である。平面形は隅丸方形を呈し、南側にテラス状の段がつき、床面は平坦である。確認面での規模は長さ約1.3m、幅約1.1m、検出面から床面までの深さは約40cmを測る。遺物の出土は見られなかった。

4号土坑（第7図）

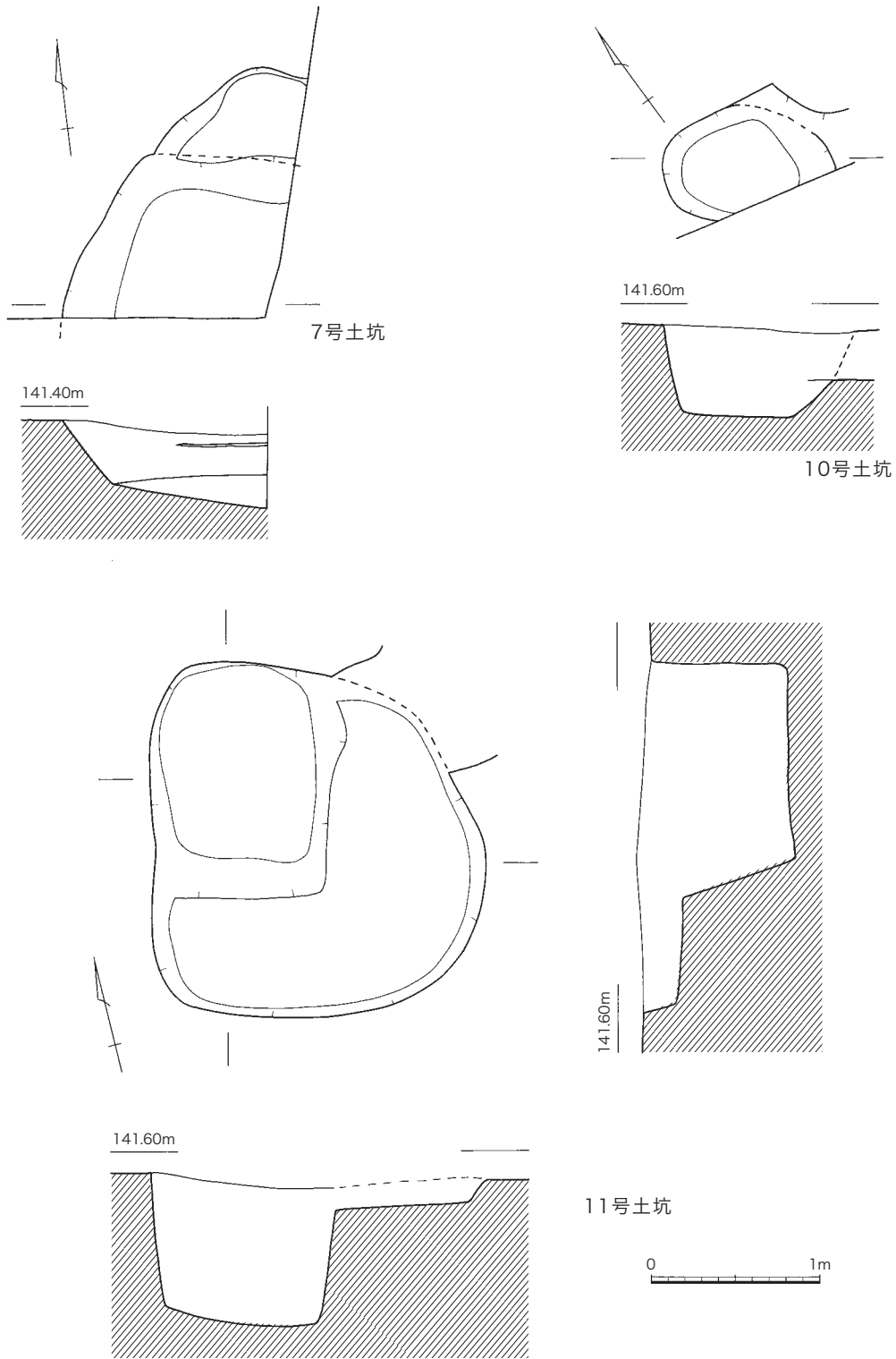
調査区北端にて検出された土坑で2号土坑・3号溝に近接する。北側は調査区の制限のため未検出である。平面形は不整形を呈し、確認面での規模は長さ約 $1.4m + a$ 、幅 $1.1m + a$ を測り、断面は図面不備により不明である。遺物の出土は見られなかった。

5号土坑（第7図）

調査区西側にて検出された土坑である。北側は調査区の制限のため未検出である。平面形は不整形を呈し、確認面での規模は長さ約90cm、幅60cmを測り断面は図面不備により不明である。遺物の出土は見られなかった。

7号土坑（第8図、図版5）

調査区南東隅にて検出された土坑である。調査区の制限のため半分以上が未検出である。平面形は不整形を呈し、確認面での規模は、長さ約1.6m、幅約1.2mを測り検出面から床面までの深さは約50cmを測り、床面は中央部がやや窪む。遺物の出土は見られなかった。



第8図 7～11号土坑実測図 (1/40)

10号土坑 (第8図)

調査区西側にて検出された土坑である。2号溝と切り合い関係にあるがその前後は不明で、南側は調査区の制限のため未検出である。平面形は楕円形を呈し、確認面での規模は長さ約1m、幅0.6m、検出面からの深さは約50cmを測り、床面はほぼ平坦である。遺物の出土は見られなかった。

11号土坑（第8図、図版6）

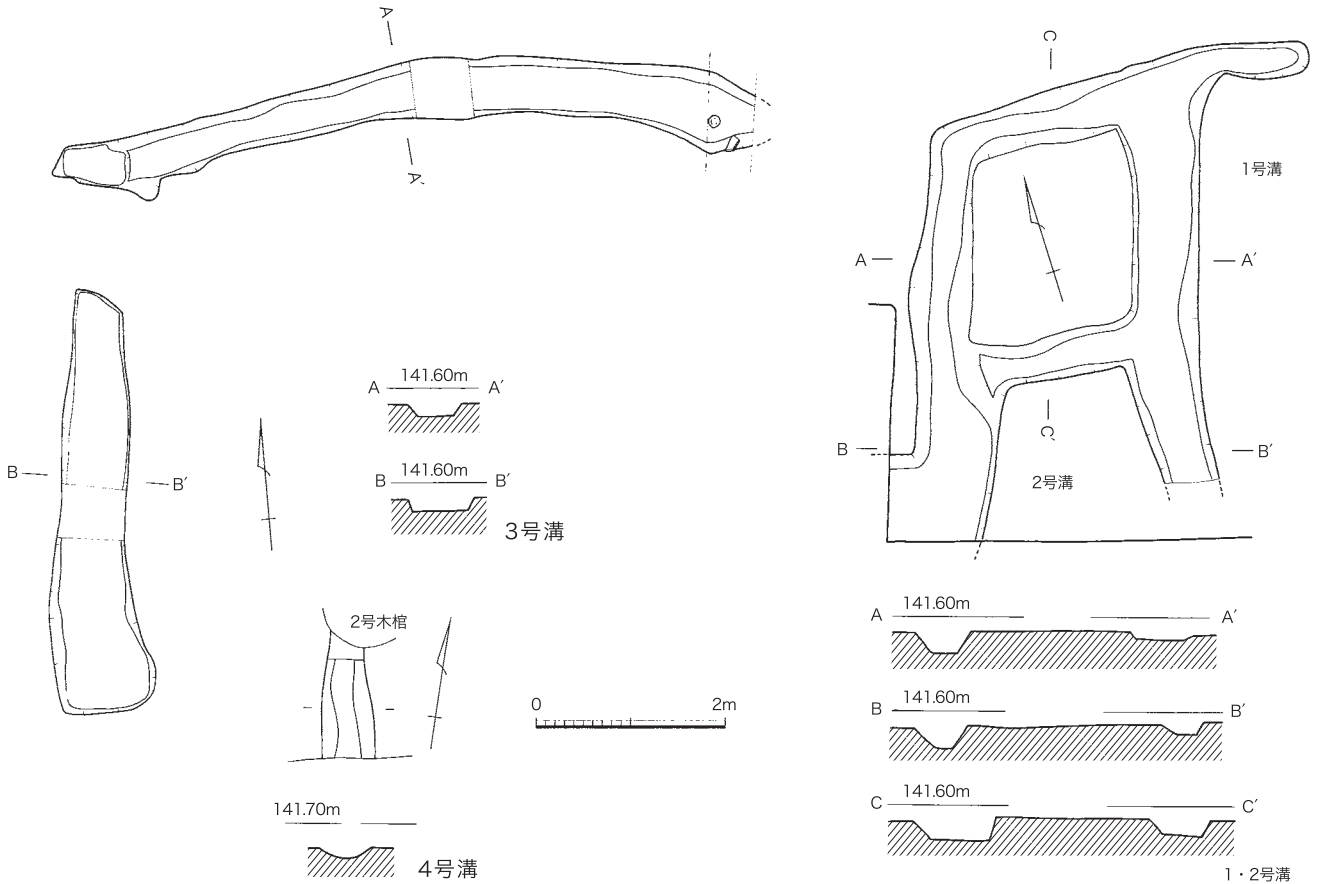
調査区東側にて検出された土坑で、1号甕棺墓との前後関係は不明である。平面形は不整形を呈し、北側隅が一段落ちる。確認面での規模は長さ約2.1m、幅約2m、検出面からの深さは約90cmを測り、床面はほぼ平坦である。遺物の出土は見られなかった。

(3) 溝

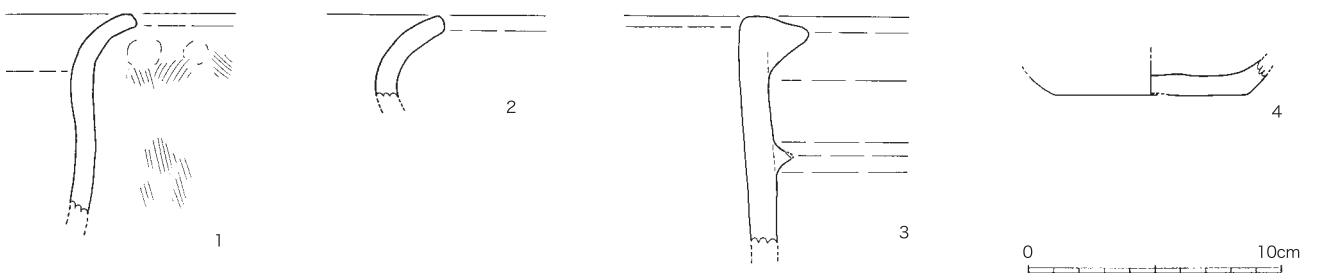
調査区内より4条の溝が検出された。方形状に巡る1・2号溝に対し、3・4号溝も規模の大きな方形状の溝の可能性ある。これらの溝は軸方向が揃っていることから、ほぼ同一時期の所産である可能性が高い。また1・2号溝は調査当初より重複して番号を付けており、本報告においても踏襲して報告する。

1・2号溝（第9図）

調査区南西隅にて検出された溝で、方形状区画南北2連で構成され、調査区外の南側へとさらに区画が続く可能性がある。北側の区画を1号溝、南側の区画を2号溝として調査時は設定していたよ



第9図 1～4号溝実測図 (1/80)



第10図 溝出土遺物実測図 (1/3)

うである。

検出面での規模は溝幅約50～70cm、深さ約10～20cmを測る。区画内幅は北側区画で東西軸約1.7m、南北軸約2mを測り、南側は東西幅約1.8mを測る。出土遺物は弥生土器のみであるが、軸方向が3号や4号溝と同じである事からほぼ同時期と捉えたい。

出土遺物（第10図、図版43）

1・2は弥生土器の甕で、如意形の口縁を呈する。このうち1は外面ハケ調整である。概ね中期初頭に属するものか。

3号溝（第9図）

調査区北東にて検出された溝で、1・4号甕棺墓を切っている。北西コーナー部は途切れているものの、一連の溝として取り扱う。検出面での規模は北側溝は幅約60cm、深さ約10cm、調査区内での長さ約7.4mを測り、西側溝は幅約90cm、深さ約10cm、調査区内での長さ約4.5mを測る。削平等により全貌は不明であるが方形区画になる可能性が考えられる。

出土遺物（第10図、図版43）

3は弥生土器甕である。口縁部は断面三角形状を呈し口縁部下には断面三角形状の突帯が巡る。4は土師器小皿である。口縁部を欠くが、底部は糸切りで径7.6cmを測る。弥生土器は中期前半で土師器小皿は11世紀中頃以降の所産か。

4号溝（第9図）

調査区南側にて検出された溝で、3号木棺墓の切り合い関係は不明である。調査区外へと伸び、また3号溝や2号木棺墓の土坑部と一連のものである可能性があるが、ここでは単独の溝として取り扱う。検出面での規模は幅約50cm、深さ約10cm、調査区内での長さ約1.3mを測る。出土遺物はないが、木棺墓より白磁壺の破片や土師器皿や小皿などが出土しており溝の遺物が混入している可能性が高い。これらの出土遺物（第37図5～7）の存在から12世紀代の範疇で捉えておきたい。

(4) 甕棺墓

成人用甕棺墓は7基確認された。その分布は中央より東側に多く見られる。合せ口甕棺が多く、そのうち6号は上甕の周囲に石を巡らせるなど特殊な構造が伺える。また7号甕棺墓は単棺か合せ口か不明である。これらのうち、3・4・5号甕棺墓から人骨の出土が見られ、2・4・5号甕棺墓から副葬品の出土が見られ、調査区中央部に集中していた。また、2・3号甕棺墓の切り合い関係は2⇒3号甕棺墓となり、5・6号甕棺墓は当初より切り合いを明確にしないまま掘り下げているため前後関係は不明である。8号甕棺墓は後の整理により貯蔵穴と想定されることから欠番としている。豊富な副葬品の発見後に現状以上の破壊を免れる方針で作業を進めていることから確認が不足している点が多々あり、また図面等に不備があることはあらかじめ御了承いただきたい。甕棺墓の型式については橋口氏の編年区分^{註2}を用い、時期比定は溝口氏のご教授による^{註3}。銅戈については岩永氏の分類を用いて説明する^{註4}。

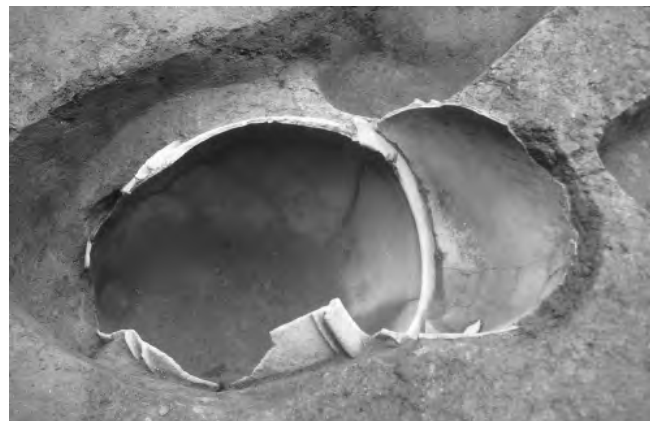
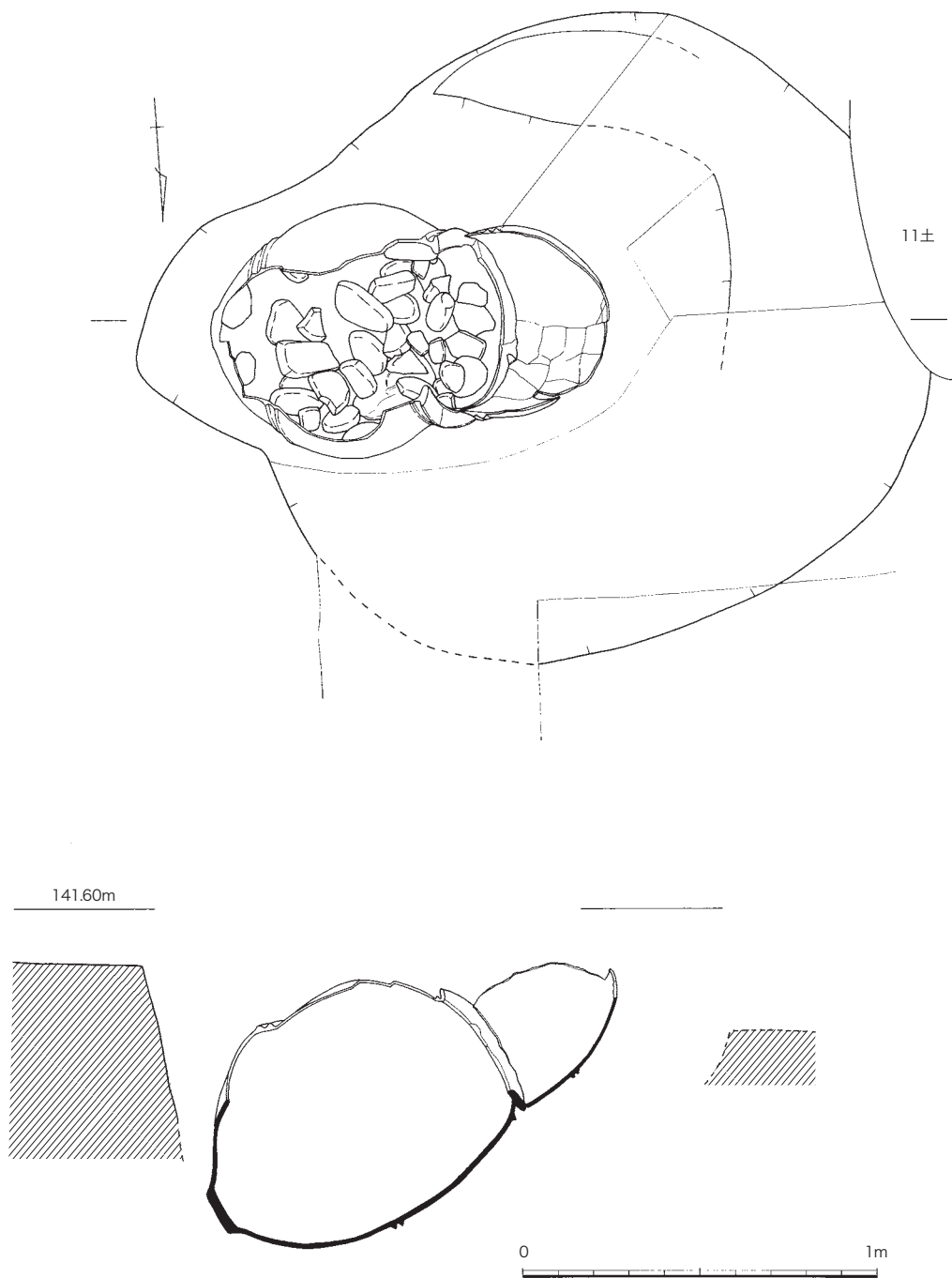


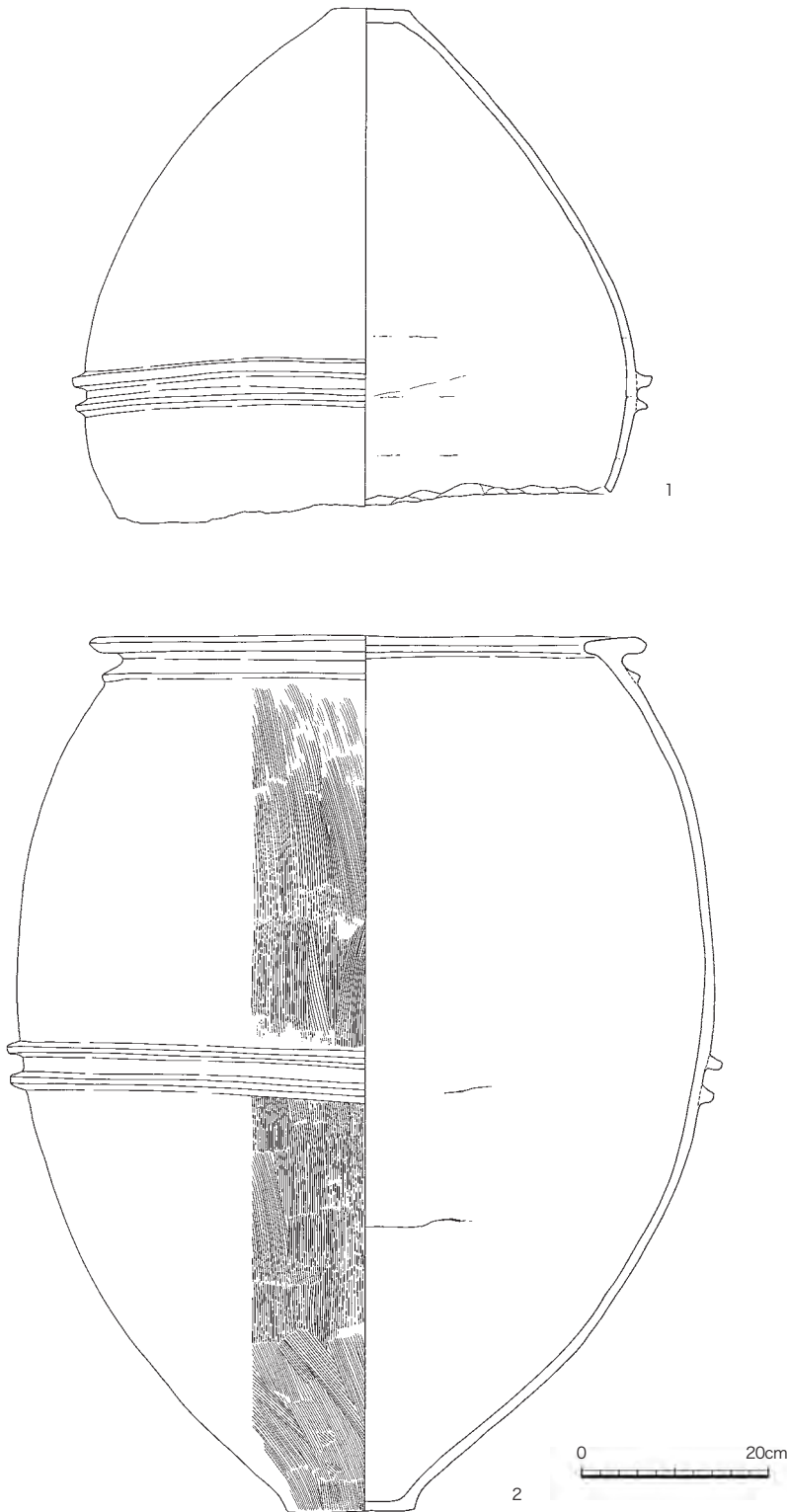
写真7 1号甕棺墓



第11図 1号甕棺墓実測図 (1/20)

1号甕棺墓 (第11・12図、図版7・45)

調査区中央部北東端に位置し、3号溝に一部切られ、南西側は土坑と切り合い関係にあるものの、前後関係は不明である。上甕上半部、下甕の一部は削平を受けている。甕棺墓本体のみを掘り下げ、墓壙はトレンチにより部分的に掘り下げていることから、墓壙の全容は把握できていない。また甕棺全体を出すために東側を一部掘りすぎている。平面形は検出面で確認される限り不整円形を呈し、復元長径約1.9m(現況2.3m)、短径約1.8m、甕棺最下部までの深さは確認面から約0.8mを測る。甕棺の挿入方向は東方向で、円形の墓壙に段を付けて掘り窪め、下甕を埋置する部分は東側



第12図 1号甕棺実測図 (1/8)

に横穴を掘り窪めていたものと思われる。甕棺内には多数の礫石が流入しており、甕棺墓が削平や崩落等により開口した際に詰め込まれたものと想定される。主軸 $N87^{\circ} W$ 、埋置角度 34° である。上甕は口縁打欠きで、鋤先状口縁を有する下甕と接口式に組合わさる。棺内には人骨や副葬品は見られなかった。

第12図1は上甕である。口縁部を頸部下半より打ち欠いた甕形土器である。打ち欠いた二次口縁径は52.4cm、胴部最大径58.5cm、底径8.1cm、残存高53.4cmである。最大径にあたる突帯はコの字状を呈し、若干斜めに2条巡らす。突帯以下、胴部下半にかけてすぼまり底部は平底である。器壁は9mm程度で、底部の厚みは1.5cm程度になる。胎土には角閃石、白色粒子が含まれる。焼成は良好で、色調は内外ともに黄橙色。外面はナデ仕上げで内面はハケのちナデ調整ヶ施される。幅約6cm単位で一部接合痕が観察される。比較的丁寧な作りと思われる。

2は下甕で口径59.4cm、胴部最大径79.5cm、底径13.6cm、器高93.2cmを測る。最大径は胴部上半にある。口縁部は鋤先状口縁をなして内側に低く傾斜し、端部は丸みを帯びる。頸部には1条の

シャープな断面三角形の突帯が1条巡る。胴部やや下半には2条の断面コの字状突帯が巡り、端部は丸みを帯びている。突帯以下、胴部下半にかけてすぼまり、底部は平底である。器壁は0.8～1.2cmで、底部の厚みは1cm程度である。胎土には石英、角閃石、白色粒子、赤色粒子を若干含むが精良である。焼成は良好で胴部中位には黒斑がみられる。色調は内外共に橙色で、調整は外面にタテハケ、内面はハケ後丁寧なナデ調整が施されている。幅約13cm単位で一部接合痕が観察される。

溝口氏の指摘をもとにしてまとめると、上甕は口縁部を打ち欠くものの、底部にかけて窄まらず、下甕とやや様相が異なる。下甕は口縁部が鋤先状をなし、やや内側に内傾している。口縁がたち上がりつつありことなどから、概ね上下甕ともに中期後半の立岩式に該当しその中でもやや新しいと捉え、KⅢc並行と考えたい。

2号甕棺墓（第13・14図、図版8・9・46）

調査区北西側に位置し、3号甕棺墓に切られ5号貯蔵穴に近接する。甕棺の崩落によるためか墓壙が崩落しており、特に東側には大きく落ち込みが見られ、甕棺は中央部から崩落した状態となっている。甕棺墓本体のみを掘り下げ、墓壙はトレンチ等により部分的に掘り下げていることから、全容は把握できていないものの、西側に広がる比較的大きな墓壙と考えられる。墓壙上面には長さ50cm、幅30cm、厚さ10cm程度の石が置かれており、標石の可能性が想定される。平面形は検出面で確認される限り不整長方形を呈し、復元長約3.1m(現況3.95m)、幅約2.1m、甕棺最下部までの深さは確認面から約1.35mを測る。甕棺の挿入方向は東方向で、方形の墓壙に段を付け、下甕を埋置する部分は東側に横穴を掘り窪めていたものと思われる。甕棺墓接合部直上には長さ60cm、幅30cmの板状大石が崩落しており、本来標石として使用されていた石が崩落した可能性が高い。主軸N91°W、埋置角度30°である。上下棺ともに鋤先状口縁を有し接口式に組合わさる。この接合部周辺には目貼り粘土が施されており丁寧な充填が予測される。

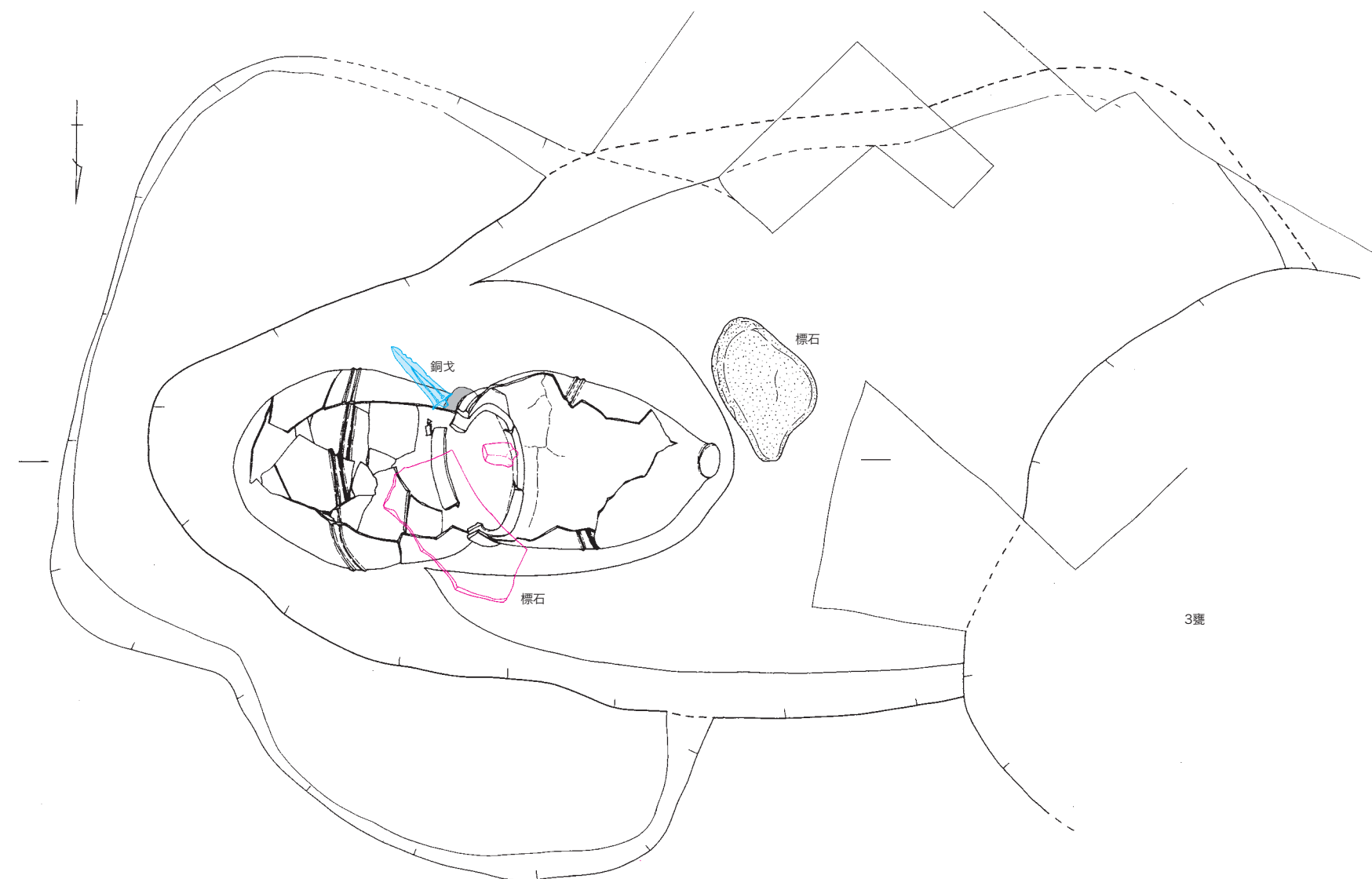
この接合部棺外の南側には銅戈が切先を南東に向けて副葬されていた。甕棺の崩落によりこの近辺の土と一緒に移動している可能性が高く、本来は主体部と平行していた可能性がある。棺内には人骨や副葬品は見られなかった。

第14図1は上甕である。口径55.7cm、胴部最大径66cm、底径11cm、器高85cmである。口縁部は鋤先状を呈するものの内側への突出は小さく、僅かに内傾しており、端部は上方に傾斜して下方に垂れ下がり、比較的シャープに作られる。頸部には断面三角形状の突帯が1条巡り、胴部最大径よりやや下半に断面コの字状を呈する突帯が2条巡る。胴部ははやや直線的にのびて突帯以下、胴部下半にかけてすぼまり、底部は薄い平底を呈している。器壁は0.8cmで、底部の厚みは0.8cm程度である。胎土には石英・角閃石を含む。焼成は良好で胴部中位～下部にかけて黒斑がみられる。色調は内外共に黄橙色で、調整は外面が風化が著しいもののナデ、内面は丁寧なナデ調整が施されている。図化していないが内面はハケ調整のちナデと思われる。また外面には幅5cm程度の棒状タタキが認められる。

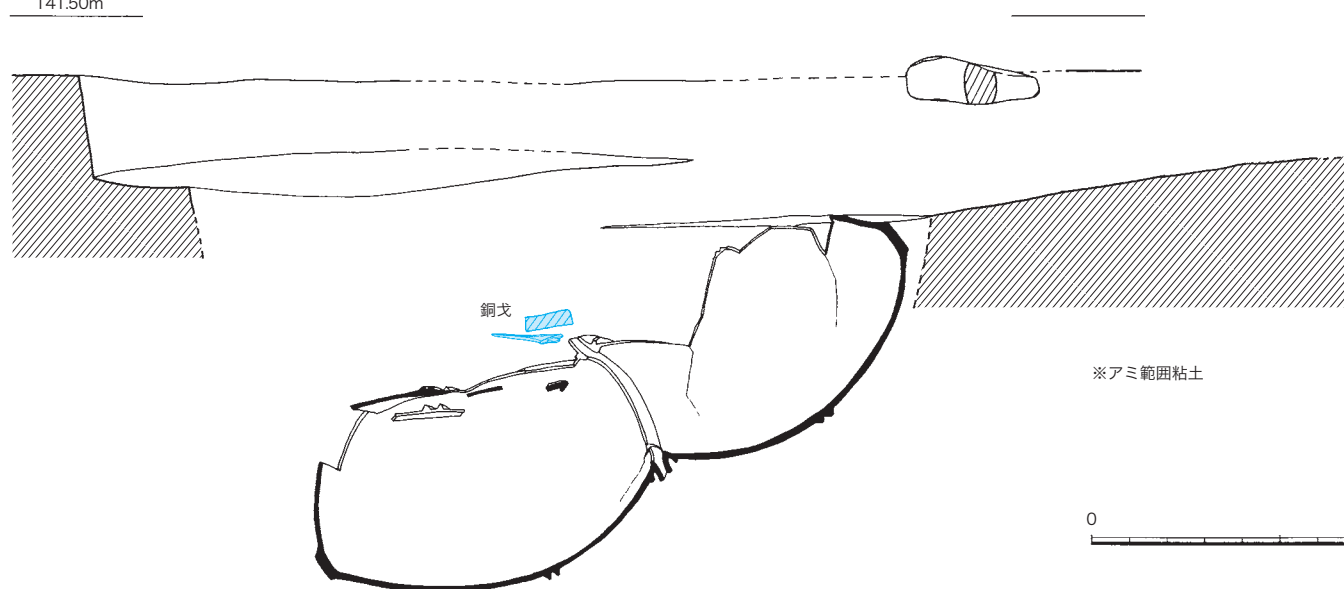
2は下甕である。口径53.4cm、胴部最大径72cm、底径12.4cm、器高92.2cmである。口縁部は鋤先状を呈するものの内側への突出は小さく、上



写真8 2号甕棺墓



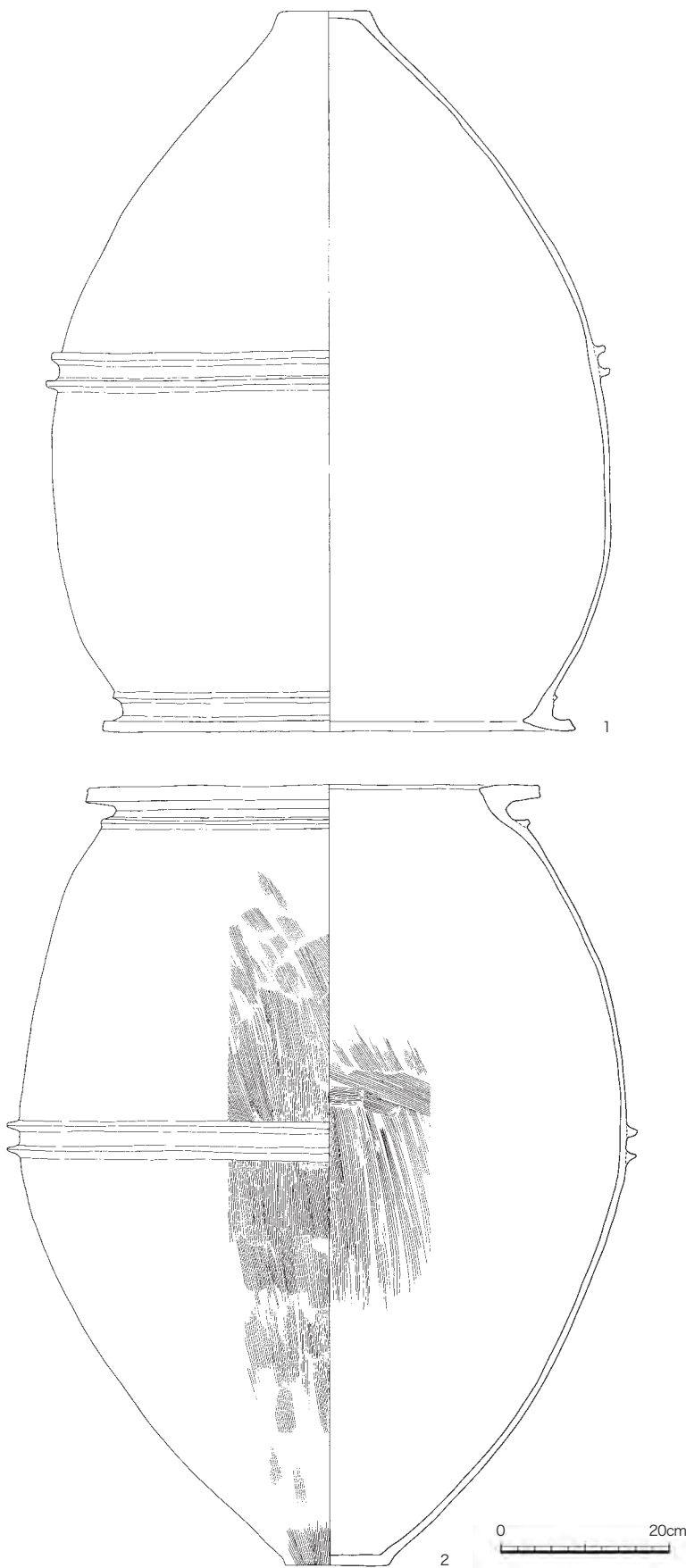
141.50m



※アミ範囲粘土

0 1m

第13図 2号甕棺墓実測図 (1/20)



第14図 2号甕棺実測図 (1/8)

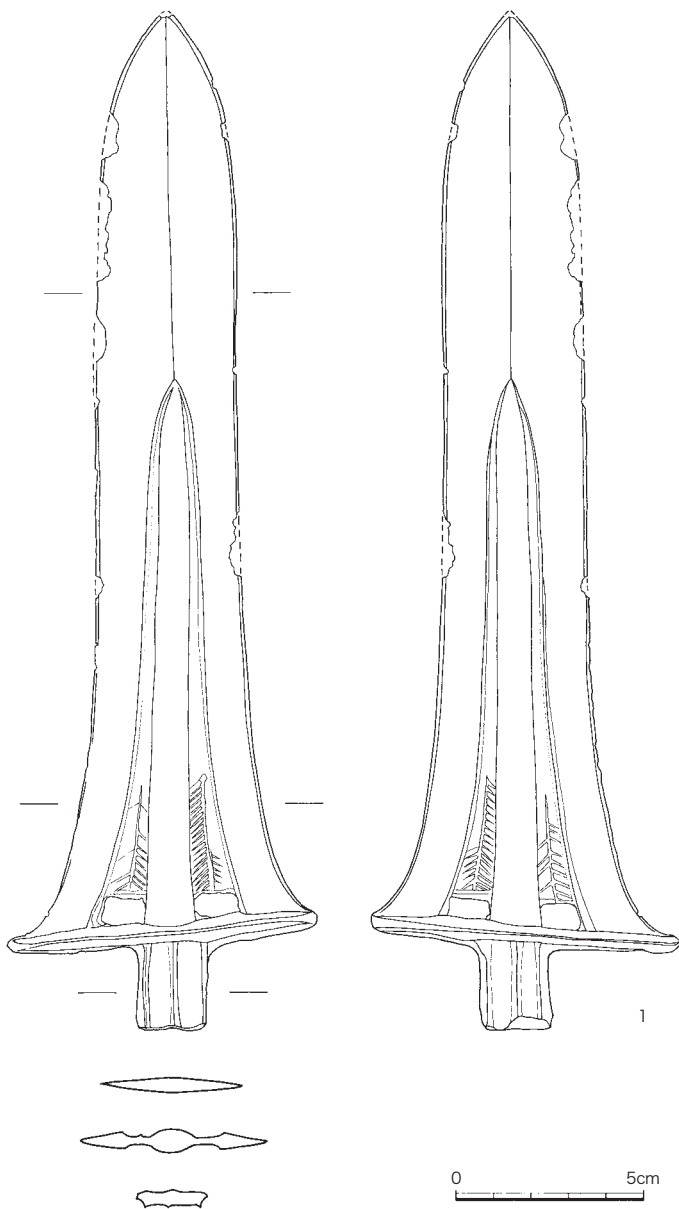
部は平行をなして端部は比較的シャープに作られる。頸部には断面コの字状の突帯が1条巡り、胴部最大径に断面三角形状を呈する突帯が2条巡る。胴部は卵型に張り出して突帯以下、胴部下半にかけてすぼまり、底部は薄い平底を呈している。器壁は0.6～0.8cmとかなり薄く、底部の厚みは1.1cm程度である。胎土には石英・長石・角閃石・金雲母を含み、焼成は良好で胴部中位にかけて黒斑がみられる。色調は内外共に橙色で、調整は外面がハケのちナデでハケを消しきれていない。内面もハケのちナデで、ハケを消しきれずに薄く残っている。凶化はしていないが外面には幅5cm程度の棒状タタキ痕跡が認められる。

溝口氏の指摘をもとにまとめると、上下甕とも基本的には類似した形態を持つものの、頸部及び胴部突帯の断面形状が異なり、胴部の張り出し方が異なるなどやや作風に違いが見られる。上甕は口縁部のたち上がり具合から概ね中期後半立岩式でも新段階のK III c、下甕は口縁部が平行する事等から中期立岩式でも古段階のK III b 並行と考えたい。

副葬遺物 (第15図、図版47)

第15図は副葬されていた中細形銅戈である。全体に薄い青緑色を呈し、棺外副葬であったためか保存状態がかなり悪い。破損状況が著しく、特に刃先の腐食、欠落が顕著である。

援部は全体に24.4cm とやや長



第15図 2号甕棺墓出土銅戈実測図 (1/2)



写真9 3号甕棺墓

く、援幅が鋒にかけてやや狭まり、全体に刃が付けられている。脊には鑄はなく、樋は表裏ほぼ同じ長さで、先端はやや鈍く、下端は裾広がりになる。樋下端部には綾杉文が施されるものの、型崩れが著しく表面左では殆ど文様が出ていない。胡は張りは強く、内の幅が1.8cmと狭く両面ともに中央部及び両側面に凸線を鈕出しており、側面は面取りしている。

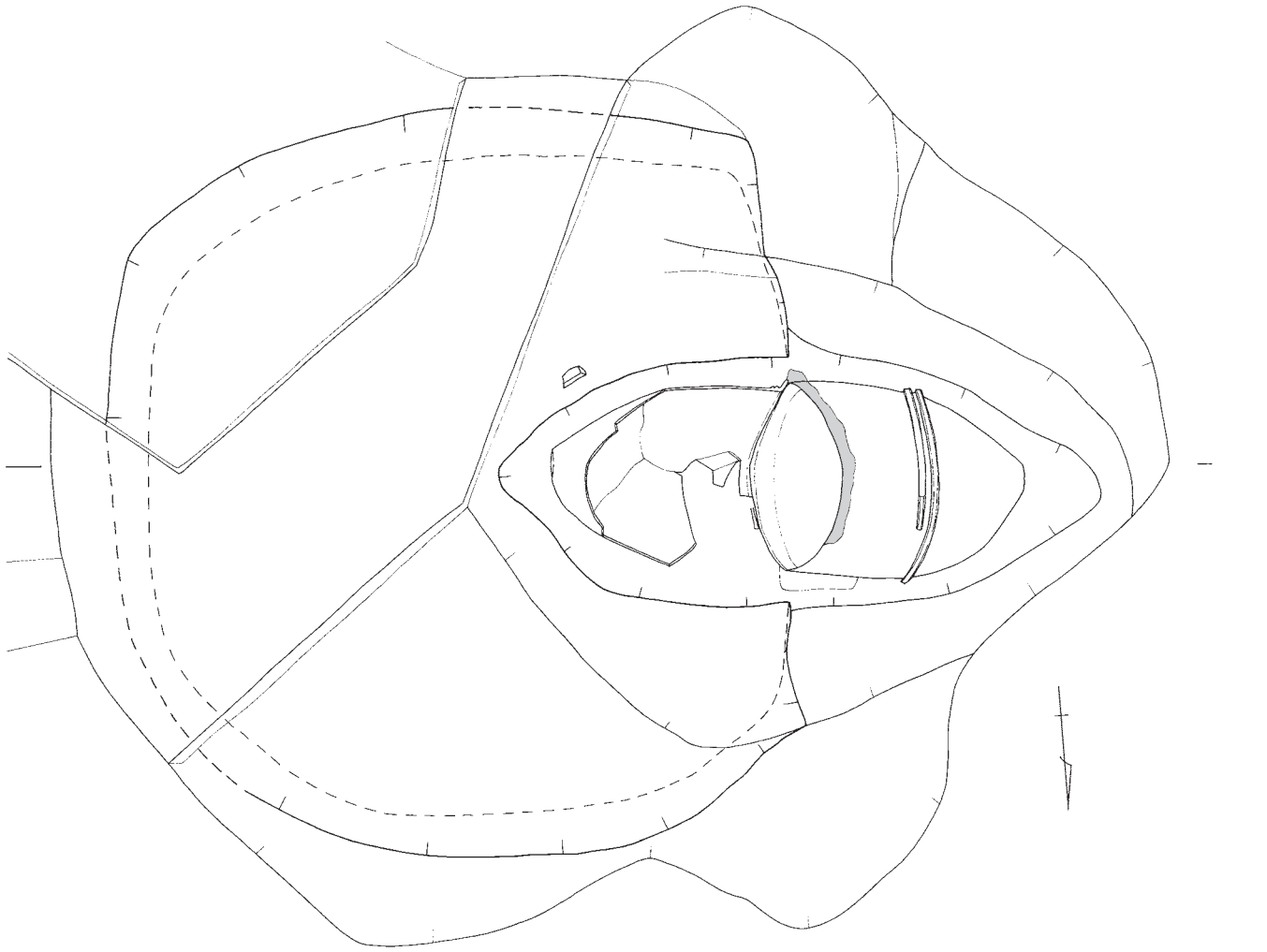
全長は27cm、援部幅4.2cm、内長2.2cm、胡部8.2cm、脊厚さ6mm、重さ177gを測る。中細型銅戈a類に相当しよう。

3号甕棺墓

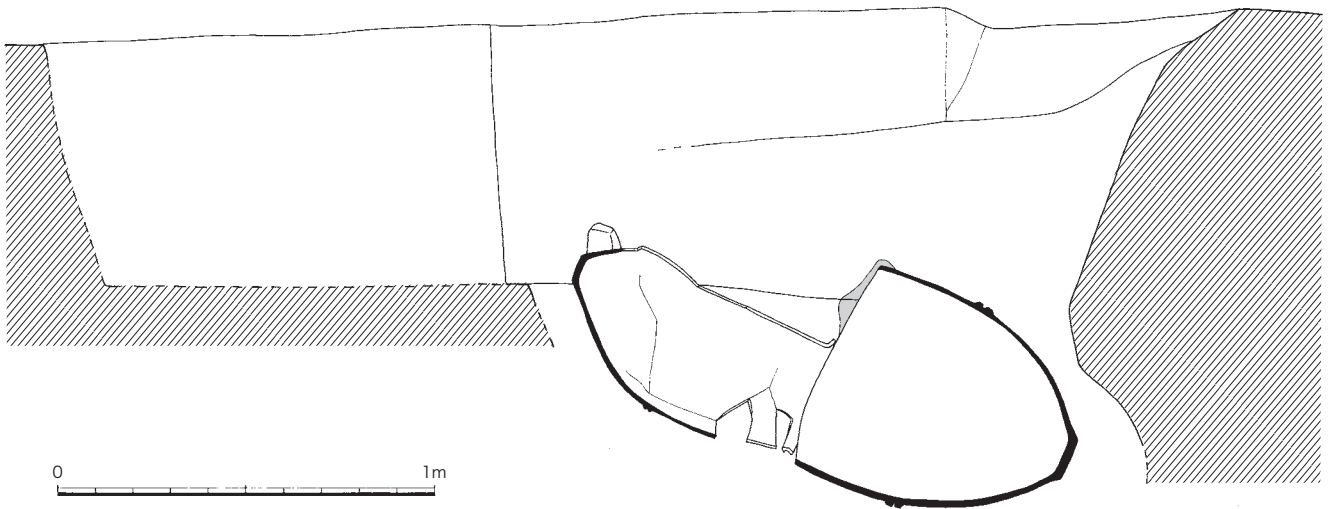
(第16・17・18図、図版10・11・48)

調査区中央部よりやや西側に位置し、2号甕棺墓を切る。西側は掘りすぎており、本来の挿入部を掘り落としてしまっている。甕棺墓本体のみを掘り下げ、墓壇はトレンチ等により部分的に掘り下げていることから、全容は把握できていない。平面形は検出面で確認される限り不整形を呈し、復元長約1.9m(現況3m)、幅約2.1m、テラス部までの深さ約70cm、甕棺最下部までの深さは確認面から約1.3mを測る。甕棺の挿入方向は東方向で、方形の墓壇に段を付け、下甕を埋置する部分は東側に横穴を掘り窪めている。甕棺は上甕が崩落しており、主軸N93°E、埋置角度21°である。下甕は口縁打ち欠きで接口式に組合わさる。この接合部周辺には目貼り粘土が丁寧に巡らされていた。

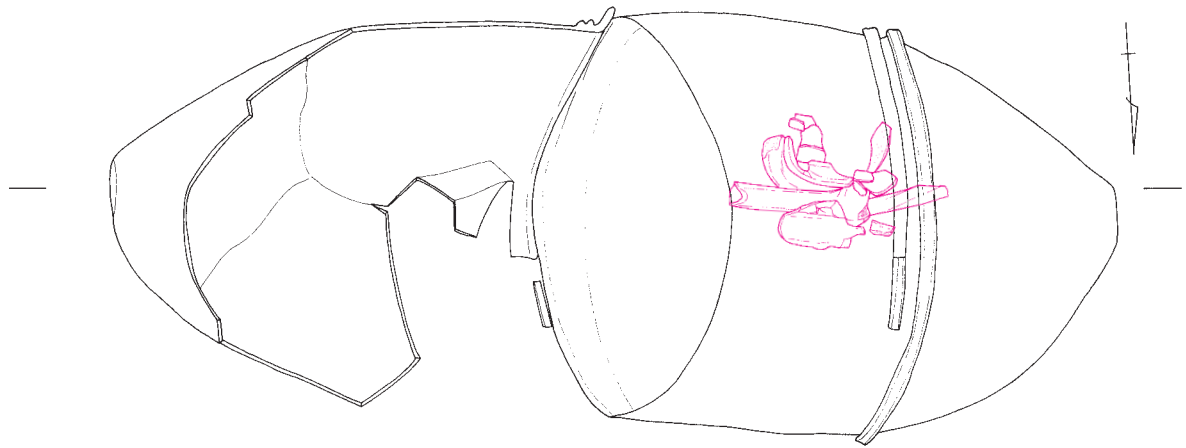
棺内には下甕最下面より人骨の出土が見られた。人骨鑑定は今後正式刊行予定であるが、調査時の田中・金氏の所見によれば頭蓋骨・大腿骨・上腕骨等の破片が出土しており、人骨の量が少ない事や各部位が正位置を保たず集中していることから、再葬の可能性も指摘されている。



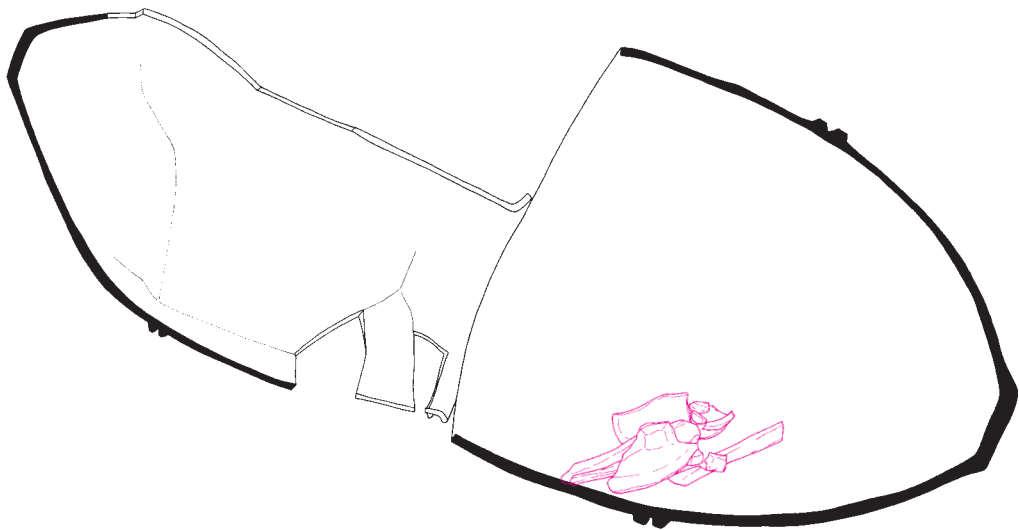
141.70m



第16图 3号甕棺墓实测图(1/20)



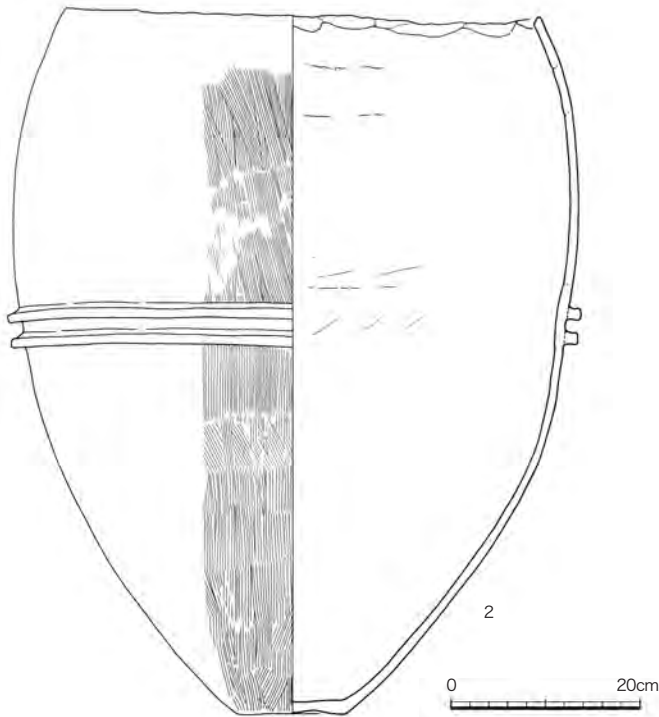
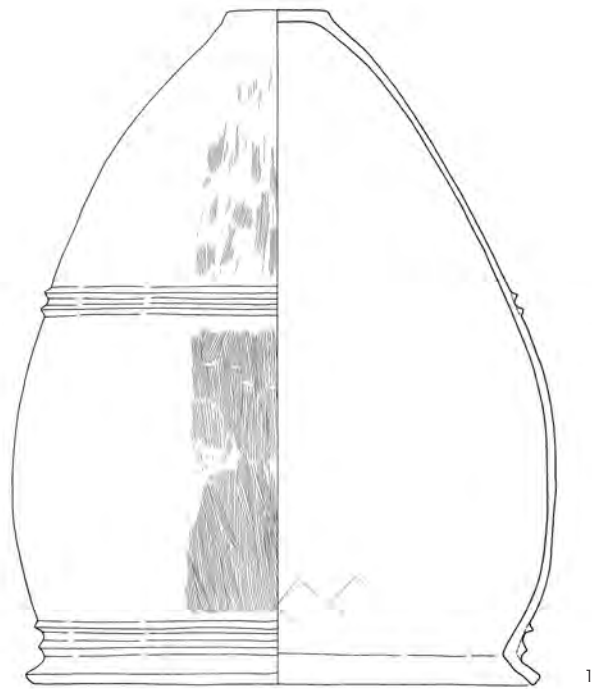
141.00m



0 50cm

※赤は人骨

第17図 3号甕棺人骨出土状況実測図 (1/10)



第18図 3号甕棺実測図 (1/8)

を呈している。このうち上甕は口縁部の『く』の字化や多条突帯から須玖Ⅱの新段階並行と見られ、下甕は胴部がかなり長胴化しているプロポーションなどから、概ね後期初頭の桜馬場式のKⅣ a 並行と捉えたい。

第18図1は上甕である。口径53.4cm、胴部最大径57.2cm、底径10.4cm、器高71.3cmである。口縁部はくの字状を呈して外に開き、端部はシャープに作られる。頸部には断面三角形状の突帯が2条巡り、胴部最大径よりかなり下半に断面三角形状を呈する突帯が2条巡る。底部は薄い平底を呈するもののシャープさに欠ける。器壁は0.8cmで、底部の厚みは1.3cm程度である。胎土には石英・角閃石・白色粒子・赤褐色粒子を含む。焼成は良好で胴部上位にかけて黒斑がみられる。色調は内外共に黄橙色で、調整は外面が風化が著しいもののハケ後ナデ、内面は丁寧なナデ調整が施されている。また図化していないものの上甕口縁部付近に一部赤色顔料が塗布されている箇所が見られた。

2は下甕である。口縁部を頸部より打ち欠いた甕形土器である。打ち欠いた二次口縁径は49.9cm、胴部最大径59.6cm、底径11.2cm、残存高74.5cmである。やや長胴化した形態をなし、胴部中央に断面コの字状の突帯を2条巡らせる。底部は平底であるがシャープさに欠けるつくりとなっている。器壁は0.8cm程度で、底部の厚みは1.3cm程度になる。胎土には石英・角閃石が含まれる。焼成は良好で胴部上半に黒斑が見られる。色調は内外ともに橙色。外面はハケ調整で内面はハケのちナデ調整が施される。図化していないものの、一部に棒状タタキの痕跡が見られる。

溝口氏の指摘をもとにまとめると、下甕の口縁部を欠くものの、ほぼ似た形態

4号甕棺墓（第19～22図、図版12～23）

調査区中央部に位置し、3号溝に切られる。他の甕棺類と異なり墓壙全体を掘り下げており全容が把握できる。平面形は比較的大きな不整形長方形を呈し、長さ約3m、幅約2.3m、テラス部までの深さ約70cm、甕棺最下部までの深さは確認面から約1.3mを測る。墓壙北側壁面には偏平上の板石が落ち込んでおり、標石の可能性はある。甕棺の挿入方向は西方向で、方形の墓壙にテラス状のほぼ平坦な段を付け、下甕を埋置する部分は東側に横穴を掘り窪めている。主軸 N89° W、埋置角度39° である。甕棺はほぼ完形の状態で残存しており、覆口式で口縁部打ち欠きの2棺が埋置され、上甕外側に副葬品を入れるための外甕を覆いかぶせて複室を作り出している。

外甕は副葬の為だけに意識的に覆われたとみて間違いなく、主体部の口縁部付近のみならずこの外甕口縁部にも丁寧に目貼粘土が施されていた。第20図に示すように外甕内の南側の隙間に青銅製の鉄剣、銅戈が揃って納められていた。銅戈が刃先を上甕方向に向け、鉄剣は刃先を下方向に向けていた。外甕が土圧によりやや潰れていたことから、その隙間に挟まった状態の鉄剣は茎部が折れ曲がって出土した。

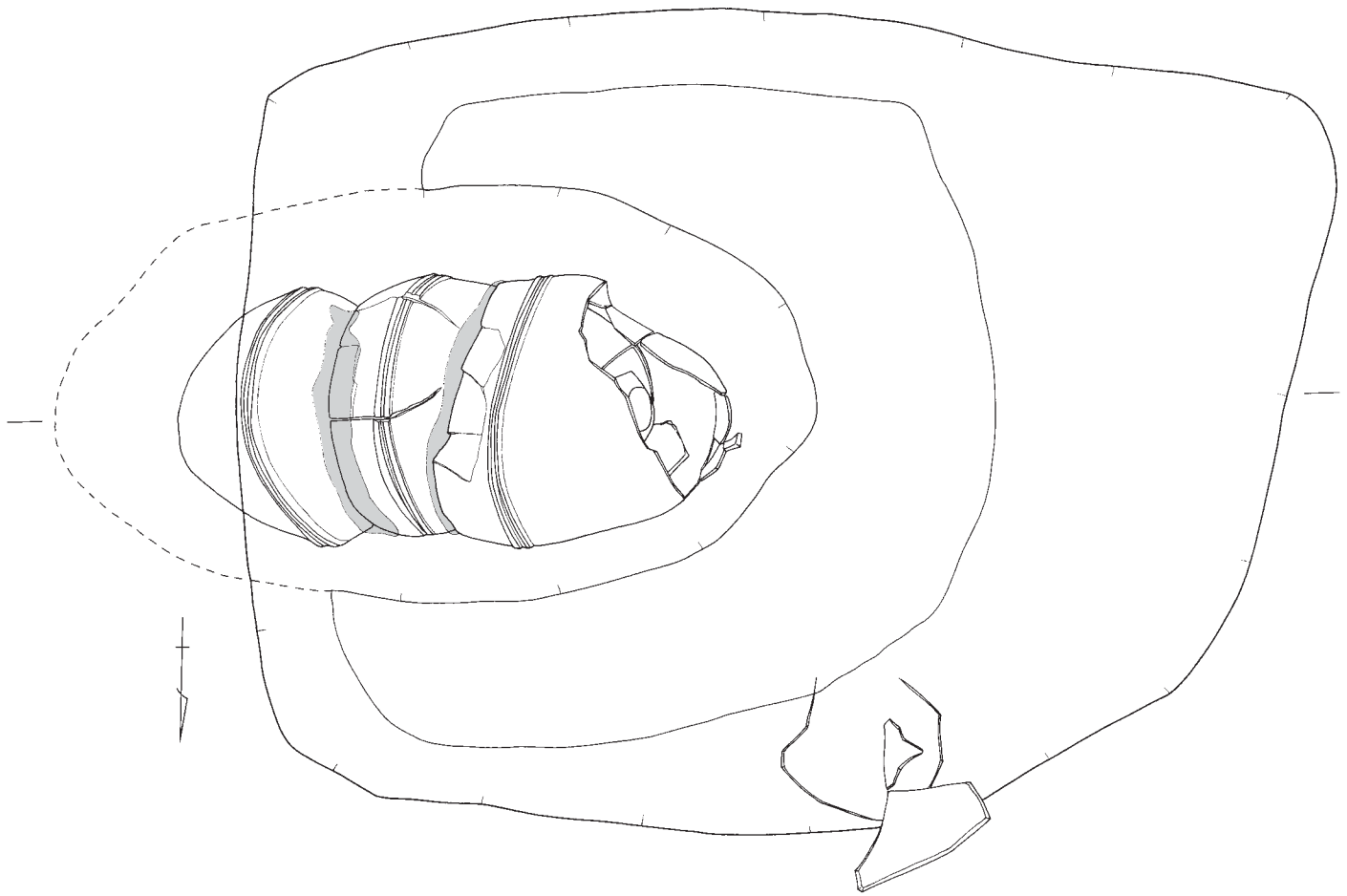
棺内からは人骨・副葬品の出土が見られ、以下田中・金氏の調査時の所見を基にまとめる。甕棺は殆ど破損を受けていなかったことから土砂の流入が見られなかったが、水の流入は著しかったようで、上甕中面まで水没したことを物語る泥の付着痕が顕著に見られた。第20図は人骨・副葬品の出土状況を示している。このうち、頸椎以下は下甕にほぼ収まった状態で検出されたが、頭蓋骨が下甕口縁部に引っかかり上甕の位置で検出された。残存する部位の状況から、屈葬姿勢を保った状態ではあるが、椎骨・肋骨は若干下にズレており、本来の位置から若干下へずれているものと考えられる。また、肋骨の破片が頭蓋骨より上位で検出されており、これは水が溜まった状態で浮いて移動した可能性が推測される。これら人骨の正式鑑定報告は今後刊行予定であるため、正確な埋葬姿勢や性別年齢等については今後の報告に譲ることとするが、調査時の年齢性別所見では成人男性との報告をいただいている。

人骨には豊富な副葬品が装着されており、右手に15個のゴホウラ製貝輪がはめられ、人骨の上下からは約525個以上のガラス製管玉の出土が見られ、管玉の間に紛れて人骨のほぼ中心部には硬玉製勾玉が1点出土している。ゴホウラ製貝輪は右手首から肘にかけて一大結節を上側・螺頭部を内側に向けた状態であり、手首付近では長軸9.7cm、肘付近では長軸約14cm程度と次第に大形化しており、腕の太さに合わせての装着が想定される。

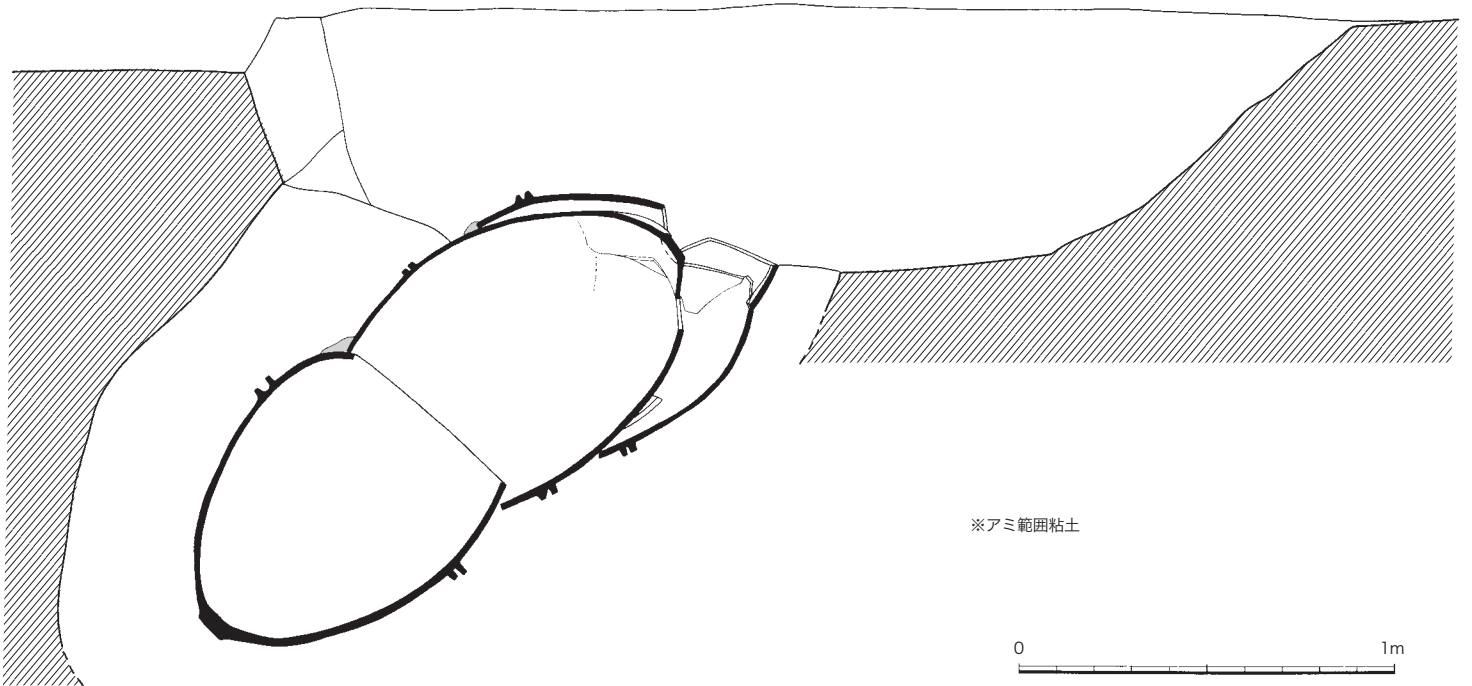
管玉は上甕の位置に数点、下甕の人骨胸～腰付近に大多数の管玉が集中して出土した。(第21図) 上甕に見られる3点の管玉は集中部と大幅に離れていることから、水が溜まった際に移動した可能性が高い。集中部の管玉は方位を異にしてまとまり、一部連結した状態で出土している。この連結方向は縦方向と横方向の一群が交互に折り重なったような状態であり、連結の度合いも各方向毎に2～3列で2～3個程度の単位が抽出出来そうである。肋骨周辺、貝輪下部の2箇所集中したまとまりが見られ、腰下部付近のまとまりはやや散乱した印象である。数度の水没などが予測されることから、完



写真10 4号甕棺墓



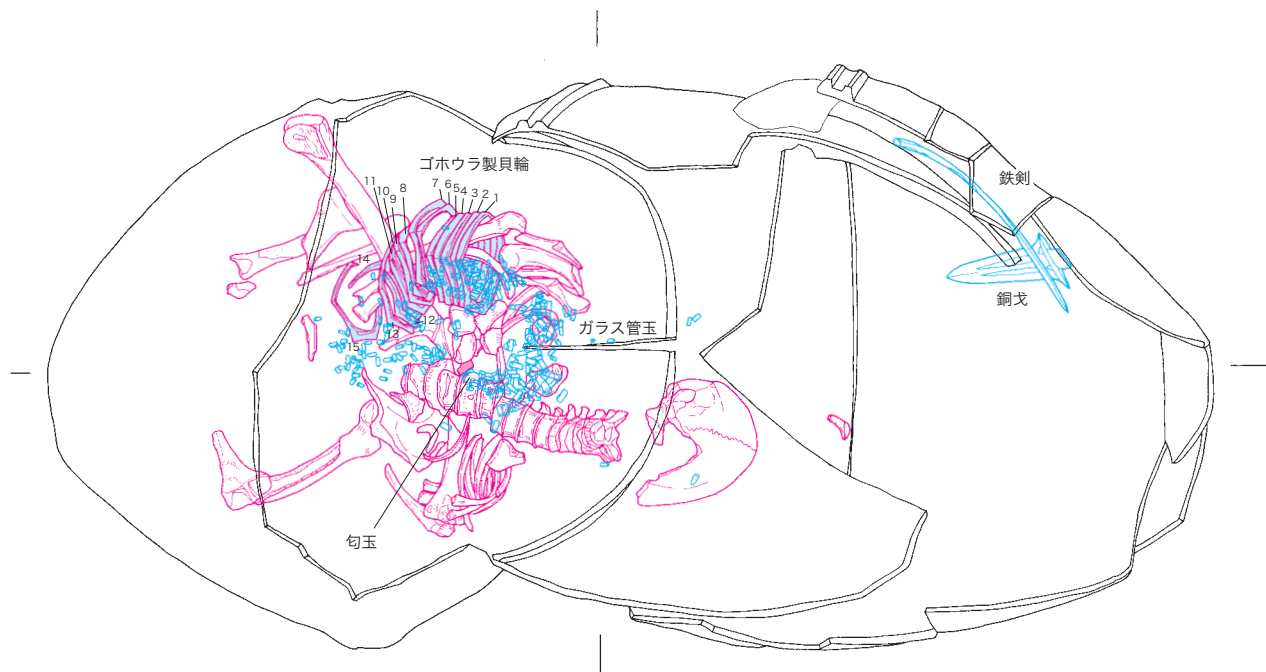
141.60m



※アミ範囲粘土

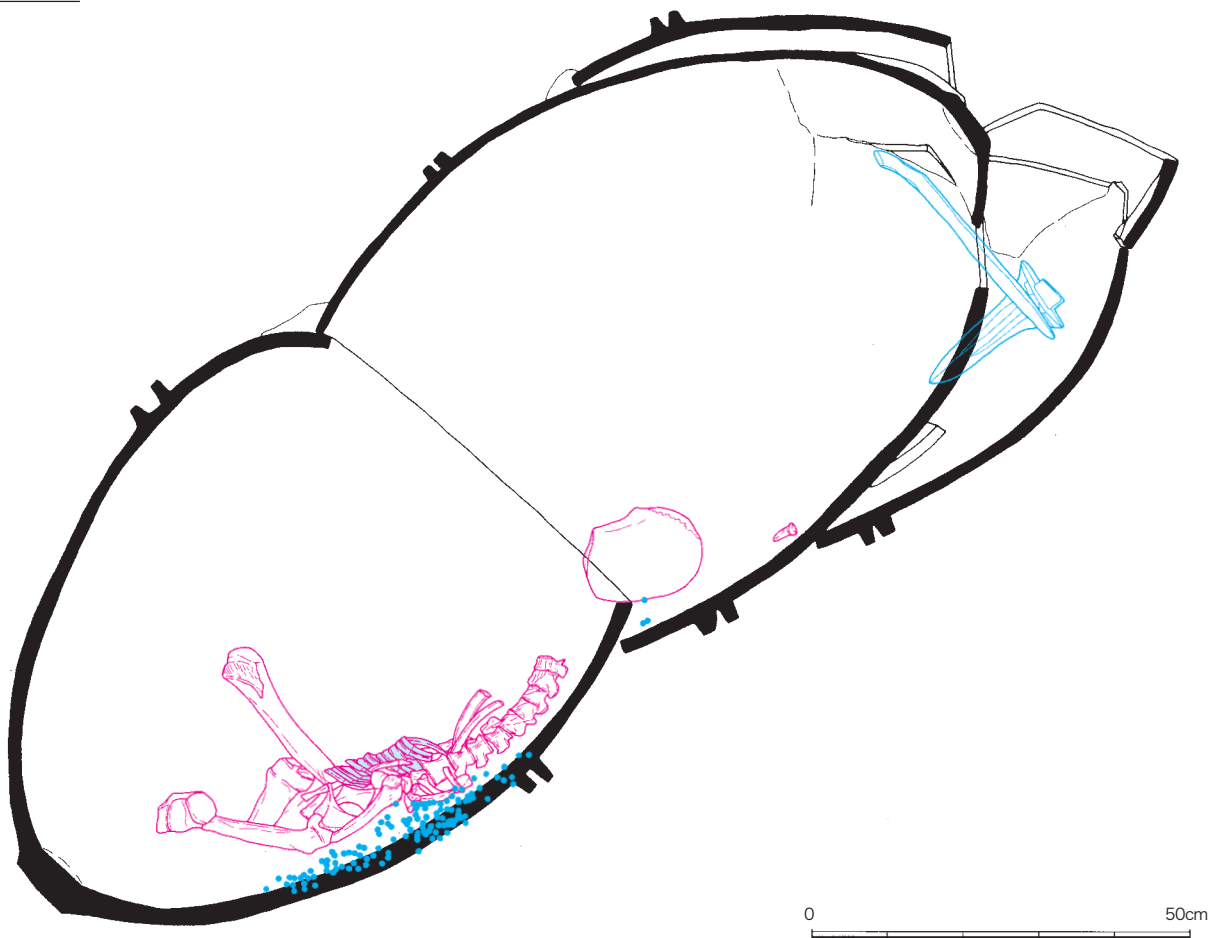
0 1m

第19図 4号甕棺墓実測図 (1/20)



※貝輪の番号は第25図に対応する。

141.00m



0 50cm

※管玉の出土レベルはドットにて表現するが、図の精度上一部甕棺に重なる点はご容赦下さい。

第 20 図 4 号甕棺墓人骨・遺物出土状況実測図 (1/10)

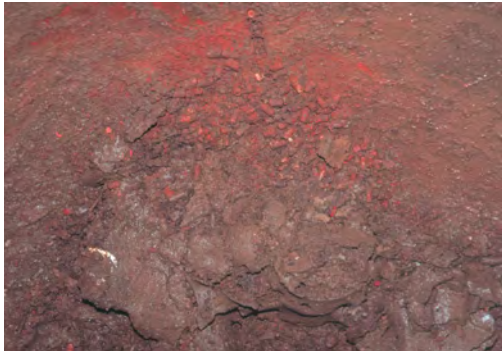


写真11 肋骨・椎骨下管玉出土状況

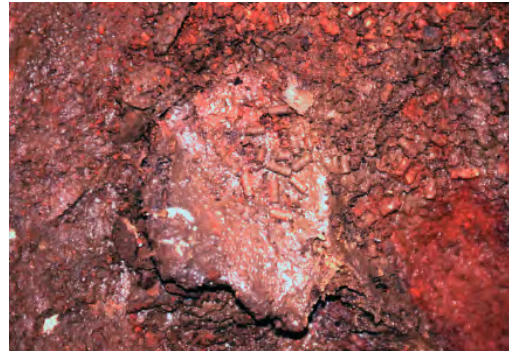
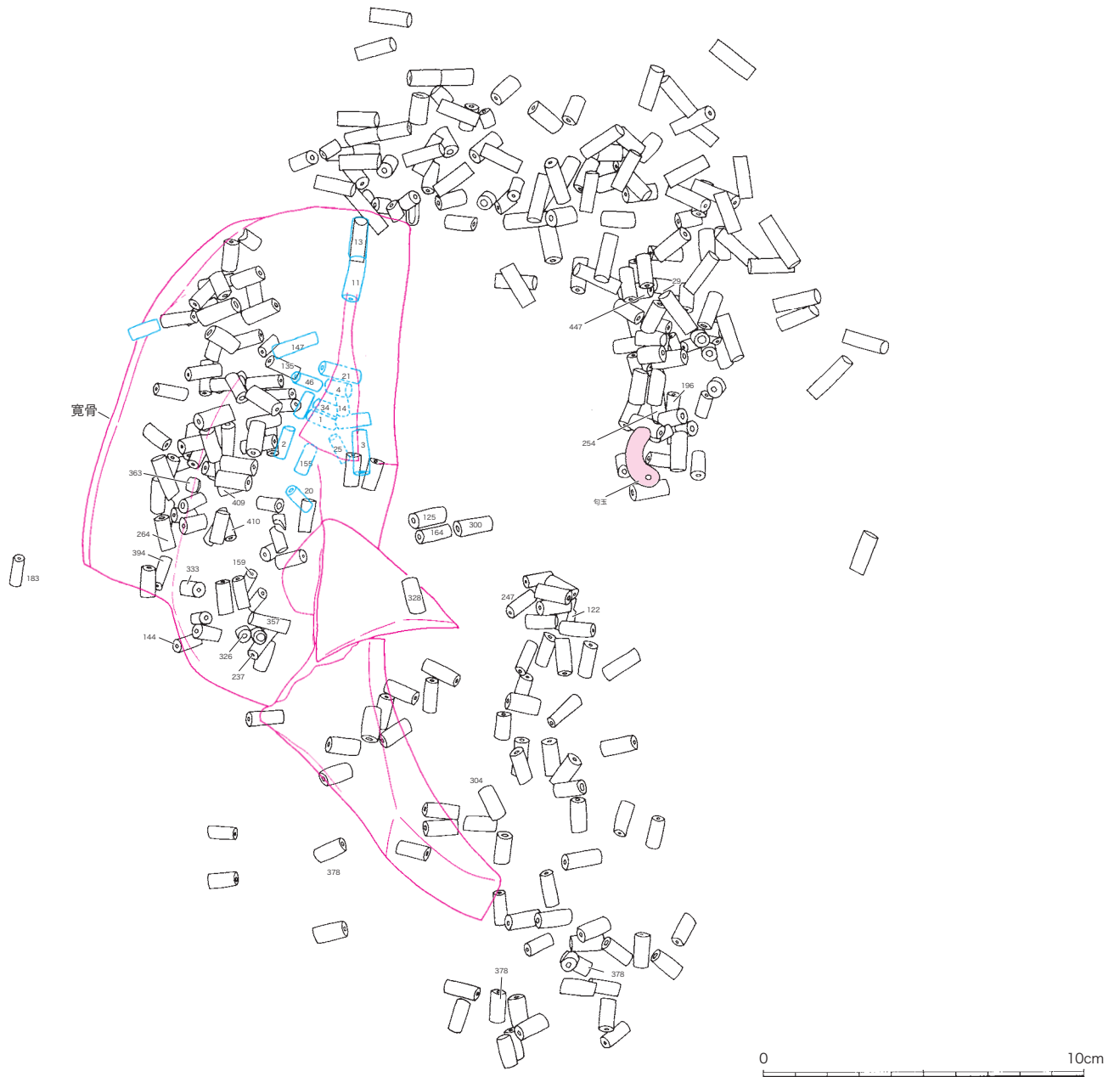


写真12 寛骨上管玉出土状況



第21図 4号甕棺墓管玉出土状況実測図(1/2)

※青色の管玉は人骨より上で出土
※番号は挿図(第24図)に対応する

全な原位置ではないと思われるが、肋骨や椎骨などの直下に泥を被っていない状態で出土する個体(写真11)が見られ、肋骨周辺・貝輪下部の2箇所はレベルも含めて原位置に近いものと推測される。腰下部付近のものは水没時等に若干流れた可能性も考えられる。また注視すべき特徴として貝輪下部のまとまりでは寛骨の上面から管玉の出土(写真12)が見られ、それ以外のものは人骨よりも下位レベルより出土している。

さて、以上のような田中・金氏の出土時の所見から ①上甕と下甕の間に挟まる管玉が見られないことから少なくとも頭部付近の飾りや首部中心の飾りとして用いられた可能性は低いこと。②人骨の直下に管玉が見られることやそれらが移動している可能性が低い事などから、人体の下部に管玉が敷かれたような状態と推測されること。③人骨より上位で出土する個体の存在から、胸部～腰部にかけて人体の上にも管玉がおかれていた可能性があることの3点が整理される。このような事実から使用方法を直ちに結論付けるのは困難であるが、田中氏のご指摘から、管玉を布に編みこんだものなど通常推測される装身具とは異なる可能性が考えられる。

勾玉は下向きの状態で管玉の上面より出土した。管玉の間にはまる状況などからセットで使用された可能性も考えられる。また、上甕から下甕にかけて赤色顔料が大量に塗布されていた。

第22図1は外甕である。口縁部～胴部上半までを打ち欠いた甕形土器で、4号甕棺墓のなかで最も口径が大きい。打ち欠いた二次口縁径は79.6cm、胴部最大径83.3cm、底径11.5cm、残存高72.2cmである。胴部中央に断面コの字状の突帯を2条巡らせ、底部は平底である。器壁は8～11mm程度で、底部の厚みは1.3cm程度になる。胎土には石英・角閃石が含まれる。焼成は良好で胴部上半に黒斑が見られる。色調は内外ともに橙色。外面は丁寧なナデ調整で内面はナデ調整である。幅5～6cm程度の粘土接合痕が観察される。また図化していないものの、一部に棒状タタキの痕跡が見られる。かなり丁寧なつくりの印象を受ける。

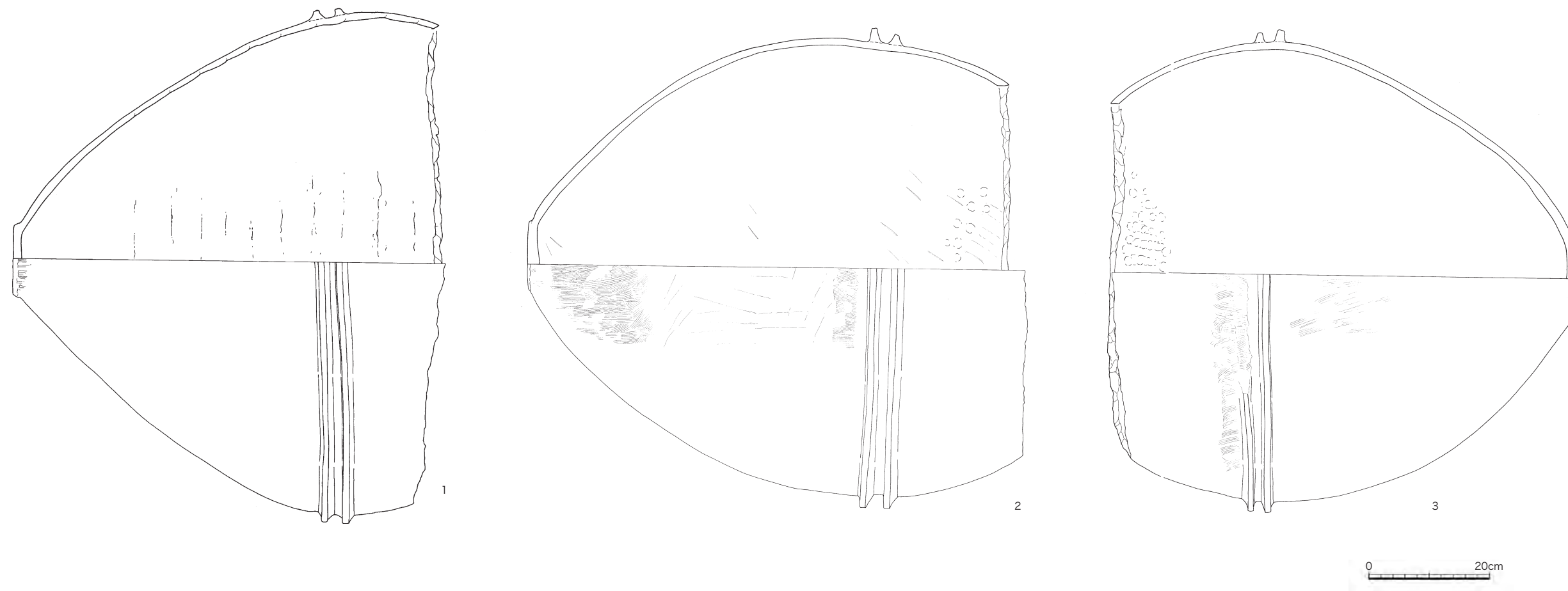
2は上甕である。口縁部を打ち欠いた甕形土器である。打ち欠いた二次口縁径は61.6cm、胴部最大径76cm、底径11.4cm、残存高83.2cmである。胴部中央に断面コの字状の突帯を2条巡らせ、底部は平底である。器壁は12mm程度で、底部の厚みは2cm程度になる。胎土には石英・角閃石が含まれる。焼成は良好で胴部上半に黒斑が見られる。色調は内外ともに橙色。外面はハケのちナデで、底部付近と突帯下部にハケメが残り、一部工具によるナデ調整が見られる。内面はナデ調整で、口縁部付近に指オサエが見られる。また図化していないものの、一部に棒状タタキの痕跡が見られ、全面に赤色顔料が塗布され、かなり丁寧なつくりの印象を受ける。

3は下甕である。口縁部を打ち欠いた甕形土器である。打ち欠いた二次口縁径は58.8cm、胴部最大径76.8cm、底径11.8cm、残存高79cmである。胴部中央に断面コの字状の突帯を2条巡らせ、底部はやや上底気味を呈する平底である。器壁は10mm程度で、底部の厚みは1.2cm程度になる。胎土には石英・角閃石が含まれる。焼成は良好で胴部上半に黒斑が見られる。色調は内外ともに黄橙色。外面はハケのちナデで、突帯付近にハケメが残る。内面はナデ調整で、口縁部付近に指オサエが見られる。また図化していないものの、一部に棒状タタキの痕跡が見られる。かなり丁寧なつくりの印象を受ける。

溝口氏の指摘をもとにまとめると、3つの甕棺のいずれも口縁部を欠く器形であるものの、胴部に2条の突帯を巡らす卵型が特徴である。底部にかけての窄まりかたや胴部の張り方などから、概ね中期後半の立岩式でも新しい範疇でKⅢcと考えたい。



写真 13 4号甕棺墓



第 22 图 4号甕棺实测图 (1/8)

副葬遺物（第23～25図、図版51～55）

鉄剣 第23図1は外囊に銅戈と交差し、縦方向に副葬されていた鉄剣である。表裏両面に木質が残存しており、脆く保存状態が良好ではない。茎部が大きく湾曲しており、破損を避けるためにも比較的安定している面のみの実測を報告する。全体に錆化が著しく茎部は薄く錆膨れしているのに対して身部は比較的良好なメタルが残存している。身部は中央の鑄が明瞭で関部まで達する。断面は鋭い菱形を呈する。関の上約1.5cm程のあたりに4mm程度の刃関双孔が見られる。関は直角をなし、茎部は細長く端部は直角をなす。断面長方形を呈し、茎部下端付近にも4mm程度の目釘穴が1孔観察される。身部から茎部にかけて木質が良好残存しており、関より2.6cm程度の箇所において刀身に直行する木質ラインが見られることから、把端部と思われる。刀身に残る木質はこの把端の上面にかぶっており、鞘であると思われる。把は茎下端部の一部に残存し、断面は杏仁形で、二枚合わせ式と推測される。全長47.3cm、刀身長32.4cm、身幅14.9cm、茎長14.9cm、茎幅2.1cmを測る。厚みは身、茎部で6mmほどである。重さは371gを測る。

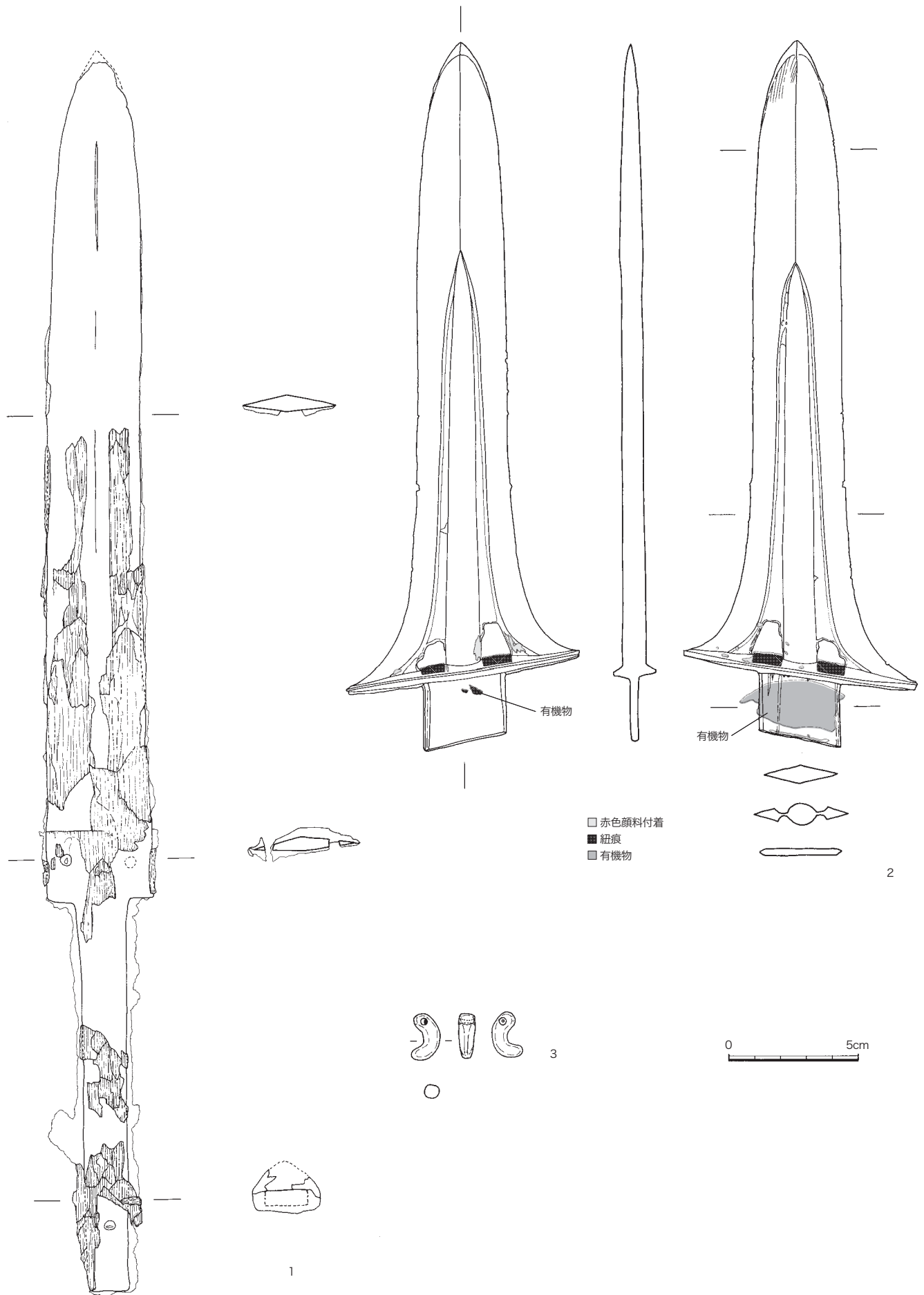
銅戈 第23図2は副葬されていた細形銅戈である。全体に濃い青緑色を呈し、棺内副葬であったためか保存状態は良好である。出土時には内に木質が付着していた。腐食、欠落は殆ど見られない。援部は全体に23.9cmとやや長く、援幅が鋒にかけてやや狭まり、全体に刃が付けられ特に切先の研ぎ出しは明瞭である。脊には鑄はなく、樋は表裏ほぼ同じ長さで、先端はやや鈍く、下端は裾広がりになる。部分的に樋の一部に型崩れが見られる。胡は強く明瞭に張出している。内の幅が3.1cmと広く、厚さも3mm程度と薄く、両面ともに中央部及び両側面に凸線を鈕出しており、側面は面取りしている。穿の下部には紐ズレと思われる錆が見られ、穿～内にかけて赤色顔料の付着が認められる。細形銅戈Ⅱ類b式に相当しよう。

全長は27.2cm、援部幅3.4cm、内長2.5cm、胡部9.1cm、脊厚さ8mm、重さ300gを測る。

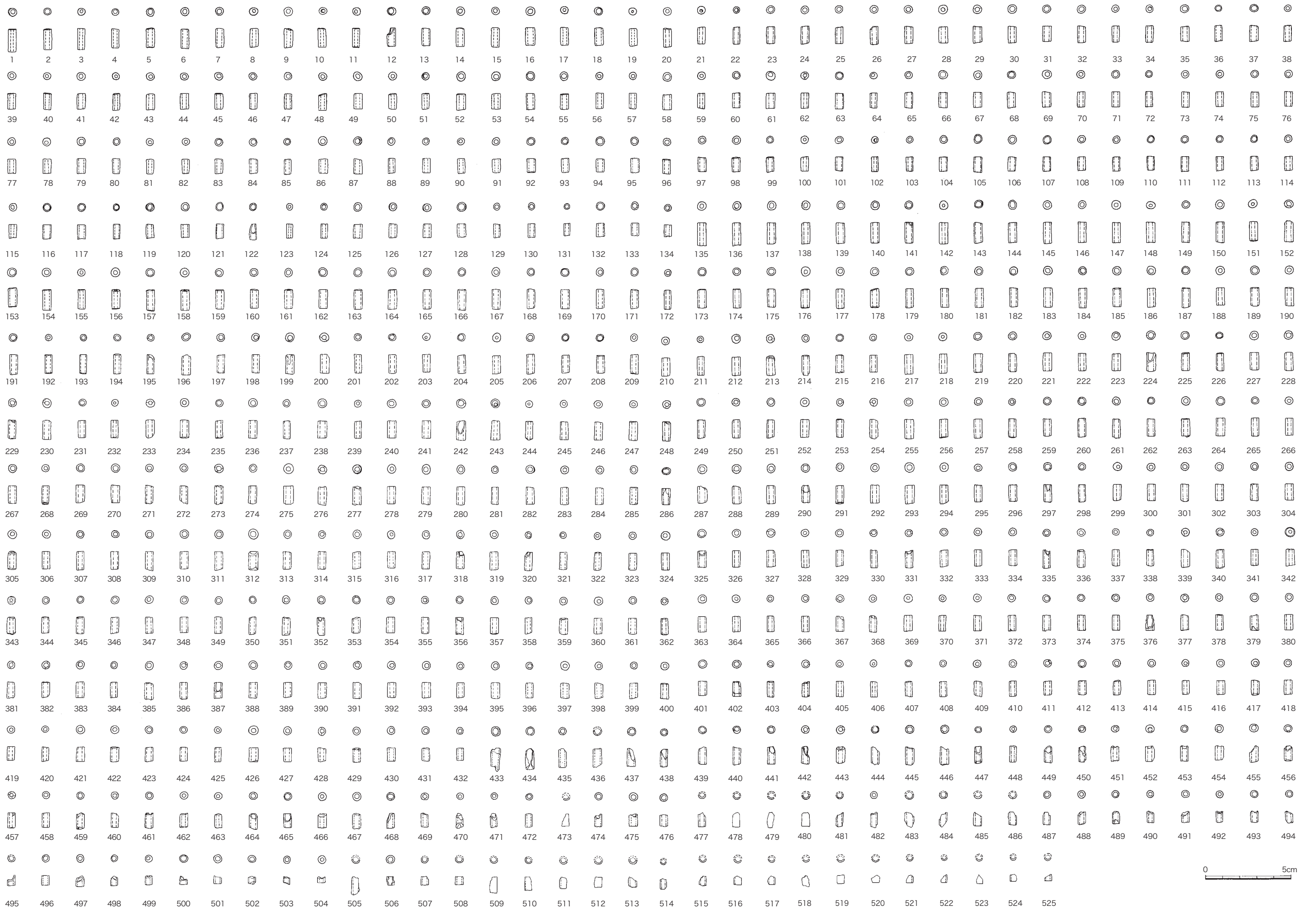
勾玉 第23図3は棺内より検出された勾玉である。濃い緑色を呈する精品である。頭部に1孔を穿つ垂定形勾玉で全体に丁寧な仕上げである。長さ1.8cm、幅0.7cm、最大厚5mm、重さ1.7gを測る。石材は硬玉製である。

管玉 第24図1～525はガラス管玉である。ガラス製の秀品で、薄い緑色を呈し、風化の著しいものは白色を呈する。風化の著しいものは、脆く破損が著しいことから、その個体数を確定できない。実測の可能な総計525点を実測しているが、小破片は多数出土しており、これらが同一個体の可能性があるため525以上の点数が出土しているものと考えられる。計測値では径が4～5mm程度と一定化しているが、全長は7～13mm程度の範囲でバラツキが見られる。出土位置により大きさが異なるなどの特徴は見られない。

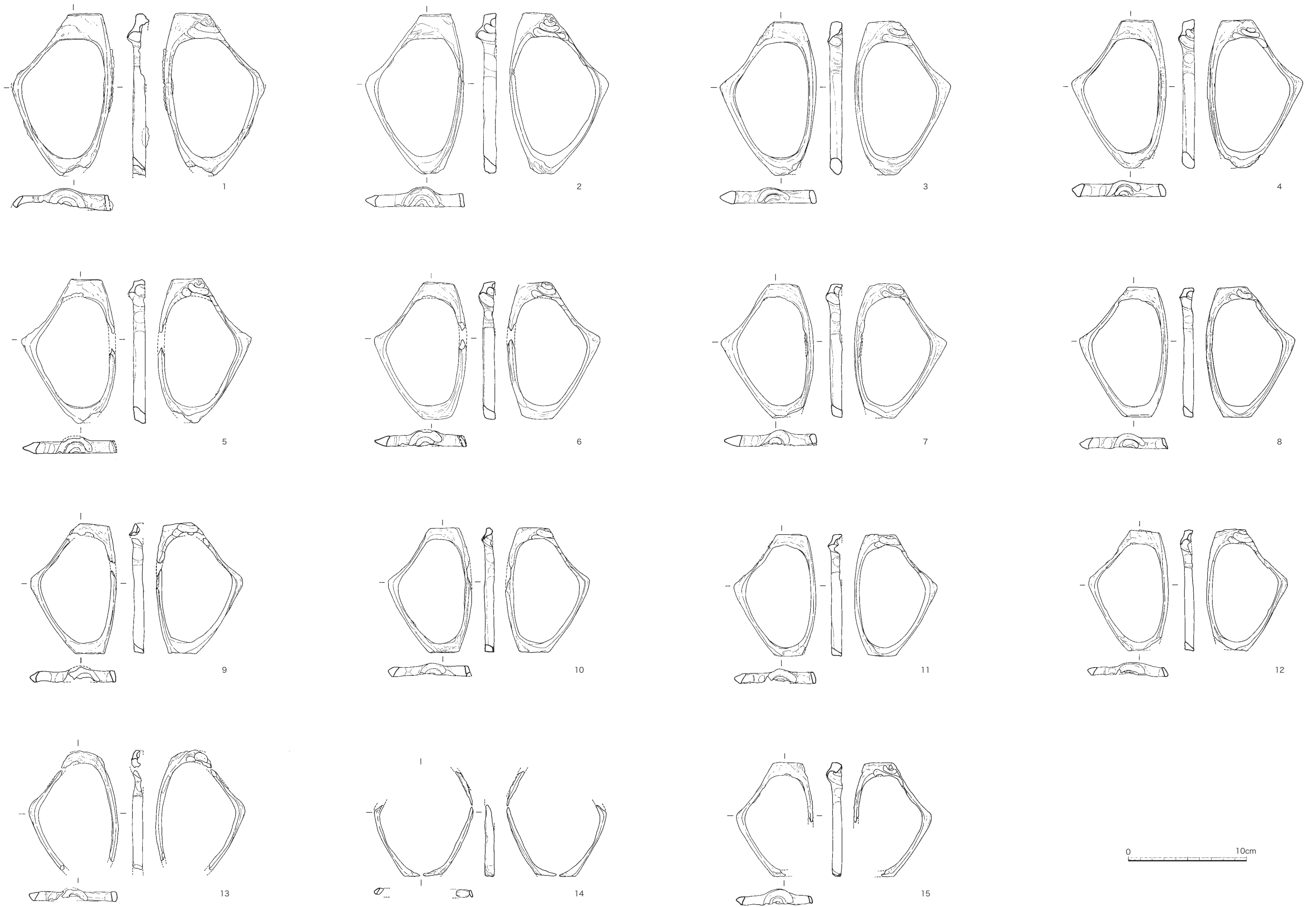
貝輪 第25図1～15は右手に装着されていたゴホウラ製貝輪である。1から15の順番で肘から手首にかけて装着されており、内孔が次第に小さくなっているのが分かる。ゴホウラの殻軸から螺腹に近い部位を縦方向に切り取った腹面貝輪で、いわゆる立岩型と呼ばれるタイプである。内孔の側面は面取りするものが見られるなど丁寧な加工が見られ、厚みも1～1.7cm程度とややバラツキが認められる。法量は最大のもので、縦径13.8cm、横径8.7cmとかなり大きく、最小となる15は破損があるものの縦径9.7cmと小さく個体間での差が大きい。これは明らかに連続的装着を意識したつくりであると共に、特定の体格の人物を意識したオーダーメイド品と言えよう。また風化による破損を除くと15点の内に使用時の破損と思われる箇所は殆ど見られないことから、常時装着



第 23 図 4 号甕棺墓出土鉄剣・銅戈・勾玉実測図 (1/2)



第 24 图 4 号甕棺墓出土管玉实测图 (1/2)



第 25 图 4 号墓出土土贝轮实测图 (1/3)

品ではない可能性が高い。

5号甕棺墓（第26～28図、図版24～29）

調査区中央部に位置し、6号甕棺墓と切りあうが前後関係は不明である。他の甕棺類と異なり墓壇全体を掘り下げており全容が把握できる。平面形は比較的大きな不整長方形を呈し、長さ約2.9m、幅約1.8m、テラス部までの深さ約60cm、甕棺最下部までの深さは確認面から約1.25mを測る。甕棺の挿入方向は西方向で、方形の墓壇に幅広なテラス状の段を付け、下甕を埋置する部分は西側に横穴を掘り窪めている。主軸N77°E、埋置角度23°である。甕棺はほぼ完形の状態で残存しており、覆口式で口縁部打ち欠きの2棺が埋置され、接合部周辺には幅広く丁寧に目貼粘土が施されていた。

棺内からは人骨・副葬品の出土が見られ、以下、田中・金氏の調査所見を基にまとめる。第27図は人骨・副葬品の出土状況を示している。上甕には頭蓋骨が潰れた状態で出土し、頭蓋骨の下面からは薄いが枕と想定される粘土帯が検出された。人骨の多くの部位は下甕に位置し、残存する部位の状況から、仰臥屈葬と推測される。これら人骨の正式鑑定報告は今後刊行予定であるため、正確な埋葬姿勢や性別年齢等については今後の報告に譲ることとするが、調査時の年齢性別所見では成人女性との報告をいただいている。

人骨には副葬品が装着されており、右手に12個、左手に5個のイモガイ製貝輪がはめられていた。装着部のうち下側の風化が著しく、完形で残るものが少ない。左右両方ともに体層部の突起を反時計回りの方向で上に向けて装着し、左右対称にはならない。風化が著しいため詳細の把握は難しいが左手側では手首側より肘側の方が長径で2cm程大きくなっていることから、腕の太さに合わせての装着が想定される。またこのうち特徴的であるのは左手首装着状況である。左手の貝輪3～12は左腕（橈骨・尺骨）にはほぼはまるが、先端3において手首の骨が見られる。手は中心位置に落ちているが、その手には1、2がはまっていた。このことから、手首より上にきちんとはまったような状態ではなく、左手に1～3が押し込められた状態であった可能性が推測される。以上の事実から常時装着ではなく、死後装着の可能性を田中氏が指摘されている。

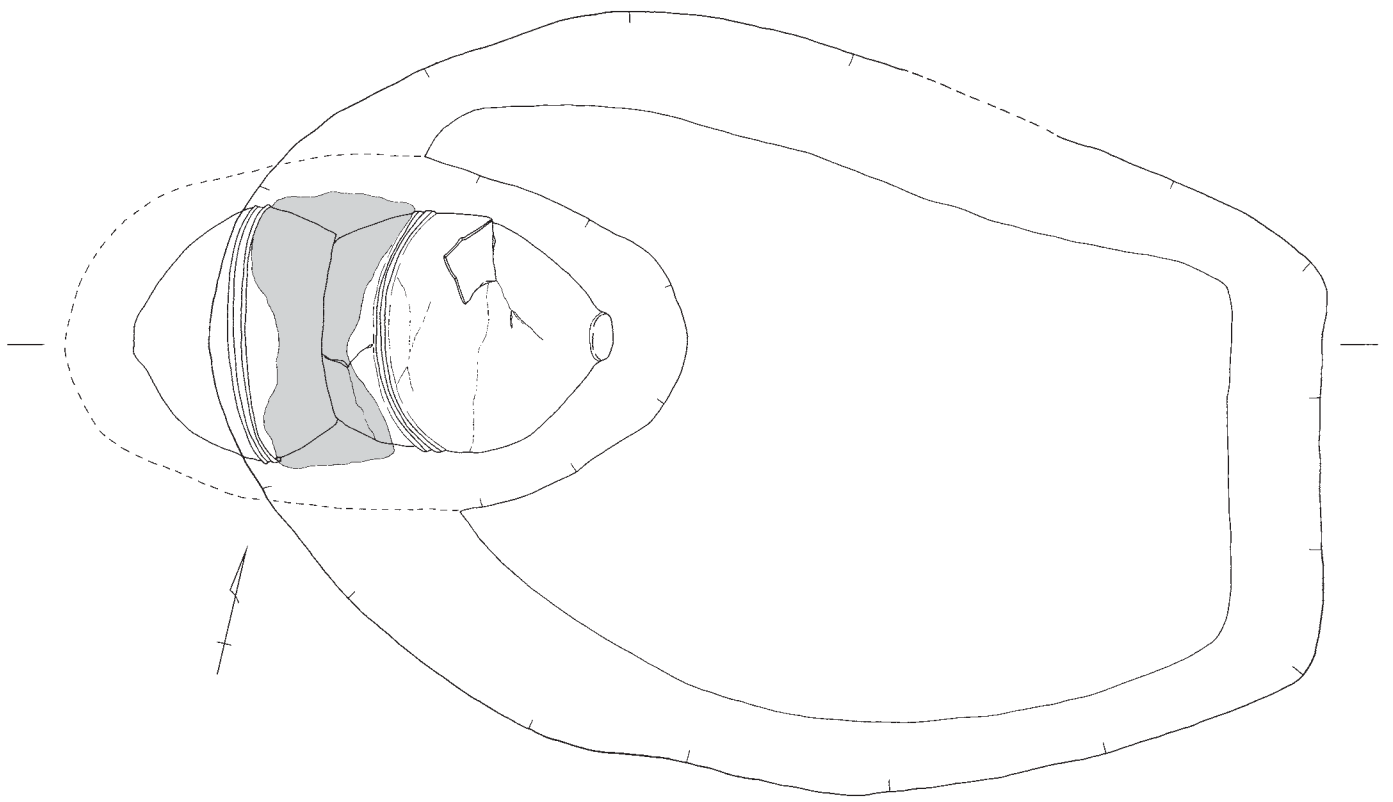
勾玉は上甕の第1肋骨の直下より出土し、ほぼ原位置を保っていたと想定され、首に当たる位置に相当する。首飾等に用いられていた可能性が高い。頭蓋骨付近にのみ赤色顔料が塗布されていた。

第28図1は上甕である。口縁部を打ち欠いた甕形土器である。打ち欠いた二次口縁径は49.3cm、胴部最大径69.1cm、底径13.2cm、残存高76.3cmである。胴部中央に断面コの字状の突帯を2条巡らせ、底部は平底である。器壁は8～13mm程度で、底部の厚みは1.3cm程度になる。胎土には角閃石・白色粒子が含まれる。焼成は良好で胴部上半に黒斑が見られる。色調は内外ともに橙色。外面は風化が著しいもののナデ調整で、内面もナデ調整である。粘土接合痕が観察される。また図化していないものの、一部に棒状タタキの痕跡が見られる。

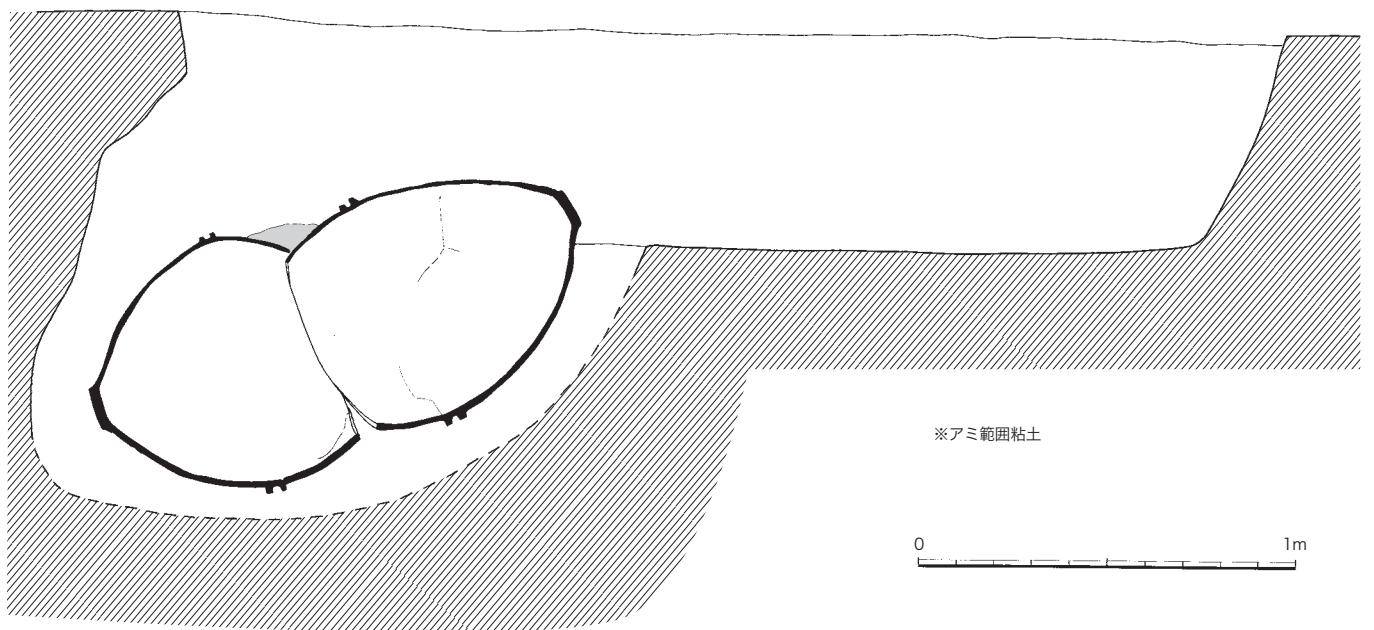
2は下甕である。口縁部を打ち欠いた甕形土器である。打ち欠いた二次口縁径は57.3cm、胴部最大径74.1cm、底径13.8cm、残存高73.5cmである。胴部中央に断面コの字状の突帯を2条巡らせ、底部



写真 14 5号甕棺墓



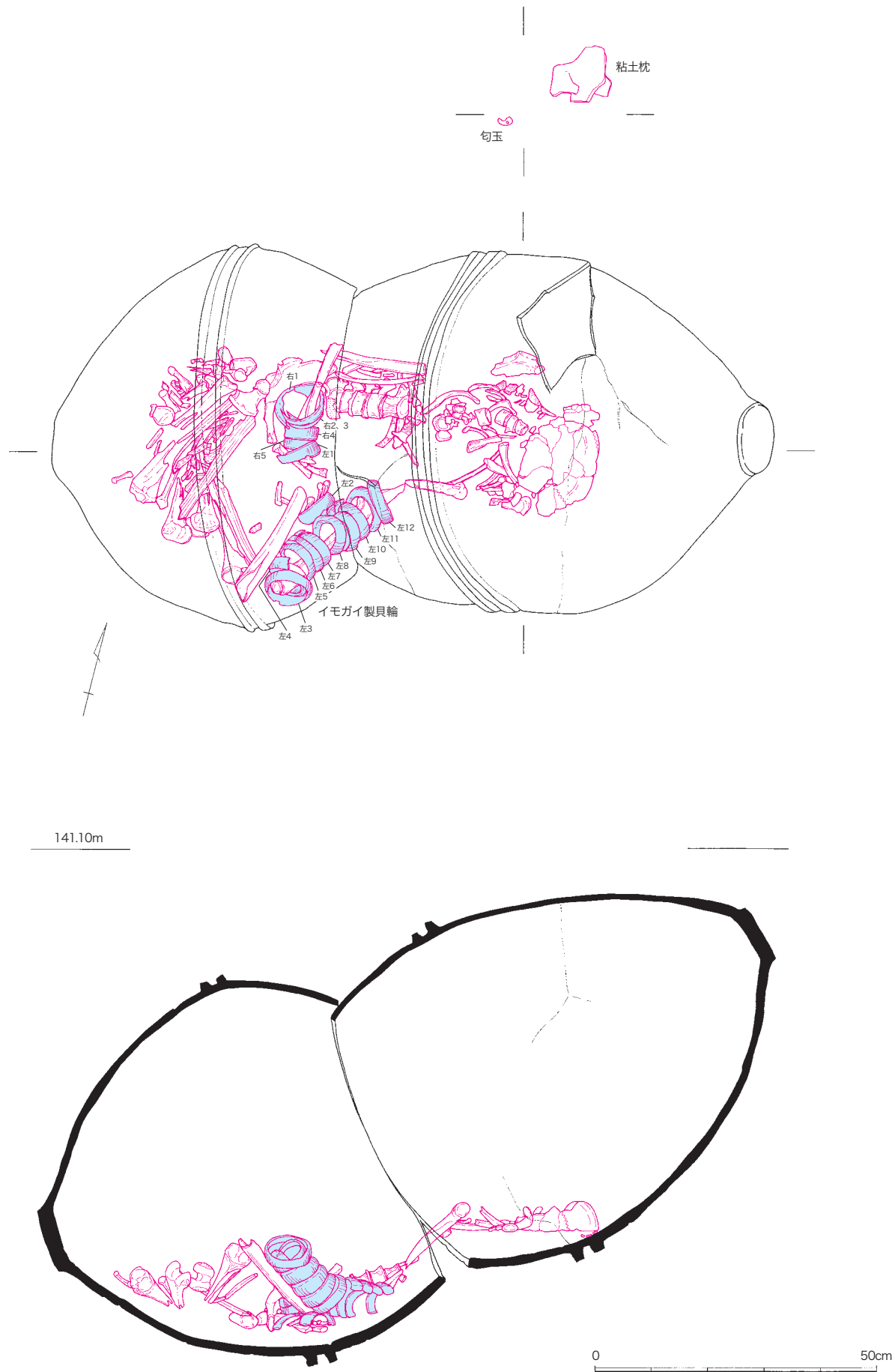
141.60m



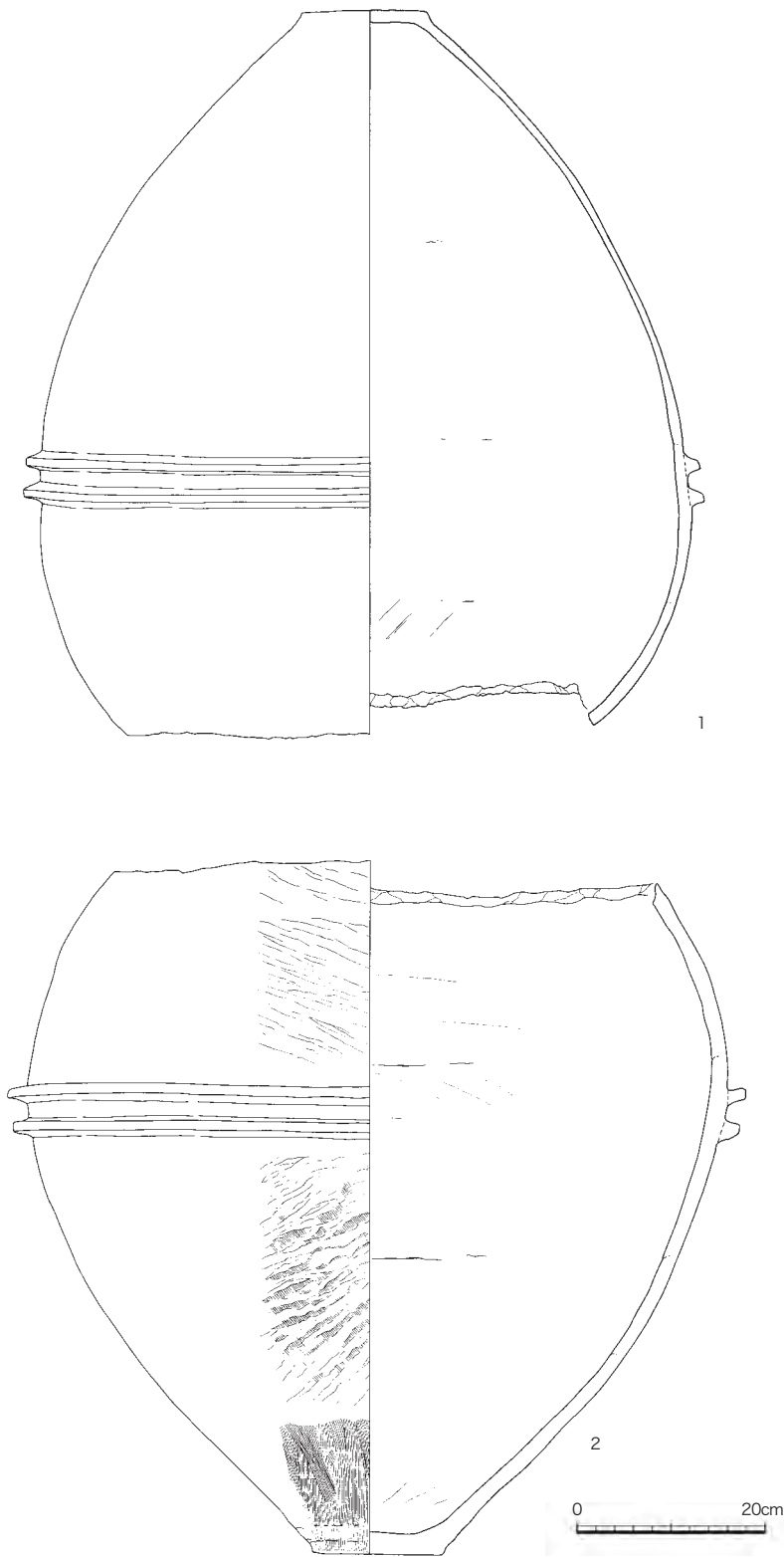
※アミ範囲粘土

0 1m

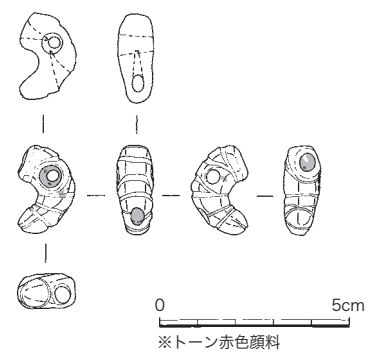
第 26 図 5 号甕棺墓実測図 (1/20)



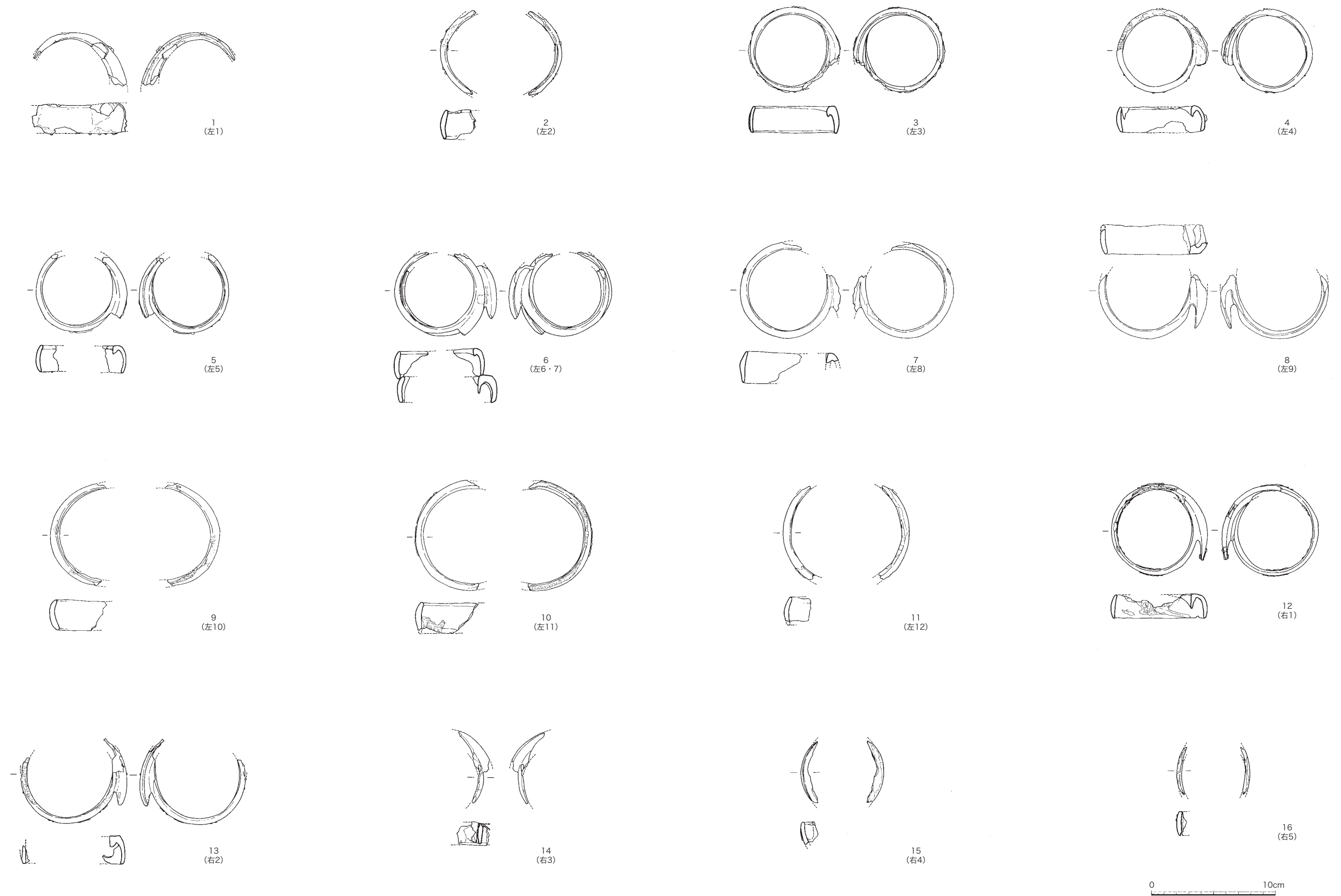
第27図 5号甕棺墓人骨・貝輪出土状況実測図 (1/10)



第28図 5号甕棺実測図 (1/8)



第29図 5号甕棺墓出土勾玉実測図 (1/2)



第30图 5号甕棺墓出土貝輪実測図 (1/3)



写真 15 貝輪出土状況



写真 16 貝輪出土状況

は平底である。器壁は10～17mm程度と厚く、底部の厚みは1.3cm程度になる。胎土には角閃石・白色粒子が含まれる。焼成は良好で胴部上半に黒斑が見られる。色調は内外ともに橙色。外面はハケのちナデでその後丁寧にミガキが施される。底部付近にはハケメが残る。内面はナデ調整で、幅10cm程度の接合痕が観察される。図化していないものの、一部に棒状タタキの痕跡が見られる。

溝口氏の指摘をもとにまとめると、甕棺のいずれも口縁部を欠く器形であるものの、胴部に2条の突帯を巡らす卵型が特徴である。底部にかけての窄まりかたや胴部の張り方などから、概ね中期後半の立岩式でも新しい範疇でKⅢcと考えたい。

副葬遺物（第29・30図、図版57・58）

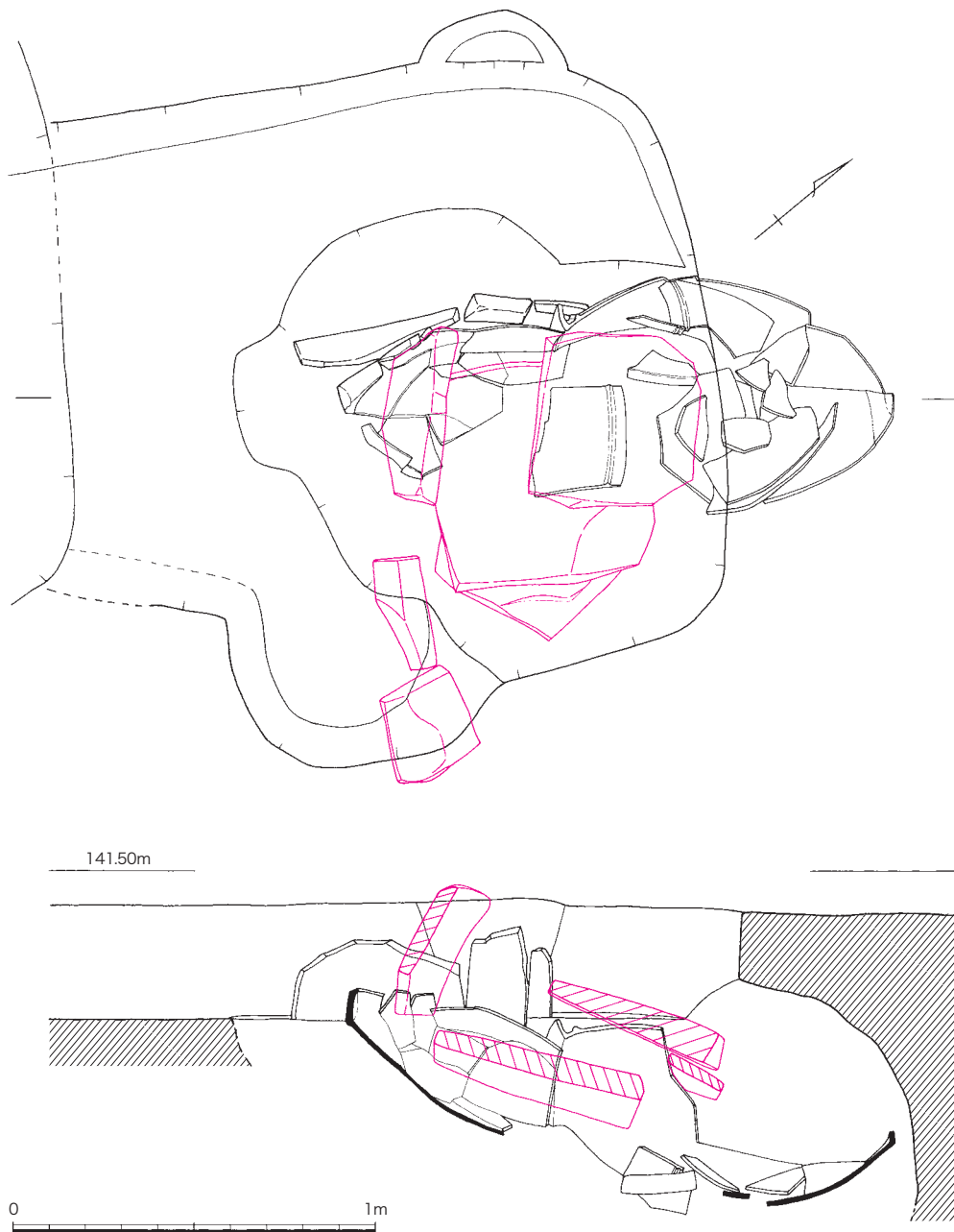
勾玉 第29図1は下甕の肋骨下部から出土した勾玉である。濃い緑色で、やや質は悪く部分的にヒビ等が生じるなど風化の進行が見られる。頭部に1孔、尾部、頂部にそれぞれ孔が穿たれる。それぞれの孔は頭部の1孔につながり、緊縛用の沈線痕が表裏共に無数に施される。材質はやや劣るもののつくりは非常に丁寧な優品で、所謂緒締形勾玉に分類される。1個体だけの出土であることから首飾と想定される。そのことを示すように孔の内部にも赤色顔料が付着している。長さ2.4cm、幅1.6cm、最大厚9mm、重さ4.2gを測る。なお石材は硬玉製である。

貝輪 第30図は着装されていた貝輪である。1～11が左手、12～15が右手に着装され番号の若い方から手首側に順番に番号を付している。うち6は2個体が癒着しているため切り離すことが出来ず、1つの個体として実測している。

さて、径の推定される3は長径6.9cmに対し11は8.9cmを測り次第に大きくなっていることを示す。この傾向は左手でも同様と考えられ、手首に向かって次第に小さくなっていると思われる。これらの貝輪は、イモガイの上部付近を横方向に輪切りにしたいわゆるイモガイ横型貝輪に位置づけられ、厚さは2～3mmにほぼ固まる。4号のゴホウラほどバラツキは大きくないが、連続的着装を意識したオーダーメイド品と言えよう。また風化による破損を除くと15点の内に使用時の破損と思われる箇所は殆ど見られないことから、常時着用品ではない可能性が高い。

6号甕棺墓（第31、32図、図版30～32・59）

調査区北西側に位置し、5号甕棺墓と切り合うものの前後関係は不明である。墓壙は5号との切り合いを把握出来ないまま掘っているため全容は把握できていない。平面形は検出面で確認される限り不整形を呈し、長軸約1.8m + α、幅約1.9m + α、墓壙の深さ約30cm、甕棺最下部までの深さは確認面から約80cmを測る。甕棺の挿入方向は北方向で、方形の墓壙に段を付け、下甕を埋置する部分は北側に横穴を掘り窪めている。甕棺墓上甕西側には扁平状板石が3つ並べられてお



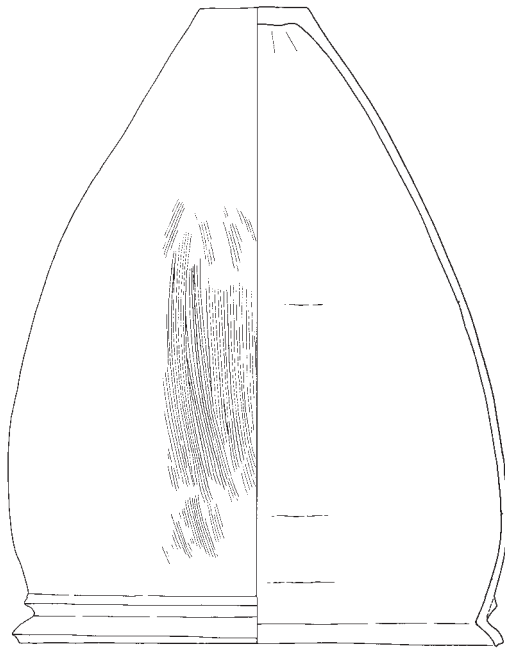
第31図 6号甕棺墓実測図 (1/20)

り、その直上には長さ60cm、幅60cmほどの大石が複数枚甕棺のなかに崩落していた。特に注目されるのは北側面の板石の存在で、甕棺を石棺状に覆う目的と考えられる。主軸N139°W、埋置角度13°である。上下棺ともに口縁を残し接口式に組み合わせる。甕棺内部には副葬品等は見られず、人骨も確認されなかった。

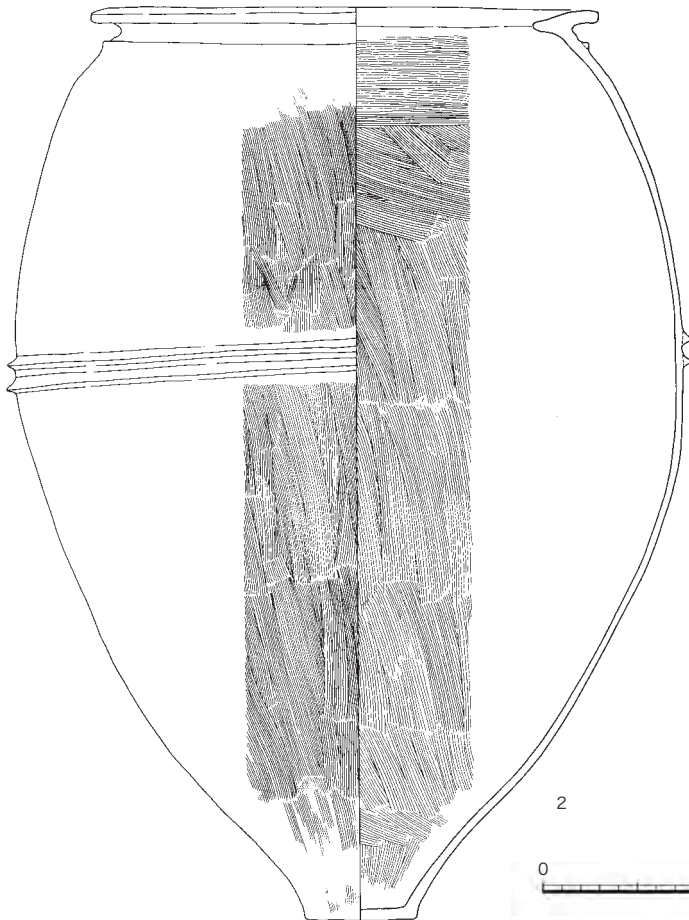
第32図1は上甕である。口径50cm、胴部最大径51.7cm、底径11.3cm、器高67.2cmである。口縁



写真17 6号甕棺墓



1



2

0 20cm

部はくの字状を呈して外に開き、端部はやや内湾してシャープに作られる。頸部には断面三角形状のややだれた突帯が1条巡り、若干張り出したのち底部にかけて直線的に窄まる。底部は薄い平底を呈する。器壁は0.9cmで、底部の厚みは1.9cm程度である。胎土には長石・角閃石を含む。焼成は良好で、色調は内外共に黄橙色で、調整は外面がハケ後ナデ、内面は丁寧なナデ調整が施されている。内面には7センチ程度の幅で接合痕が見られる。

2は下甕である。口径53.4cm、胴部最大径70.5cm、底径11.8cm、器高96cmである。口縁部は鋤先状を呈して内側に突出して傾斜する。口縁端部を外湾させながら上方に傾き、シャープに作られる。頸部には断面三角形状の突帯が1条巡り、胴部最大径部に断面逆台形状を呈する突帯が2条巡る。胴部はやや長胴気味だが、胴部下半にかけてすぼまり、底部は薄い平底を呈している。器壁は0.8cmとかなり薄く、底部の厚みは1.1cm程度である。胎土には石英・長石・角閃石・金雲母を含み、焼成は良好で胴部全体にかけて黒斑がみられる。色調は内外共に橙色で、調整は外面がハケ調整でナデ消しを行わない。内面もハケでナデ消しを行っていない。図化はしていないが外面には幅5cm程度の棒状タタキ痕跡が認められる。

溝口氏の推敲をもとにまとめる

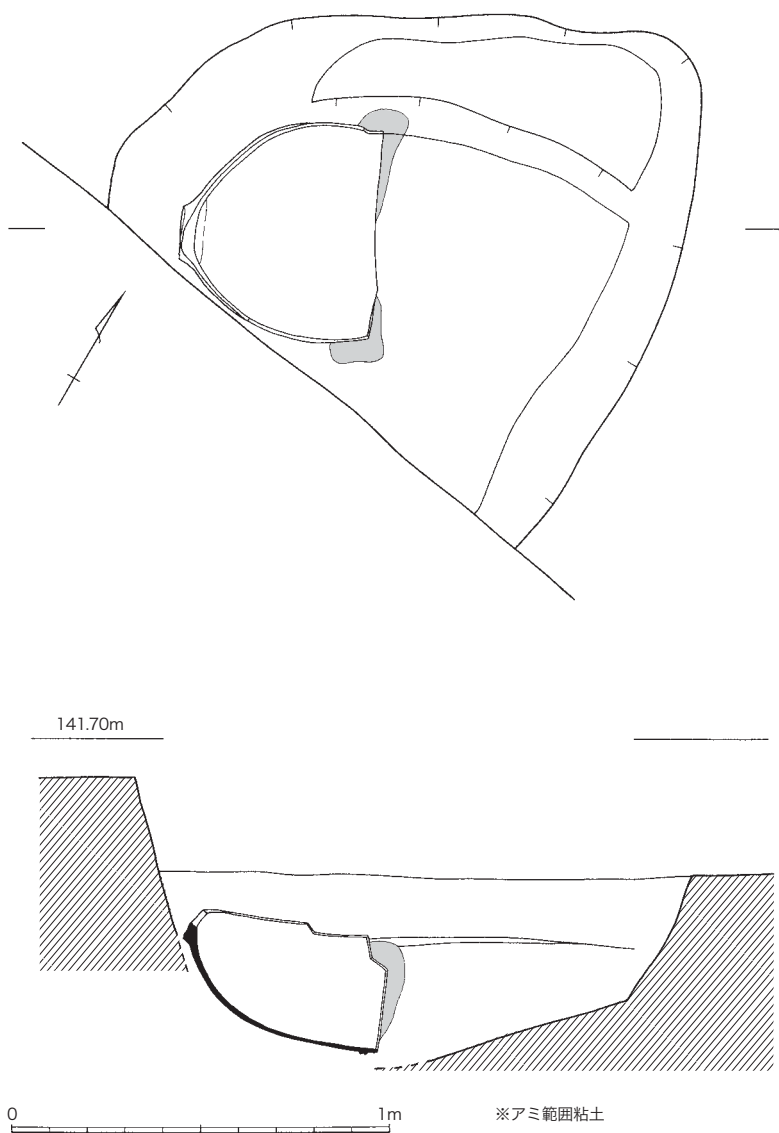
第32図 6号甕棺実測図(1/8)

と、上甕は跳ね上げ状口縁を呈し胴部の形状などから須玖Ⅱ新段階並行か。下甕は鋤先状口縁が立ち上がることから中期立岩式でも新段階のKⅢc並行と考えたい。

7号甕棺墓（第33・34図、図版33・60）

調査区南端に位置し、経塚に隣接する。南西側は調査区外となっており未掘である。平面形は検出面で確認される限り不整形方形を呈し、長径1.5m、短径1.4m + α 、甕棺最下部までの深さは確認面から約50cmを測る。北側に小さなテラスを有する。上半部を削平されており、片甕のみが残存しているため甕棺の挿入方向は不明である。甕の口縁部は打ち欠かれており、口縁部付近には目貼り粘土が巡っている事から、何らかの上部施設の存在が予測される。木蓋か或は甕が抜取られている可能性があるが現況では判然としない。主軸はN61°Eで埋置角度は不明である。棺内には人骨や副葬品は見られなかった。

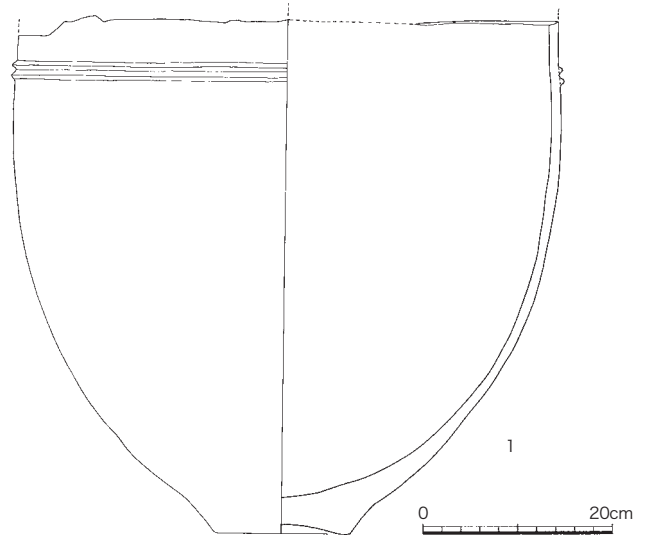
第34図は大型の甕の口縁部を打ち欠いたもので、2次口縁径は口径57.1cm、底径13.2cm、器高54cmである。胴部には断面三角形の小さな突帯が2条巡る。胴部下から緩やかにすぼまり、底部は上底状を呈している。胎土には石英・長石・角閃石・雲母が含まれる。器壁は9mm程度で、底部の厚みは2.8cm程度になる。焼成はやや良好で、色調は内外ともに橙色である。器壁の摩滅が著しいため調整不明である。



第33図 7号甕棺墓実測図 (1/20)



写真 18 7号甕棺墓



第 34 図 7号甕棺実測図 (1/8)

溝口氏の指摘をもとにまとめると、片甕のみであるため全体像が判然としないが、残存する甕の大きさから中型棺と想定される。口縁部を欠くものの底部の形態や胴部プロポーション等から、中期初頭の城ノ越式並行 K II a と考えられ、日田市でも最も古い部類の甕棺墓と言える。

(5) 木管墓

調査区の中央部より南側において全部で3基の木棺墓が検出された。ひとかたまりにまとまっており、検出状況から3⇒1⇒2号の切り合い関係が把握される。1・2号は両小口に板石が置かれるタイプの木棺墓で、3号は未掘のため詳細不明である。このうち、2号はその規模から小児用の木棺であると思われる。また、1号木棺からは銅剣と把頭飾の出土が見られた。

現状以上の破壊を免れる方針で作業を進めていることから確認が不足している点が多々あり、また図面等に不備があることをあらかじめ述べておく。なお銅剣については岩永氏の分類^{註4}を用いる。

1号木棺墓 (第35～37図、図版35～38)

4号甕棺墓の南側に位置し、3号木棺墓を切り、2号木棺墓に切られる。当初一段高い位置を床面としていたが、トレンチ調査により床面が下がることが確認された。裏込め部分は保存のため未掘で、以上のような事情により図面等に一部不備がある。確認面での平面形は西側がやや広い長方形を呈し、規模は長軸は約2.55m、短軸は約2.3mを測る。墓壇の壁はほぼ垂直で掘りこまれ、床面は平坦である。墓壇中心部の位置に木棺のプランが確認され、両小口には安山岩の扁平石がたてられていた。床面にはトレンチで確認される範囲においてのみであるが木棺痕跡が認められ、墓壇短軸の土層観察においても南北両側において若干の木棺痕跡の立ち上がりが見られる。裏込めは8・11・12層において黒褐色土層、19・21層において暗色系土層が認められ、これらの前後に地山ブロックを用いる粘質系土層がサンドされる。木棺痕跡との関係から16・15層は裏込めの崩落等に伴う層と想定



写真 19 1号木棺墓

され、第35図の網掛け範囲が裏込め残存部と考えられる。これらのことから木棺は長軸1.9m、短軸0.75mの長方形で、検出面から床面までの深さは約0.8mを測る。両小口の板石はかなり内傾しており、土圧による崩落を示している。床面は平坦であるが、若干西側が高いことから、頭位方向の可能性が高い。木棺内の埋土状況では板石基部付近に黒褐色系埋土が認められる。木棺腐食までの自然堆積層で、その後地山ブロック等が流入するものと想定される。床面西側の一角に集中して赤色顔料の塗布が認められ、埋葬時に顔面部分へ塗布したものと思われる。

また、この木棺墓の中央部南側から細形銅剣と把頭飾が出土した。被葬者が伸展葬であるとすれば、ちょうど右手の位置にあたる箇所である。この銅剣は木棺墓主軸よりやや南側に切っ先を向けており、基部の延長上に把頭飾が位置する。把頭飾と基部との間の木質の把が腐食したものと考えられる。主軸方向はN70°Wを測る。

木棺出土遺物（第37図、図版44）

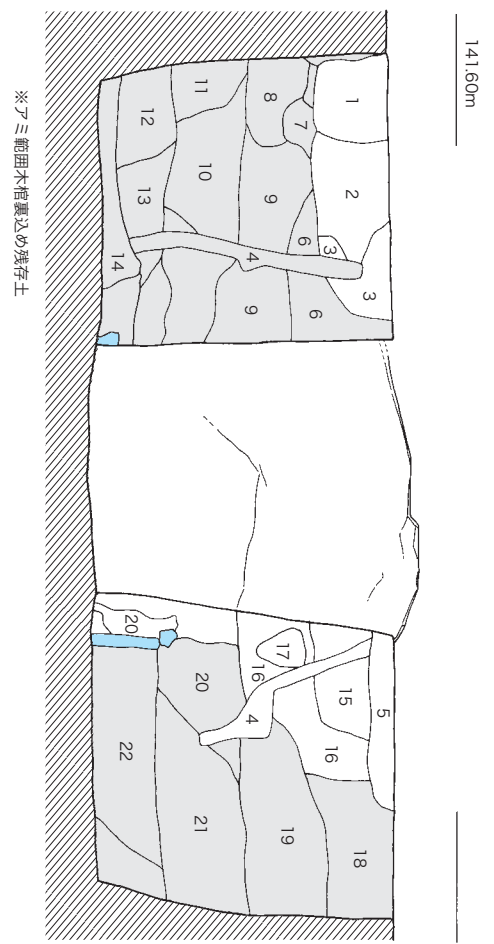
1は北側トレンチ裏込め埋土より出土した弥生土器甕の頸部破片である。如意状口縁を呈するものと思われ、頸部下部に突帯を巡らせ頂部に刻目が施される。2は南側トレンチ裏込め埋土より出土した弥生土器壺の頸部で突帯が1条巡る。3は木棺墓内より出土した弥生土器甕の底部である。平底でやや厚みがある。

1・2は形態的特徴から概ね中期初頭の城ノ越式の範疇に収まるものと考えられ、3はやや厚みが薄く須玖I式並行か。木棺構築時に伴うものが1・2であり、3は木棺崩落時の流入の可能性もある。

副葬遺物（第36図、図版61）

銅剣 1は銅剣で全体的に濃い青緑色を呈する。鋒及び刃両側辺部分の破損が一部見られるものの、表裏ともに錆が少なく、研磨面が保たれている部分は光沢を放つなど保存状態は比較的良好である。全体的には刃部から鋒にかけてやや先細りとなり、刃をしっかりと研ぎ出し、鎬が身部全体に通る。脊部の断面形は菱形をなす。身部の樋は左右対称となり、鋒までの長さは約4.1cmを測る。また、割り方は長さ3.7cmで、突起の幅は2.8cmを測る。脊部の鎬は関部まで施され、関はやや張り出す。茎はしっかりとしたつくりで、把との接合のためか両側面部に4箇所の切れ込みが施される。茎は断面ほぼ円形である。残存する全長は26.7cm、茎部長2.4cm、身幅3cm、茎部径1.5cm、関部幅3cmで重さは約206.6gである。鎬の位置などから細形銅剣Ⅱb式に該当すると考えたい。

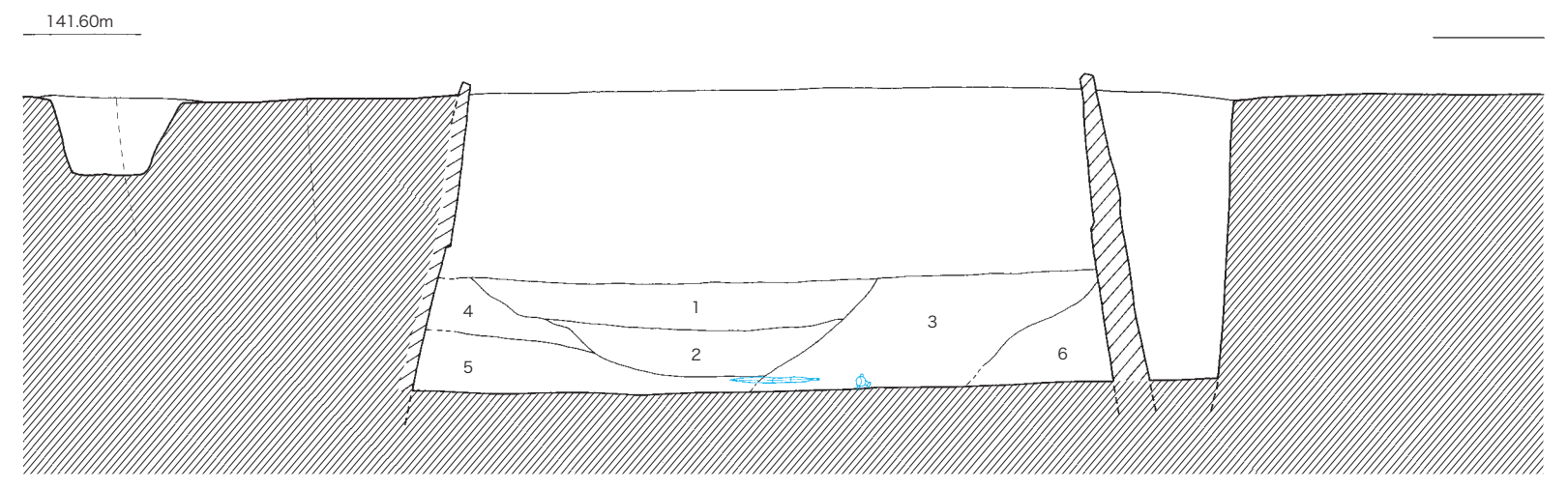
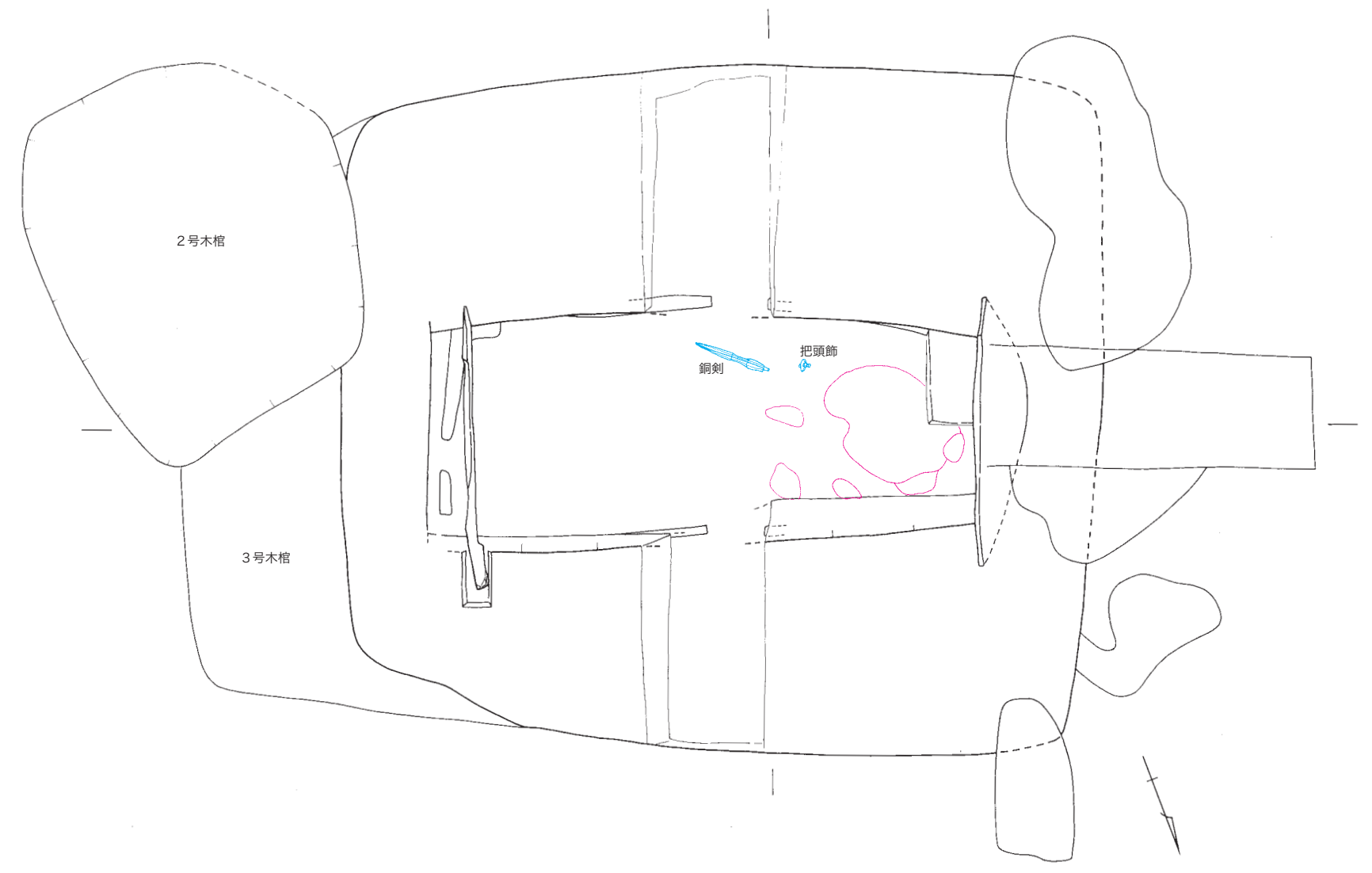
把頭飾 1は青銅製の十字形把頭飾である。全体的に濃い緑色を呈し、保存状態は比較的良好である。供伴の細形銅剣と錆化の状態・色調が同様で黄褐色味が強い緑色が見られる。欠損はまったく見られない。いわゆる方柱付十字形のもので、シャープな作りの方柱には上部に突線が有り、その先端には円盤が付き、円盤頂部には穿孔が見られる。羽部付根には光沢を放つ摩擦面が見られ、緊縛痕と想定される。全体長3.75cm、方柱部幅1.8cm、十字部分5.1cm×3.95cm、円盤は1.5cm、厚さ0.5cm、重量57gである。



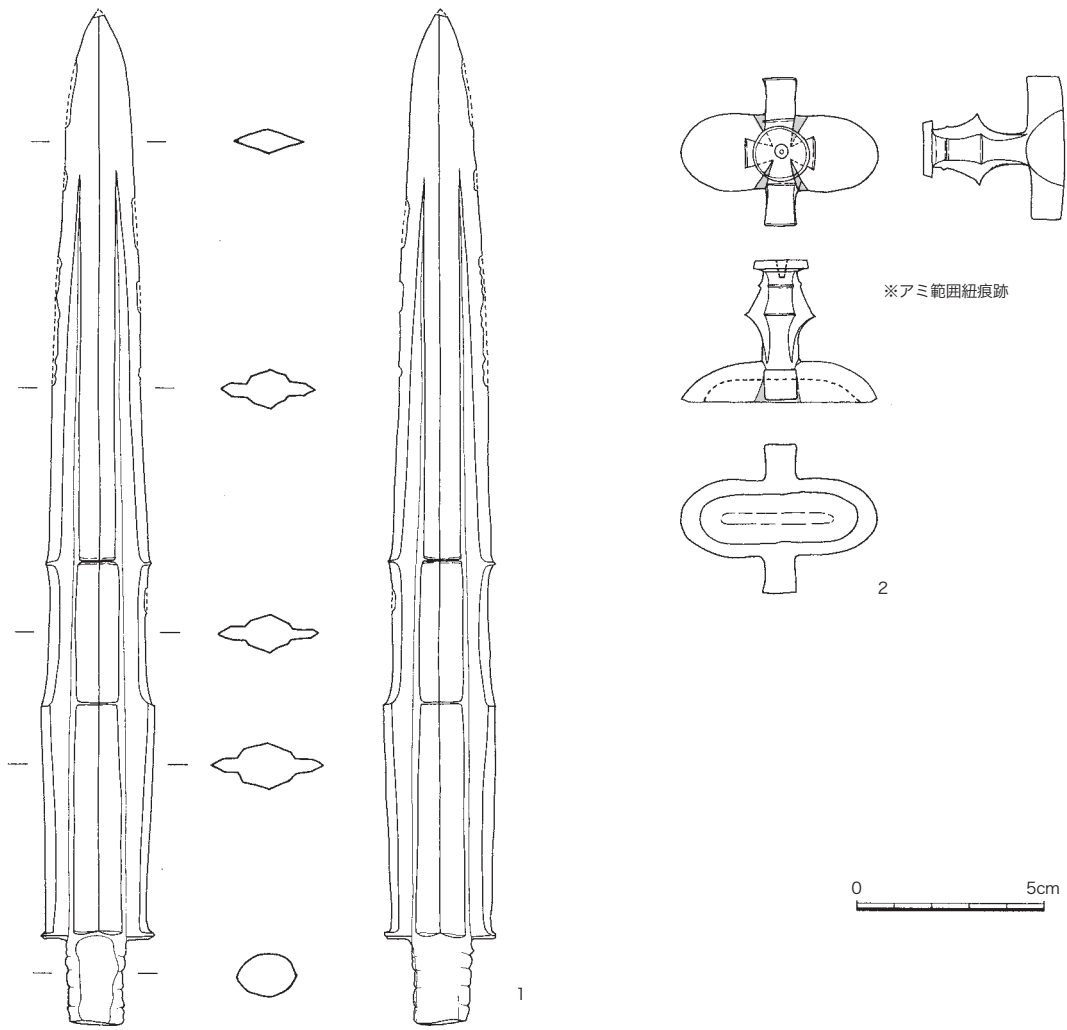
- 1号木棺
ヨコ土層
- 1 灰茶褐色土
 - 2 灰茶褐色土、地山ブロック混
 - 3 灰茶褐色土
 - 4 木根攪乱
 - 5 攪乱
 - 6 茶褐色土、地山小ブロック混
 - 7 茶褐色土
 - 8 黒褐色土
 - 9 茶褐色土、地山ブロック多量混
 - 10 茶褐色土、地山ブロック少量混
 - 11 黒褐色土、茶色土を若干含む
 - 12 黒褐色土、ブロック少量混
 - 13 黒褐色土
 - 14 粘質土
 - 15 暗茶褐色土
 - 16 茶褐色土、地山ブロック多量混
 - 17 明茶褐色ブロック土
 - 18 明灰褐色土、地山ブロック若干混
 - 19 暗灰茶褐色土、地山ブロック若干混
 - 20 赤土ブロック
 - 21 暗灰茶褐色土、粘土・赤土若干混
 - 22 粘質土

- 1号木棺
タテ土層
- 1 暗茶褐色土、地山小ブロック多量混
 - 2 黒褐色土、地山小ブロック少量混
 - 3 明黄褐色土、地山ブロック多量混
 - 4 粘質茶褐色土
 - 5 黒褐色土
 - 6 黒褐色土

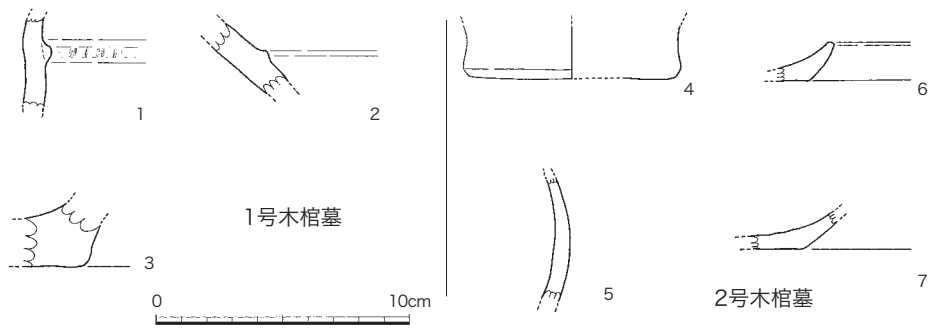
0 1m
 ※赤アミ範囲赤色顔料
 ※青アミ範囲木棺痕跡



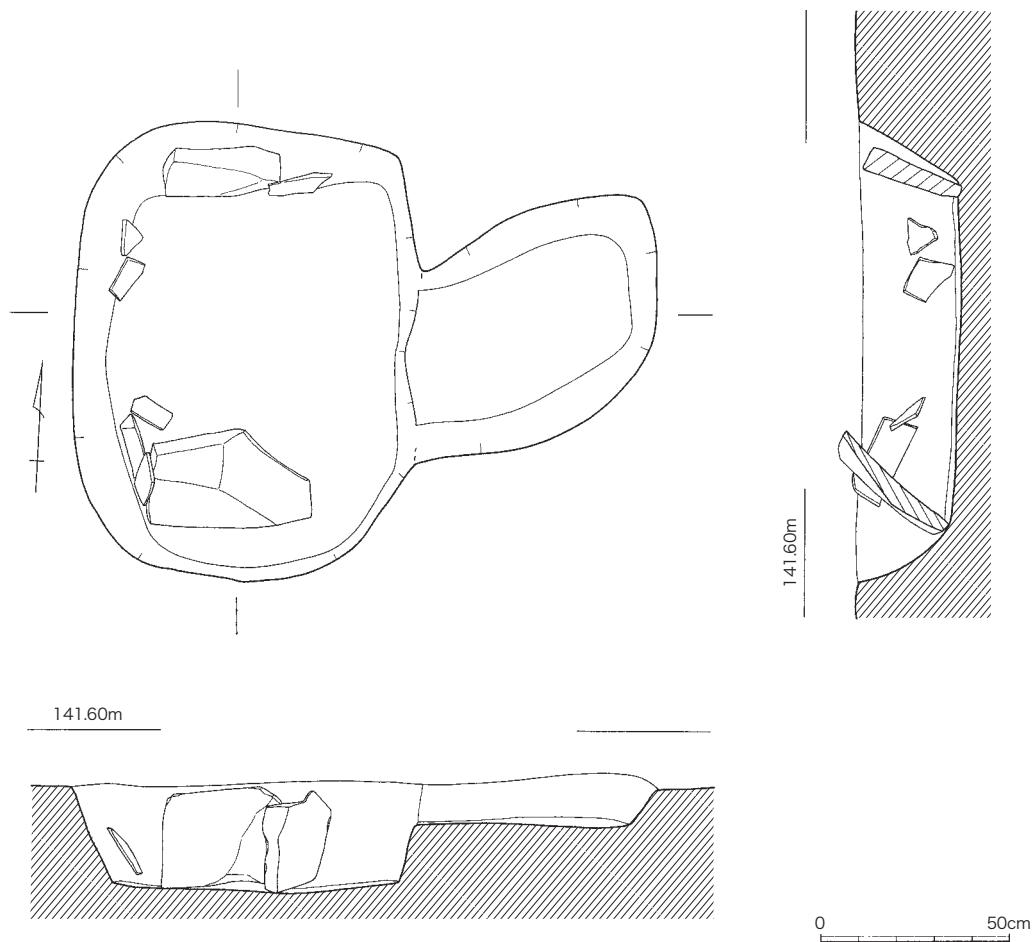
第 35 図 1号木棺墓実測図 (1/20)



第36図 1号木棺墓出土銅剣、把頭飾実測図 (1/2)



第37図 木棺墓出土遺物実測図 (1/3)



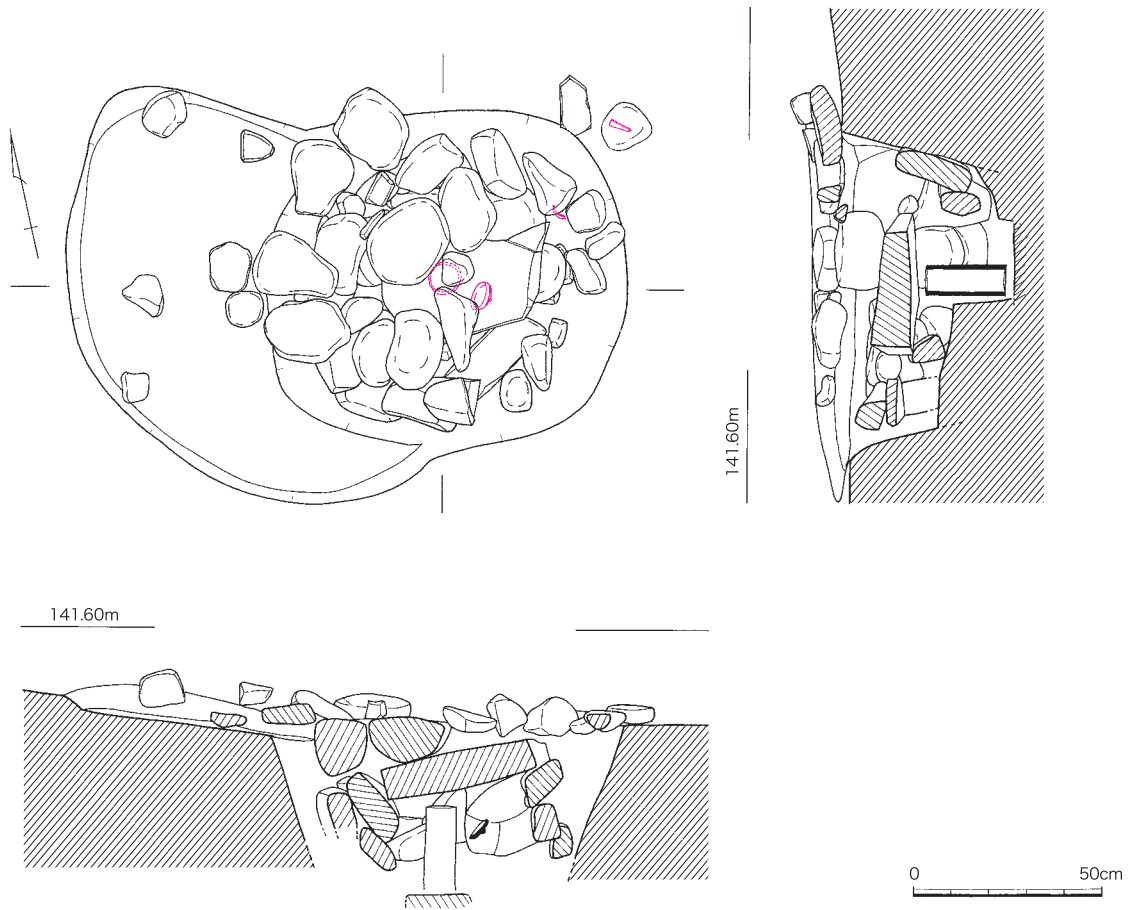
第 38 図 2号木棺墓実測図 (1/20)

2号木棺墓 (第38図、図版39)

調査区の中央よりやや西側に位置する木棺墓で、1・3号木棺墓を切る。また4号溝との切り合い関係が不明であるが、本遺構から出土する遺物に古代～中世のものが含まれることなどから2号木棺⇒4号溝の可能性が高い。検出面での平面プランは隅丸方形を呈し、東側にはやや小さな土坑が見られる。この土坑は深さ10cm前後と浅く、調査時の確認が不足しているものの、4号溝と関連する遺構の可能性を考慮する必要があるだろう。墓壙長軸は1.2m、短軸は約0.9m、深さは約25cmを測る。墓壙の南北両小口に土圧で傾いた状態で板石が埋置され、側板の痕跡は確認出来なかった。西側には小さな板石を数枚並べており、側板を支えていた可能性がある。推定される木棺規模は、長軸約0.85m、短軸約45cm程度と想定される。規模の小さな木棺墓であることから、小児用の可能性も考えられる。そのことを証明するように、1号木棺墓の主体部を破壊することなく2号木棺墓は構築されている。頭位方向は不明で、主軸はN5°Wを測る。

木棺出土遺物 (第37図、図版44)

4は弥生土器甕の平底の底部である。5は白磁壺の胴部である。6は土師器小皿で上方に口縁部が立ち上がる。7は土師器皿の底部である。内外共にナデ調整である。4は弥生時代中期前半代に収まると考えられるが、6～7は小破片であるものの概ね12～13世紀の範疇か。



第 39 図 1 号経塚実測図 (1/20)

(6) 経塚

1号経塚 (第39図、図版40～42)

調査区東隅で検出された経塚である。検出面で不正方形を呈しており、規模は長軸1.5m、短軸1mを測る。西側にテラスを有し、東側が埋納部本体と思われ一段深く落ち込む。この埋納部本体はほぼ楕円形を呈し径約90cmを測る。床面までの完掘は行っていないため深さは不明である。埋納部は円筒状に掘り込み、底に台石を据えて経筒を安置する。経塚の蓋は外れて横におちた状態で検出された。周囲には礫石をならべ、上部には平たい蓋石を被せており、さらにその上部に礫石を積み重ねていた。

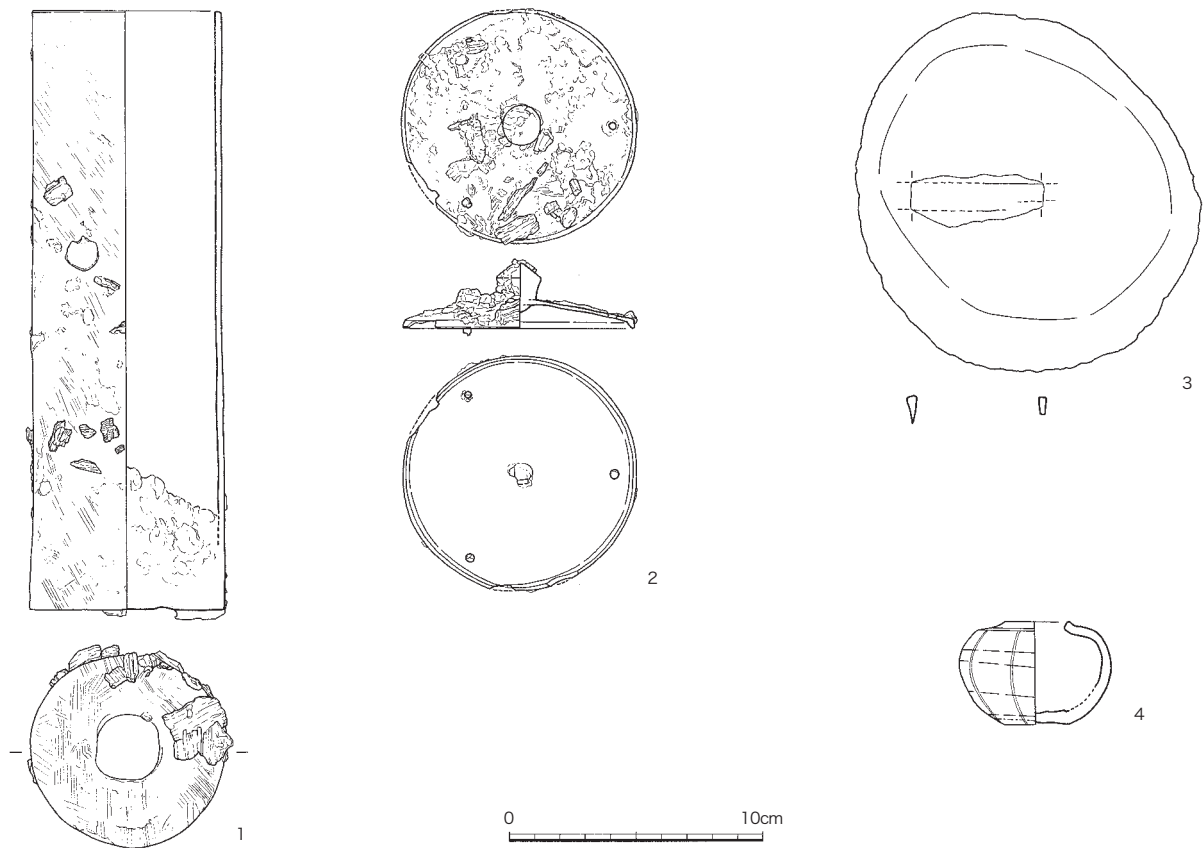
上面の礫石は西側テラス部まで広がっていることから、これらは石積みの可能性が高く、本来この上面に封土が載っていた可能性が高い。経筒周辺には炭が見られ、経筒周辺を木炭で囲っていたことが想定される。また、墓壙東側の葺石に付着した状態で刀子が検出され、蓋石の上面やや東側からは白磁小壺の破片が出土した。いずれも供献遺物と想定される。

出土遺物 (第40図、図版62)

第40図1、2は埋納されていた経筒である。1は



写真 20 1 号経塚



第40図 1号経筒埋納遺物実測図 (1/3)

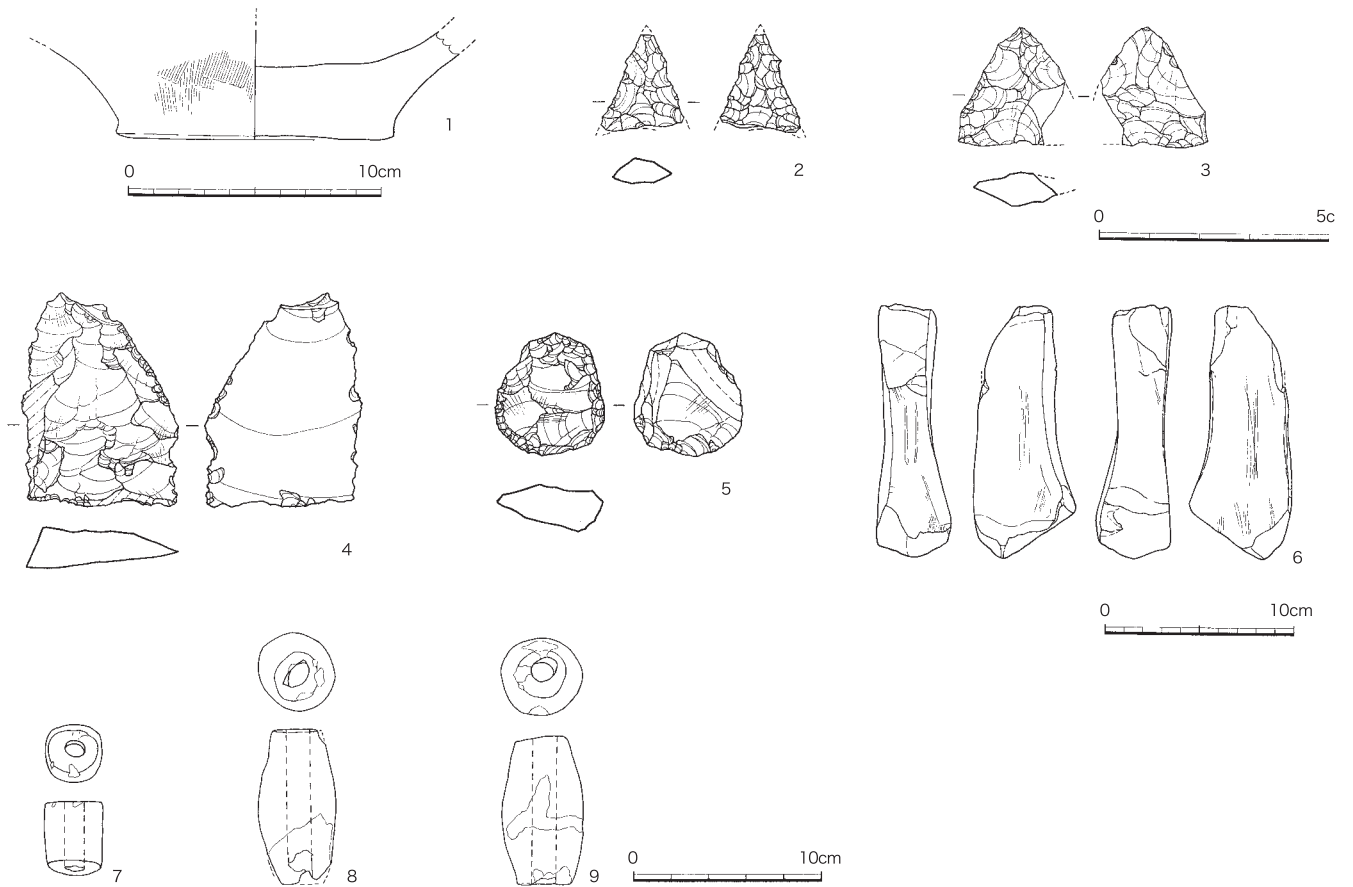
筒身で、やや細身の円筒式を呈する。高さ23.7cm、口径7.5cm、底径7.7cmを測る。底まで一鑄で造られ、筒身底は筒部銅板を折り曲げて平滑に仕上げ、中央部に残る穴には別鑄の銅板を充填することで底を形成している。そのため底部には成形時の研磨痕が顕著に見られる。筒内底部には紙と思われる炭化物が崩れた状態で溜まっており、紙本経であると思われる。このため底部についての観察が出来ていない。外面にはほぼ全面に炭が大量に付着しており、経筒を炭で覆っていたものと想定される。

2は蓋で被蓋式の撮蓋形式を呈する。天井部は直線的に伸び、口縁部を小さく折り曲げる。高さ3cm、口径9.2cm、厚さ0.2mm、重さ76.1gを測る。天井部には宝珠状のつまみが見られ、内面にはこのつまみを固定する際の突起が残存する。外面には炭が多量に付着している。口縁部屈折部付近には3mm程の3穴の穿孔が見られ、うち1つには棒状の突起物が突き刺さる。この穿孔を結ぶ円の外径側は7.8cm、内径は7.2cmを測る。蓋の口径は筒身の口径7.5cmに比べてかなり大きく、このままでは固定は難しいことからこの穿孔によって傘蓋式のように擬似口縁を作り出し、筒身外側に被せるための調整を行っていたものと想定される。

3は埋納されていた刀子である。石に凝着していたため概略での実測となった。銹膨れが著しいもの



写真21 経筒蓋内面



第41図 その他の遺物実測図 (1/3) ※剥片石器 2/3、礫石器 1/2

の関の部分認められ、身部は欠損しているものと想定される。

4は埋納された青白磁小壺である。壺型合子と想定され、口縁部は小さく立ち上がり、頸部付近には鎬文様が巡り、胴部はやや張り出す。外面に縦方向の鎬紋が全周しており、白色の胎土に内外ともに釉が施される。全体につくりのよい優品である。

埋納小壺の時期は概ね12世紀前半の範疇に収まると思われることから、経塚の所属年代も概ね古代末期の範疇で考えたい。

(7) その他の遺物 (第40図、図版42)

1～10は表土中及び各遺構から出土した土器及び石器類である。ここでは一括して紹介する。

1は弥生土器壺の底部である。平底を呈し、胴部にかけて大きく外側へと開く。外面には縦方向のハケメが残る。2は黒曜石製の凹基式石鏃である。基部の一部が欠ける。3は黒曜石製の平基式石鏃である。基部が欠損する。4は黒曜石製の2次加工剥片である。5は2次加工剥片である。下端部を丁寧に調整して円形状に仕上げている。6は砥石である。各面に擦痕が残る。7～9は土錘である。8は上部が欠損しており、9、10はほぼ完形である。

第3節 小結

さて以上の事実報告から、今回の6次調査において確認された遺構群は、大きく弥生時代と古代の2時期に区分することが出来る。そこで以下の細節において、この大まかな時代毎にその詳細を検討するとともに、特徴について考察を加える。なお、遺物の出土が見られなかった土坑と柱穴に関しては検討から除外した。

(1) 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は大きく生活遺構と墳墓群に分ける事が出来る。

① 生活遺構

貯蔵穴が5基確認された。全て円形を呈し、1・2・5号は袋状貯蔵穴であると考えられる。かなり削平を受けているものと思われ、5号の1.5mを除くと全て1m未満の深さである。甕棺墓の削平度合いからみても本来はかなり深かったものと考えられる。さて、これら5基の貯蔵穴の廃絶時期は、出土遺物の特徴などから概ね中期初頭の範疇に収まり一部前半の遺物も見られる。なかには中期中葉須玖式の成人用甕棺の破片や中期末～後期代と見られる遺物も含まれ、貯蔵穴上面への後世の廃絶も窺える。

吹上台地ではこれまでの11次に及ぶ調査において、1次6基・2次12基・3次4基・6次5基、7次3基・8次3基・9次13基・10次13基・11次2基^{註5}と総数61基の貯蔵穴が確認される。その分布範囲に特定域への集中は見られず、台地全体にまんべんなく広がり、推定で数百基を超えると考えられる。これまでの調査成果をもとに貯蔵穴群の変遷を概観すると、前期後半段階に数基の貯蔵穴を中心として台地の利用が開始されると、前期末～中期初頭頃には台地全体に貯蔵穴群が展開してピークを迎え、その後中期前半には貯蔵穴は激減する。これは他地域において観察される現象とほぼ同じで、穀物管理体制の変化を示していると思われる。前期後半～末になる数基以外の大多数の貯蔵穴は、概ね前期末～中期初頭の範疇に収まり、この時期が吹上台地における貯蔵穴の最盛期といえよう。このような傾向を加味すると、本調査区例の貯蔵穴の廃絶時期は概ね他例と同様に前期末～中期初頭の範疇で捉えられ、最盛期にあたると言える。

墳墓の所属時期

本調査区において確認された墳墓群は甕棺墓7基、木棺墓3基である。このうち人骨の出土が見られたのは3～5号甕棺墓、副葬品が見られたのは2・4・5号甕棺墓、1号木棺墓となる。また、7号甕棺墓は残存高約54cm程度で上甕あるいは木蓋等の存在を加味しても小・中型棺の可能性が高い。2号木棺墓に関しても木棺長軸0.85cmとかなり小さく小・中型棺と思われる。以下墳墓の特徴についてそれぞれ述べる。

墳墓群の所属時期

墳墓の所属時期に関しては、これまで全ての墳墓を中期後半として報告してきたが一部変更があり、以下に前節までの内容をまとめながらその所属時期を検討する。

甕棺墓の所属時期は第2節においてほぼ述べたが、頸部の窄まり方と全体に丸みをもつプローション、口縁部の水平化～くの字化の傾向などが時期区分の特徴として捉えられる。前節同様橋口氏の分類・型式名^{註2}をもとに再度整理すると、7号が城ノ越式のK II a、2号が立岩式K III b～c、1・4～6号が立岩式K III c、3号が須玖Ⅱ新段階並行K III c～桜ノ馬場式K IV aに相当すると考えられ、

中期初頭～後期初頭の範疇に収まることになる。

木棺墓の所属時期については出土遺物が少なく決め手に欠ける。1号木棺墓構築時の裏込め土からの出土遺物は中期初頭、主体部等の一括遺物は中期前半である。また2号木棺墓には中期前半の土器が見られる。出土遺物から1・2号木棺墓は、構築時期が中期初頭の可能性が残るものの、概ね中期前半期以降の範疇で捉えられよう。これは中期後半以降の1～5号甕棺墓の主軸方向が北東方向であるのに対し、木棺は南東方向と異なっていることとも合致する。また副葬品である細形銅剣及び方柱付十字形把頭飾の類似例も^{註6}汲田～須玖式の甕棺に伴うものが多い。以上の点を総合的に判断すると、1号木棺墓の所属時期は概ね中期前半～中頃の範疇に収まり、1号に寄りそうように近接埋葬される2号木棺墓もほぼ同時期と判断したい。

甕棺の形態的特徴

各個体の特徴のうち、7号甕棺は日田地域でも甕棺墓の初現となる城ノ越期に相当する。市内においては上野第2遺跡^{註7}に当該時期の甕棺墓が認められるものの器形的には類例は見られず、福岡県うきは市仁右衛門畑遺跡Ⅱ 43号土坑出土の大型甕や福岡県朝倉市大庭・久保遺跡^{註9} 11号甕棺上甕などに類例を見出すことが出来る。その他の甕棺の大半が所属する立岩期では、大肥遺跡^{註10} 4号甕棺が市内における明確な類例であるが器形的な特徴は必ずしも一致しない。このうち、2号甕棺では溝口氏の指摘から、特に上甕と下甕の胴部プロポーシオンに違いが見られ、上甕の胴部がやや直線的になる特徴は福岡県筑紫野市道場山遺跡^{註11} 13号甕棺などにその類似例を見出すことが出来る。^{註12} また2号甕棺下甕や1・6号甕棺は朝倉市栗山遺跡^{註13} やうきは市鷹取五反田遺跡^{註14} の甕棺群に類似性を見出すことができ、概ね筑後川中下流域の影響が窺える。

次に4・5号甕棺のように上下甕の口縁部を打ち欠く当該期中・大型甕棺は、3号甕棺のように主体部となる下甕のみをうち欠くものも含めると日田市内の大肥遺跡3号甕棺、吹上遺跡1次1・2号甕棺・9次2～4号甕棺、小迫辻原遺跡B区^{註15} 5号墓などが知られる。形態的な特徴も類似し、栗山遺跡など筑後川中下流域でも見られる頸部のしまる丸形の甕棺を打ち欠いて使用しているものと推測される。これに対し、3号上甕に関しては吹上遺跡9次1号甕棺下甕に類似し、多条突帯を有する属性から遠賀川以東系の特徴と合致する。

このような中期後半時期において下甕或は上下甕の口縁部を打ち欠き、主体部が従来の器形の制約を受けないようにする方法は、筑後川中流域においては栗山遺跡1・44号墓や鷹取五反田遺跡8・13号墓、うきは市岩野遺跡^{註16} 1・4号墓などで類例が見られるものの、墓地全体の数%と決して多いとは言えない。これに対し、吹上遺跡においては中・大型甕棺12例のうち9例が上下或は下甕をうち欠くものであり、75%と非常に高い比率を占めている。甕棺口縁を打ち欠くことで主体部空間を確保する方法が恒常的に採用される状況は、利用した甕棺は頸部のしまった特定形状のものが多かったことを示しており、日田地域の埋葬者の利用意図に必ずしも合致するものではなかったことが推測される。このことは同時に、甕棺の大半が他地域からの搬入等や影響によって製作された可能性を示し、上述のように甕棺の大半が筑後川中流域以西に器形的類似性を求めることができる事とも合致するのである。以上のような状況は、中期後半の一時期ではあるが、甕棺葬の周縁地域の特殊事情を示すと共に日田地域の甕棺葬の特徴を示している。

甕棺墓の構造的特徴

さて、各甕棺の墓壙については、大きさに特徴を見出すことが出来る。復元された墓壙の長さ約

3m 前後を測る 2・4・5 号甕棺墓と約 2m 前後の 1・3・6 号甕棺墓とに分けることができ、前者を大型、後者を小型とすると、大型のものには副葬遺物が伴う特徴が見出される。このことから、厚葬のものほど墓壙は大型で作られたと考えられよう。

次に特徴として挙げられるのは、4 号甕棺墓外甕の副葬施設の存在である。一見、三連棺のように見えるが主体部と外甕は完全に分離しており、日田地域の小児棺で見られるような連棺の墓制とは様相が異なる施設といえる。さらに主体部外への副葬品の埋納であることから、厳密には棺外副葬と捉えることができ、鉄剣・銅戈が比較的多く棺外副葬に用いられることとも合致する。さて、このように甕棺で棺外施設を作るという行為はこれまでのところ他地域に類例を見出せず、その系譜を追うことは出来ない。しかし、棺外施設を作るという点においては 6 号甕棺墓の石棺状の覆いも同種のものと言えよう。この上下甕で閉じられた主体部の上甕を囲うように石棺を配する行為は市内に幾つか類例があり、古くは賀川光夫氏が「箱式棺を外部施設とする甕棺」として朝日宮ノ原遺跡・吹上遺跡の各 1 基を紹介^{註17}している。朝日宮ノ原遺跡例は後期高三瀦式、吹上遺跡例に関しては後期代とされるもので、そのどちらも石棺状に上甕周辺を覆っており、朝日宮ノ原例ではガラス小玉が多数出土している。また近年の調査では、上野第 2 遺跡^{註18}において城ノ越期の小児用甕棺の上甕を石棺状に覆った例が報告されている。以上、市内においてもさほど類例が多いわけではないが、古くは中期初頭からその系譜が認められるのである。しかし、市外にこの種の埋葬例はなく、板石が上甕側面に据えられた甘木市柿原遺跡 E・F 地点 8 号甕棺墓（中期前半）にその可能性が見出せるぐらいである。

このように日田市内に類例の多くが集中する「棺外施設をもつ甕棺墓」は、甕棺墓制周縁部に見られる甕棺と石棺や土壙を併用した墓の例とは全く異なる施設と捉えるべきであろう。石棺併用墓は市内においては吹上遺跡 9 次 5 号墓に見られ、筑後川中流域では栗山遺跡 31 号墓、鷹取五反田遺跡 6 号墓などが挙げられる。そのほか、甕を一部利用した主体部を持つ土壙墓などは、筑後地域では栗山遺跡 2 号土壙墓や福岡県小郡市横隈狐塚遺跡^{註20} 4・7・84・86 号土壙墓、周防灘沿岸では宇佐市野口遺跡^{註21} 237・246・252 号土坑など、多数の例が挙げられる。このように甕を埋葬施設の一部として利用する例は多種多様ではあるが甕棺墓制周縁地域に多く見られるが、外部施設を目的としているか否かの点で、構造的に一線を画していると言える。

さて、以上をまとめると、甕棺外部を覆う施設については、①主体部として利用する例とは構築原理が異なり棺外施設を目的としている ②中期初頭から後期まで類例が見られる ③日田地域を中心に分布している ということになる。さてこのように考えると、上述の 4 号甕棺墓の外甕についても日田地域独自の甕棺外部施設を構築するものと材質の違いはあるものの、同種の可能性を指摘出来るのではないだろうか。ただし、この施設の有無と埋葬原理の関係についてなど、今後の類例を待つて検討する課題は多く残される。

木棺墓の特徴

木棺墓は両小口に板石をすえて、両側板を固定した痕跡が見られる。現状では小口で挟みこむタイプの可能性が考えられる。これは福永氏の組合せ式箱形木棺の I 型、柳田氏の組合せ式箱形 II 式に該当する。この種の木棺墓は日田市内では多数見受けられると共に、筑後川中・下流域でも岩野遺跡・柿原遺跡・大庭・久保遺跡などでも多数見受けられ、本遺跡例も地域の特徴を示しているものと思われる。

副葬遺物の特徴

イモガイ製貝輪・ゴホウラ製貝輪が2基の甕棺墓から出土したが、両者とも大きさの揃った明らかなオーダーメイド品として作られるとともに、5号甕棺の左手に貝輪が被った状況から、常時着装のような想定^{註24}とはやや異なった状況が見出された。このように、貝輪着装状況から、死後着装の可能性が指摘できたことは大きな成果と言えよう。しかし、死後着装が吹上遺跡独自の状況であるかについては今後の検討が必要である。

ガラス管玉については明確な着装状況は想定し難いものの、出土状況などから首飾などとは異なり、布等に縫い付けたような特殊な状況が想定された。ガラス管玉の利用方法は飯塚市立岩遺跡^{註25}において想定される頭飾りや佐賀県吉野ヶ里遺跡^{註26}での胸飾りや頭飾りのような直接的な着装方法だけではなく、間接的な利用方法などを検討する必要性を示し、今後の課題を提起したものといえる。そのほか、玉類としては4号甕棺墓で弥生的な垂定形勾玉、5号甕棺墓で縄文的な緒締形勾玉が出土した。吹上遺跡では2次2号甕棺墓より丁字頭の垂定形勾玉が出土しており、所謂定形勾玉の出現は見られていない。木下氏^{註27}は中期後半に縄文系勾玉の概念を組み込みながら定形勾玉が成立し、ガラス製の丁字頭勾玉を頂点とした体系が甕棺墓制文化圏において成立したと指摘する。吹上遺跡では、ガラスを素材とせずまた縄文系と混在するなかで垂定形勾玉が利用されている。甕棺墓制周縁部ではこの体系が緩やかに成立したことを示すものであろうか。

そのほか青銅器類については細形銅剣及び細形・中細形銅戈が出土し当該期の北部九州の墳墓群とほぼ同様の様相を示していると言える。

以上の墳墓群より出土した副葬遺物の総数をまとめると、銅剣1本、把頭飾1個、細形銅戈1本、中細形銅戈1本、鉄剣1本、ゴホウラ製貝輪15個、イモガイ製貝輪17個、垂定形勾玉1個、緒締勾玉1個、ガラス管玉525個以上となる(第42図)。4基の墳墓からこれら副葬品が出土しており、特定墓域内に豊富な副葬品を持つ墳墓群が連続して造営されたものと考えられる。このような豊富な副葬品を持つ墳墓が集合する状況は、時期的には福岡市樋渡墳丘墓^{註28}や立岩遺跡などの類例が挙げられ、その埋葬原理の類似性などが窺える。また、副葬品を豊富に持つ墳墓の中でも4号甕棺墓に内容の突出が見られるにも関わらず、墓地構造上での突出は見られない。この状況は片岡氏^{註29}が「王墓になりきれない特定集団墓」として指摘し、また溝口氏^{註30}が「生成しつつある不安定な上位層」と提示するモデルに相当しよう。これは、田中氏^{註31}が「有力クラン(氏族)内の有力層の墓」と指摘する厚葬墓の状況にあてはまり、所謂、階層的に卓越した特定主体墓が出現する前の社会段階を示しているものと考えられる。また、豊富に出土した副葬品には鏡類の出土は見られない。中園氏^{註32}は弥生中期後半の副葬品システムにおいて、最高ランクの須玖岡本遺跡や三雲南小路遺跡、その次に位置する立岩遺跡や東小田峯遺跡のさらに1ランク下ったものとして吹上遺跡を位置づけている。このような、福岡・糸島平野を中心とし、鏡埋納や墓地の卓越性を基礎とした論考^{註33}も加味し、本遺跡は甕棺墓葬周縁部における選択された在地エリート層の墓地であると位置づけておきたい。

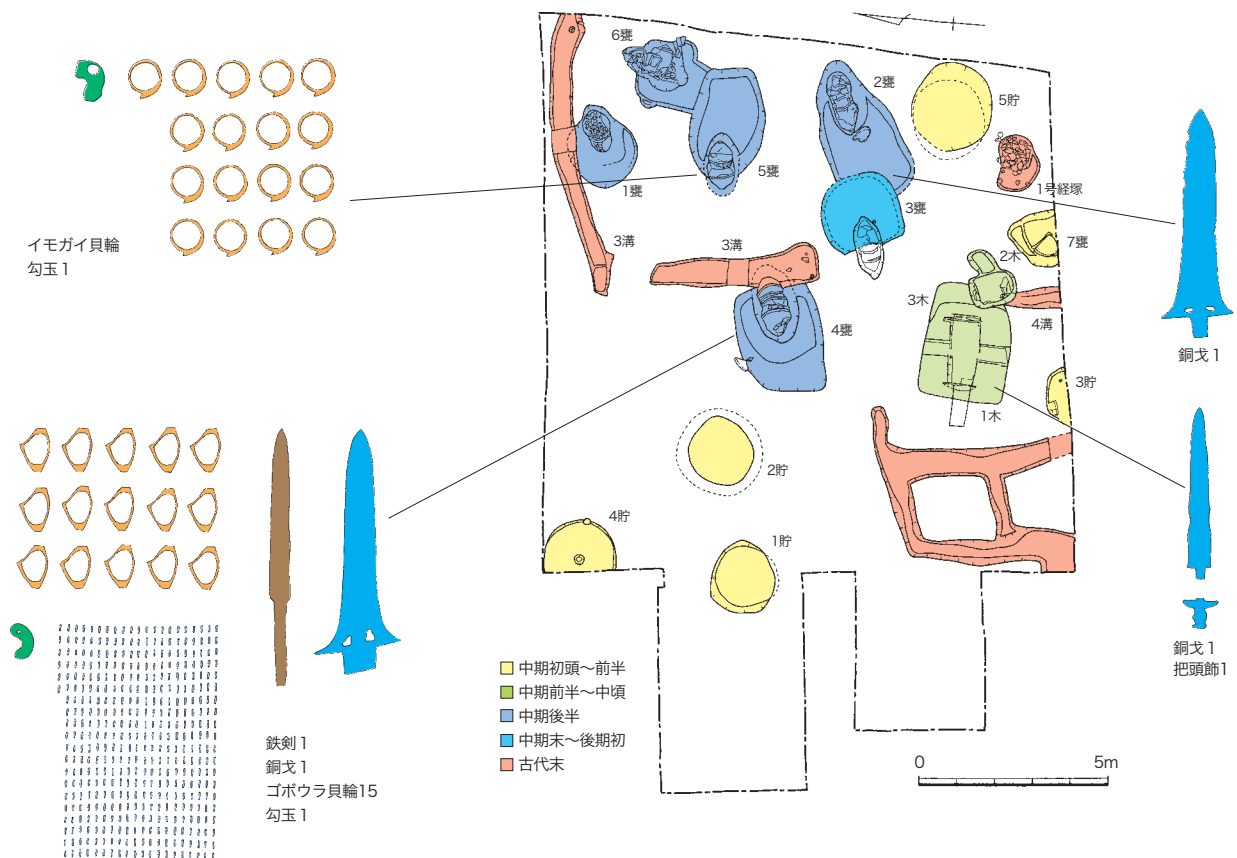
弥生期の遺構の変遷と吹上遺跡の特徴(第42図)

さて、最後に6次調査区の弥生期の遺構変遷と日田地域での位置づけについて説明する。なお説明に当たっては橋口氏の分類を一部用い、墳墓の変遷については溝口氏の指摘をもとにまとめる^{註34}。遺構の時期的な特徴は上述したとおりで、中期初頭頃には貯蔵穴が廃絶される。当該期のこの

一帯は生活遺構が展開する箇所、周辺の調査例からも貯蔵穴群が広範に展開していることが推測される。これとほぼ同時期（K II a）に吹上台地全体を通して甕棺の初現となる7号甕棺墓が造営される。この7号甕棺墓は小児用と想定され、成人棺の所在は現在確認出来ていない。前述の袋状貯蔵穴の廃絶は、少なくとも中期中頃までは行われ、当該地は中期前半代～中頃までは廃棄行為が継続していたものと推測される。すなわちこの段階においては、継続的な墓地造営が意図されていなかったことを示している。

さて、中期前半～中頃には貯蔵穴への廃絶も終了するが、中頃にかけてのある段階において木棺墓群が構築されて墓地造営が計画的に開始されたものと推測される。この木棺墓群の構築が後の墓地造営と意識的に結びついたものであることは、後続する2号甕棺墓が1号木棺墓と大きく距離をおかずに構築され、なおかつ盆地全体を見渡せる南東側の好位置に寄った状態であることから推察される。つまり、木棺墓群は墓地造営の中心的位置を占めていたと考えられるのである。この1号木棺と同時期の遺構は現在までのところ見出せないが、4・5号貯蔵穴から須玖式（K III a）と想定される成人用甕棺の破片が見つかった。少なくとも須玖式段階で成人用甕棺が採用されていた証拠であり、未調査部分において須玖式段階の成人墓が展開する可能性が考慮される。このことから、木棺墓から甕棺墓への一般的な変遷を考えた場合、少なくとも木棺墓は須玖式並行あるいはその前段階（K II c）の可能性を指摘できる。

続いて、中期中頃～後半段階（K III b～c）には2号甕棺墓が継続して築造される。ここで注目されるのは、1号木棺墓⇒2号甕棺墓と成人墓の築造において副葬品を持つ墓が継続する点である。続く中期後半～末段階（K III c）の1・4～6号甕棺墓では、4・5号甕棺墓が1号木棺墓と2号甕棺墓は一定の距離を保って造営されると共に、副葬品を有し同サイズの墓壙を持つ。墓壙・埋葬



第 42 図 遺構変遷図 (1/200)

の規格性や一定の距離感、所謂土饅頭様の小マウンドが存在した可能性と計画的な墓地造営を想起させる。と同時にこれらの意識的連続性を考慮した場合、型式学的に詳細な時期差を見出し難い甕棺墓群のうち、4・5号甕棺墓⇒1・6号甕棺墓への変遷を想定しておきたい。その後中期末～後期初頭（K III c～IV a）段階に再葬の3号甕棺墓が2号甕棺墓を切って構築され、墓地造営が終了するのである。なお、これらの細かな変遷の想定は溝口氏とのディスカッションに基づいている。

以上を整理すると、1号木棺墓⇒2号甕棺墓⇒4・5号甕棺墓⇒1・6号甕棺墓⇒3号甕棺墓への変遷が想定されるのである。さて、K III c期の変遷根拠にも用いた墓壇の規格性や位置関係の変遷は、型式学的変遷の追える1・4～6号⇒3号甕棺墓において、墓壇の小形化や副葬品を持たない事実から追認することが出来ると共に、切り合いや一定の位置関係を保っていない状況が見取れることから支持できよう。

上記変遷の特徴をまとめると、吹上遺跡6次の墳墓群は、中期中頃以降に副葬遺物を有する人物の埋葬によって墓地造営が開始され、大型の墓壇・埋葬位置の規格性・副葬遺物の有無という一定の埋葬原理を有しながら墓地として継続するものと考えられる。しかし、中期後半～後期初頭には、副葬品を有することもなくなり、墓壇規格や埋葬位置などの埋葬原理にゆらぎが生じている。狭い範囲での調査であるため、墓地造営全体の様相を捉えることは出来ないが、少なくとも後期代には墓地造営が行われていないと考えられ、上記のゆらぎの結果、墓地造営が終焉へと向かった可能性を指摘しておきたい。

吹上遺跡6次調査区は限られた範囲での調査であるため、区画墓としての痕跡は確認されていない。しかし、周辺の確認調査の結果からすると、墓域は周囲20mも広がらず、南・東側は崖面であるためほぼ独立した墓地であったと想定され、区画墓の可能性も視野に入れる必要がある。墓地造営からみた社会構造についての溝口氏の論考手法註35を参考とすると、土饅頭様の小マウンド相互の位置を意識したかのような1号木棺墓と2・4・5号甕棺墓の配置や2号甕棺墓⇒3号甕棺墓・5号甕棺墓⇒6号甕棺墓の系列埋葬が見られ、4・5号甕棺墓、1号木棺・2号甕棺墓は、その位置関係から埋葬ペアの可能性が指摘できる。これらの点から、吹上遺跡の墓地造営過程は明確な中心的埋葬を欠くものの、氏の区画墓Ⅱに類似する様態を示すものと位置づけられ、墓地を構成する成員は、単純に特定家族や世帯の成員ではなく、氏の指摘する「地域集団を構成する複数の集団から選択された人物たち」であったものと考えられる。また、卓越した副葬遺物を有する4・5号甕棺墓は、田中氏が首長制社会の萌芽を示す例として指摘する男女差し向かいの埋葬ペアに当てはまり、夫婦ではなく血縁関係を重視した「キョウダイの原理」に基づく人たちの可能性が考えられる。同様にこの埋葬ペアについては、溝口氏も「司祭者的権威に依拠するもの」たちなどと推察されている。いずれにしても優位性は高いものと予測され、今後の人骨の詳細報告とあわせての検討が課題である。

また、これら区画墓は「地域の拠点集落に付属している場合が多い」との溝口氏の指摘からすれば、吹上遺跡は日田盆地における拠点集落であったことになる。この論証は、日田地域における甕棺墓の受容状況から補強することができる。日田地域の甕棺墓埋葬は中期初頭の小児用甕棺墓が初現であるが、成人用甕棺墓は大肥遺跡2号墓の汲田式K II c期まで待たねばならない。日田盆地外に位置する福岡県寄りのこの遺跡ではK III c期まで成人棺が段階的に継続するが、この間の日田盆地内の成人用甕棺墓は吹上遺跡にのみ集中する現象が見られる。市内各所に中期の小児

用甕棺墓が見られるのに対し、成人用甕棺墓が、吹上遺跡や大肥地域における拠点集落に付属する墓地にのみに見られる現象は、先の論証を補強すると共に、盆地内における吹上遺跡の優位性を物語っているといえる。

しかし、吹上遺跡には、ほぼ同時期あるいは後期代まで継続する墓域が台地内に複数箇所確認されており、墓地間相互の関係を検討するなど多くの課題は残されている。

2. 古代の遺構

古代の遺構は溝4条と経塚1基が確認された。その所属時期については前節において述べたが、再度内容を整理する。3号溝出土土師器小皿は、口縁部を欠くものの糸切底を呈する。土師器の糸切底への移行は豊前豊後で11世紀中頃との山本^{it37-38}氏の指摘に従うならば、11世紀中頃以降の年代を想定しうる。次に4号溝出土(2号木棺墓混入)の土師皿・小皿の破片は、山本氏の筑後地域の中世Ⅱ期代(12世紀中頃～13世紀前半)に収まるものか。また詳細不明であるが白磁壺もほぼ同時期と想定したい。以上、出土遺物の特徴からは3・4号溝は概ね12世紀代の範疇で捉えられるものと考えうる。

次に1号経塚の共伴遺物のうち、時期比定の可能な壺型合子については、福岡県太宰府市南条坊遺跡第2次調査出土青白磁壺^{it39}・6次調査出土壺型合子^{it40}や大宰府条坊跡ⅢS X 163出土小型壺^{it41}、大宰府条坊74次S E 1920出土白磁小壺^{it42}などが類例として考えられよう。これは、前川^{it43}氏のI-3CD期、山本^{it44}氏のXII期に該当し、12世紀前半期に収まるものと捉えられることから、九州の経塚の造営が最も盛んな12世紀前半ともほぼ合致する。

1号経塚は小塚をもつ可能性が高く、埋納施設は礫石を不整形に配した小石室内に直接埋納し、間に炭を充填する構造を持つ。英彦山経塚や求菩提山上宮第8区の構造とも類似しており、村木^{it45}氏の直納一有室式とすれば概ね12世紀第二四半期に収まるものか。埋納された経筒本体の形状は筒身に突帯や鋏留などは見られない平底で、非常にシンプルな形状をなしている。蓋は擬似口縁を棒状突起で作出するというやや特殊な構造が見て取れる。この蓋固定用擬似口縁作出孔は九州内の他例に見られず、奈良県吉野郡金峯山山頂出土の藤原道長金銅経筒の蓋固定用の孔に類似が見られるぐらいである。以上の経筒の特徴は、所謂四王寺型や積上式といった広域分布の経筒とは様相を異にし、九州の東側で見られる求菩提型など狭域分布の類例にも当てはめることが出来ない。つまり、従来言われている九州型経筒とは異なる形態で鑄造された可能性が考えられる。埋納手法は周辺域に類例が見出せるのに対し経筒の様相が異なる点は、勧進僧の動向^{it47}とも関わるものと思われるがこの点については今後の課題としたい。

さて、以上の出土遺物の時期や経筒埋納方式の検討から、1号経塚の時期は経塚盛行時期の12世紀前半でもやや新しい第二四半期頃と推定される。とすれば、この経塚の周囲に方形状に配置される溝群も全くの無関係とは言いがたく、出土遺物の年代範囲をさらに絞りほぼ同時期と想定しうるものと思われる。本調査区より南東70m程の崖面には、平安時代中期の作とされる木造吹上観音坐像を安置する吹上神社が所在する。この吹上神社の建立に関する詳細は不明であるが、1343年創建の岳林寺域に含まれるものとして近世文書^{it51}には記載が見られる。古代の経塚の造営行為には、平安末期の末法思想と絡む弥勒思想の願意と共に追善供養や現世利益を祈る思想が籠められ、寺院の境内やその関連聖域、山岳信仰に絡む各霊山などに埋納されたことが指摘^{it52}されている。

経塚造成の目的を考慮すると、吹上神社の存在は全くの無関係とは言えず、12世紀には所在していた可能性が高いと言えよう。すなわち栗田^{註53}氏が大分県の類例から指摘する社寺の裏山埋納のような状況が想定され、本調査区周辺は溝で区画された聖域となっていた可能性が指摘出来る。市内での経筒発見例は他になく、『大宰管内志^{註54}』に日田市小野の戸山神社より康治（1142～1143）の年号が彫られた経筒が発見されたとの記述が知られるぐらいである。しかし、このような記述は吹上遺跡の経筒と共に経塚造営行為が本遺跡単発のものではなく、市域の山岳寺院と絡みながら行われ、広範に広がっていた可能性を示すものと言えよう。

(3). おわりに

吹上遺跡の報告書作成も本報告で4冊目にいたり、1・2次調査区の報告と理化学的な分析・考察報告が残るのみである。「弥生時代の王墓」「王墓級」の文字が新聞紙上を飾り、連日のように報道されていた6次調査からちょうど10年が経過した。様々な話題を提供した6次調査の内容は今も色あせることはなく、北部九州の歴史的検討を深める重要な発見であったことが本編をまとめるにあたり改めて認識出来た。

なお、今回の報告は、諸般の事情から全く現場に携わっていない本担当が実施することとなったため、記録や図面などに不備があり、十分な報告が出来ていないところも多いと感じている。記して御容赦いただきたい。

最後に本報告を作成するにあたり、様々な協力と御教授をいただいた九州大学田中良之教授・溝口孝司助教授をはじめとする諸氏（P5掲載）に改めて感謝を申し上げます。

- 註1 『吹上遺跡－6次調査の概要－』日田市教育委員会 1995
『平成7年度（1995年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1997
- 註2 橋口達也 「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』X X X I 中巻 福岡県教育委員会 1979
橋口達也 「甘木朝倉地方甕棺についての若干の所見－とくに栗山遺跡出土甕棺を中心として－」『栗山遺跡』甘木市埋蔵文化財調査報告第12集 甘木市教育委員会 1982
- 註3 九州大学溝口孝司助教授より時期比定について様々なご教示をいただいた。
- 註4 岩永省三 「弥生時代青銅器型式分類編年再考」『九州考古学』55 1980
岩永省三 「武器形青銅器の型式学」『考古資料大観』第6巻 2003
- 註5 『吹上遺跡Ⅰ』（1次調査概報）日田市教育委員会 1980
『吹上遺跡Ⅱ』（2次調査概報）日田市教育委員会 1981
『吹上遺跡Ⅰ－3～5次調査の記録－』日田市埋蔵文化財調査報告第42集 日田市教育委員会 2003
『吹上遺跡Ⅱ－9～11次調査の記録－』日田市埋蔵文化財調査報告第52集 日田市教育委員会 2004
『吹上遺跡Ⅲ－7・8次調査の記録－』日田市埋蔵文化財調査報告第57集 日田市教育委員会 2004
- 註6 「東アジアの銅剣文化と向津具の銅剣」『山口県史 資料編 考古1』山口県 2000
- 註7 『日田市高瀬遺跡群の調査4 上野第2遺跡』大分県教育委員会 2002
- 註8 『仁右衛門畑遺跡Ⅱ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第14集 福岡県教育委員会 2001
- 註9 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－36－大庭・久保遺跡』福岡県教育委員会 1995
- 註10 『大肥遺跡Ⅱ－B・C区の調査の記録－』日田市埋蔵文化財調査報告第66集 日田市教育委員会 2006
- 註11 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－25－本文編』福岡県教育委員会 1978
- 註12 九州大学溝口孝司助教授のご教授による。
- 註13 『栗山遺跡』甘木市文化財調査報告第12集 甘木市教育委員会 1982
- 註14 『鷹取五反田遺跡Ⅰ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第9集 福岡県教育委員会 1999
- 註15 『小迫辻原遺跡Ⅰ－A・B・C・D区編－』九州横断道関係埋蔵文化財調査報告書10 大分県教育委員会 1999
- 註16 『岩野遺跡』浮羽町文化財調査報告書第5集 浮羽町教育委員会 1990
- 註17 「箱式棺を外部施設とする甕棺－大分県（豊後国）日田地方に於ける2つの例」『考古学雑誌』第40巻第三号 1954
- 註18 『平成15年度（2003年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2004
- 註19 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－12－柿原遺跡群Ⅲ』福岡県教育委員会 1987
- 註20 『横隈狐塚遺跡Ⅱ』小郡市文化財調査報告書第27集 小郡市教育委員会 1985

- 註2 1 『野口遺跡（1）昭和61年度調査の概要報告－駅館川流域遺跡群発掘調査報告書Ⅱ－』宇佐市文化財調査報告書第3集 1987
- 註2 2 福永信哉 「5.木棺墓」『弥生文化の研究8 祭りとの装い』雄山閣 1987
- 註2 3 柳田康雄 「4.弥生木棺墓」『伯玄社遺跡』春日市文化財調査報告書第35集 春日市教育委員会 2003
- 註2 4 高倉洋彰 「右手の不使用－南海産巻貝製腕輪着装の意義－」『九州歴史資料館研究論集1』1975
- 註2 5 『立岩遺跡』福岡県飯塚市立立岩遺跡調査委員会編 河出書房新社 1977
- 註2 6 『弥生時代の吉野ヶ里－集落の誕生から終焉まで－』佐賀県教育委員会 2003
- 註2 7 木下尚子 「弥生定形勾玉考」『東アジアの考古と歴史 中』岡崎敬先生退官記念論集 1987
- 註2 8 『古武遺跡群Ⅷ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集 福岡市教育委員会 1996
- 註2 9 片岡宏二 「墓制からみた北部九州弥生時代」『季刊考古学92号』雄山閣 2005
- 註3 0 溝口孝司 「北部九州の墓制」『季刊考古学67号』雄山閣 1999
- 註3 1 田中良之 「墓地から見た親族・家族」『古代史の論点』②小学館 2000
- 註3 2 中園 聡 「九州喪棺社会のイデオロギー」『季刊考古学67号』雄山閣 1999
- 註3 3 高倉洋彰 『金印国家群の時代』青木書店 1995
- 小田富士雄 「弥生時代北部九州の首長墓とクニグニ」『奴国王の出現と北部九州のクニグニ』春日市奴国の丘歴史資料館 2000
- 註3 4 墳墓の変遷は九州大学溝口孝司助教授にご教授いただき、検討を行った。
- 註3 5 溝口孝司 「弥生時代中期北部九州地域の区画墓の性格」『九州と東アジアの考古学』九州大学考古学研究室
- 註3 6 註3 1と同じ
- 註3 7 山本信夫 「統計上の土器－歴史時代土師器の編年研究によせて」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古希記念論文集 1990
- 註3 8 山本信夫・山村信榮 「中世食器の地域性 10九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 1997
- 註3 9 『南条坊遺跡（4）』福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第8集 福岡県教育委員会 1978
- 註4 0 『南条坊遺跡（3）』福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第6集 福岡県教育委員会 1977
- 註4 1 山本信夫 「北宋期貿易陶磁器の編年－大宰府出土例を中心として」『貿易陶磁研究』NO8 1988 掲載遺物
- 註4 2 註4 1掲載遺物
- 註4 3 前川威洋 「土師器の分類及び編年とその共伴土器について」『南条坊遺跡（4）』福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第8集下 福岡県教育委員会 1977
- 註4 4 註4 3と同じ
- 註4 5 小田富士雄 「九州古代経塚考－近年の調査から－」『考古学雑誌』第74巻4号 1989 に掲載
- 註4 6 村木二郎 「九州の経塚造営体制」『古文化談叢』第40集 九州古文化研究会 1998
- 註4 7 原田一敏 『経筒の製作と地域性』『経筒が語る中世の世界』思文閣出版
- 註4 8 小田富士雄 「九州における経塚・経筒研究」『経筒が語る中世の世界』思文閣出版
- 註4 9 栗田勝弘 「大分県の経塚と観進僧の動態」『古文化談叢』第40集 九州古文化研究会 1998
- 註5 0 『日田市の歴史と文化財』日田市教育委員会 1996
- 註5 1 同上
- 註5 2 関 秀夫 『経塚』ニューサイエンス社 1985
- 註5 3 註4 9と同じ
- 註5 4 伊藤常足 「豊後国三巻 戸山社」『大宰管内志』1841（天保2年）

第1表 甕棺観察表

挿図番号	遺構名	器種	法 量 (単位: cm)				調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考	主軸	埋角
			口径	胴部最大径	底径	器高	外面	内面			外面	内面			
第12図1	1号甕棺上	成人用甕棺	52.4	58.5	8.1	53.4	ナデ	ナデ (工具痕あり)、粘土接合痕あり	AE	良	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	口縁部打ち欠き	N87W	34
第12図2	1号甕棺下	成人用甕棺	59.4	79.5	13.6	93.2	ハケ目、ナデ	ナデ、粘土接合痕あり	ABCDE	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4)	にぶい褐色 (7.5YR6/4)	黒斑		
第14図1	2号甕棺上	成人用甕棺	55.7	66	11	85	ナデか? (風化顕著)	ナデか? (風化顕著)	AB	良	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	黒斑	N91W	30
第14図2	2号甕棺下	成人用甕棺	53.4	72	12.4	92.2	ハケ、ナデ	ハケ目、ナデ	ABCG	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4)	にぶい褐色 (7.5YR6/4)	黒斑		
第18図1	3号甕棺上	成人用甕棺	(53.4)	57.2	10.4	71.3	ハケ目、ナデ (風化顕著)	ナデ (工具痕あり)	ABDE	良	にぶい黄褐色 (10YR4/7)	にぶい黄褐色 (10YR4/7)	肩部に黒斑、一部釉料	N93E	21
第18図2	3号甕棺下	成人用甕棺	49.9	59.6	11.2	74.5	ハケ目、ナデ	ナデ (工具痕あり)、粘土接合痕あり	AB	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4)	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	口縁部打ち欠き、黒斑、胴部の上位と下位でハケ目工具が異なる。		
第22図1	4号甕棺外	成人用甕棺	79.6	83.3	11.5	72.2	ハケ目、ナデ	ナデ、粘土接合痕あり	AB	良	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	口縁部打ち欠き、黒斑	N89W	39
第22図2	4号甕棺上	成人用甕棺	61.6	76	11.4	83.2	ハケ目、ナデ	ナデ (工具痕あり)、指オサエ	AB	良	にぶい褐色 (7.5YR6/4)	にぶい褐色 (7.5YR6/4)	口縁部打ち欠き、黒斑、内面全面赤彩		
第22図3	4号甕棺下	成人用甕棺	58.8	76.8	11.8	79.0	ハケ目、ナデ	ナデ、指オサエ	ACDE	良	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	口縁部打ち欠き、黒斑、胴部突帯上方は波状ハケ目、内面赤彩		
第28図1	5号甕棺上	成人用甕棺	49.3	69.1	13.2	76.3	ナデ (風化顕著)	ナデ (工具痕あり)、粘土接合痕あり	AE	良	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	口縁部打ち欠き、黒斑、胴部突帯と口縁部の間に黒斑	N77E	23
第28図2	5号甕棺下	成人用甕棺	57.3	74.1	13.8	73.5	ハケ目、ナデ、ミガキ	ナデ (工具痕あり)、粘土接合痕あり	AE	良	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	口縁部打ち欠き、黒斑		
第32図1	6号甕棺上	成人用甕棺	50.0	51.7	11.3	67.2	ハケ目、ナデ	ナデ、粘土接合痕あり	AC	良	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	内面に黒斑、外面スス付着?	N139W	13
第32図2	6号甕棺下	成人用甕棺	53.4	70.5	11.8	96.0	ハケ目、ナデ	ハケ目、ナデ、粘土接合痕あり	BCG	良	褐色 (5YR6/6)	褐色 (5YR6/6)	黒斑		
第34図1	7号甕棺下	成人用甕棺	(57.1)	-	(13.2)	54.0	ナデ	ナデ	ABCG	良	にぶい黄褐色 (7.5YR4/6)	にぶい褐色 (7.5YR4/6)	口縁部打ち欠き	N61E	-

色調の記号は新版標準土色帖に基づいている。胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒

第2表 出土土器観察表

Table with columns: 挿図番号, 遺構名, 種別, 器種, 法量 (cm) [口径, 胴部径, 底径, 器高], 調整 [外面, 内面], 胎土, 焼成, 色調 [外面, 内面], 備考. Contains 41 rows of archaeological data.

胎土：A 角閃石 B 石英 C 長石 D 赤色粒子 E 白色粒子 F 黒色粒子 G 雲母 H 砂粒

第3表 出土石器観察表

Table with columns: 挿図番号, 遺構名, 器種, 石材, 長さ (cm), 幅 (cm), 厚さ (cm), 重さ (g), 備考. Contains 6 rows of archaeological data.

第4表 出土土製品観察表

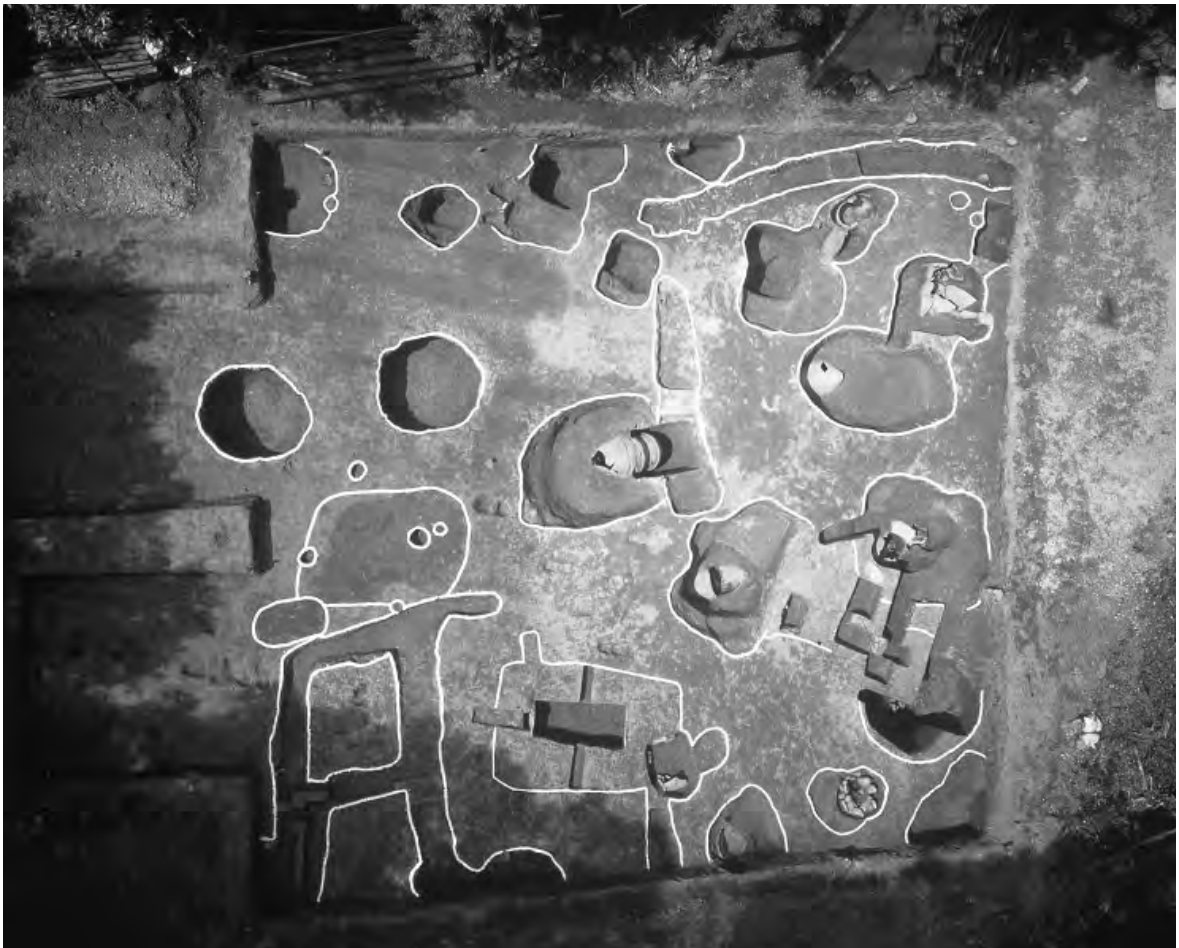
Table with columns: 挿図番号, 遺構名, 器種, 長さ (cm), 幅 (cm), 厚さ (cm), 備考. Contains 4 rows of archaeological data.

第5表 出土金属器観察表

Table with columns: 挿図番号, 遺構, 器種, 全長 (最大長), 身(握)長, 刃部幅, 茎(内)部長, 茎(内)部幅, 闊(柄)部幅, 厚 (高さ), 重さ, 備考. Contains 9 rows of archaeological data.



6次調査区（東から）



6次調査区（真上から）



1号貯蔵穴発掘状況（南から）



2号貯蔵穴発掘状況（北から）



3号貯蔵穴発掘状況（北から）



4号貯蔵穴発掘状況（東から）



5号貯蔵穴発掘状況（南から）



2号土坑発掘状況（南から）



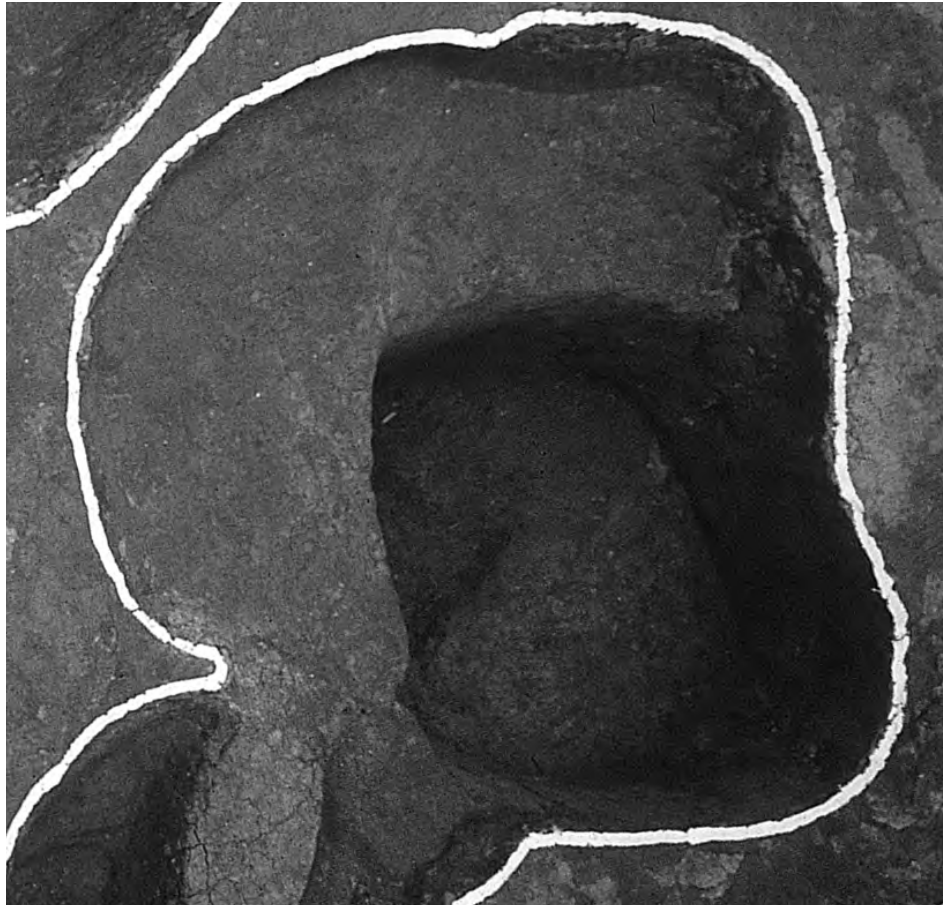
3号土坑発掘状況（西から）



7号土坑発掘状況（北から）



8、9号土坑検出状況（東から）



11号土坑発掘状況（北から）



1号甕棺墓発掘状況（東から）



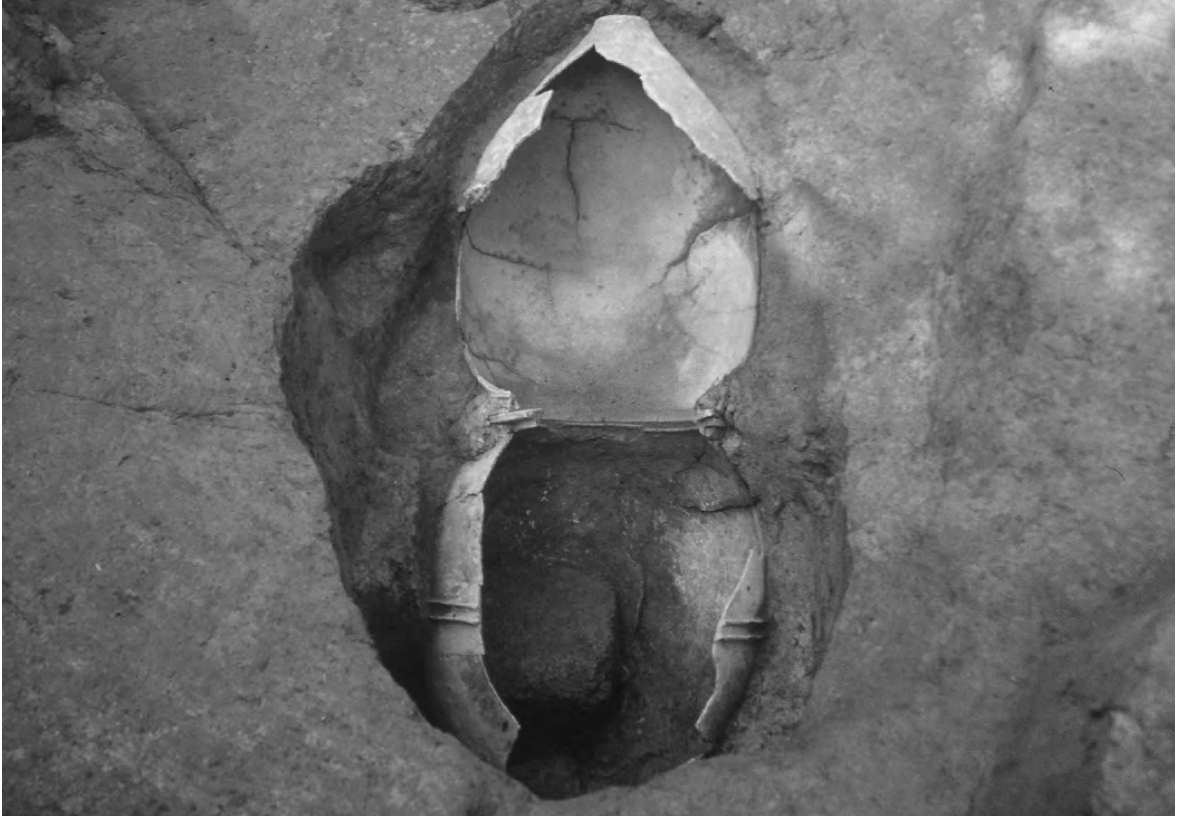
1号甕棺墓発掘状況（南から）



2号甕棺墓発掘状況（真上から）



2号甕棺墓発掘状況（東から）



2号甕棺墓発掘状況（東から）



2号甕棺墓発掘状況（南から）



3号甕棺墓発掘状況（真上から）



3号甕棺墓発掘状況（東から）



3号甕棺墓人骨出土状況（北から）



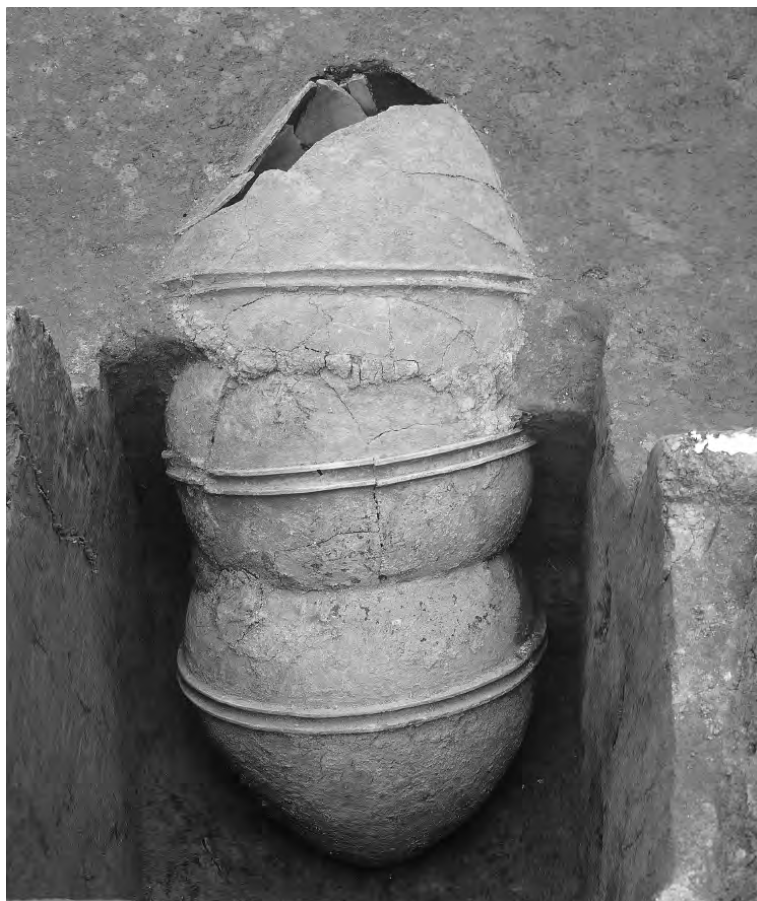
3号甕棺墓人骨出土状況（北から）



4号甕棺墓発掘状況（真上から）



4号甕棺墓発掘状況（東から）



4号甕棺墓発掘状況（東から）



4号甕棺墓発掘状況（西から）



4号甕棺墓発掘状況
(外甕をはずした状況)(東から)



4号甕棺墓発掘状況(外甕をはずした状況)(北西から)



4号甕棺墓発掘状況
(銅戈・鉄剣出土状況) (東から)



4号甕棺墓発掘状況 (銅戈・鉄剣出土状況)
(西から)



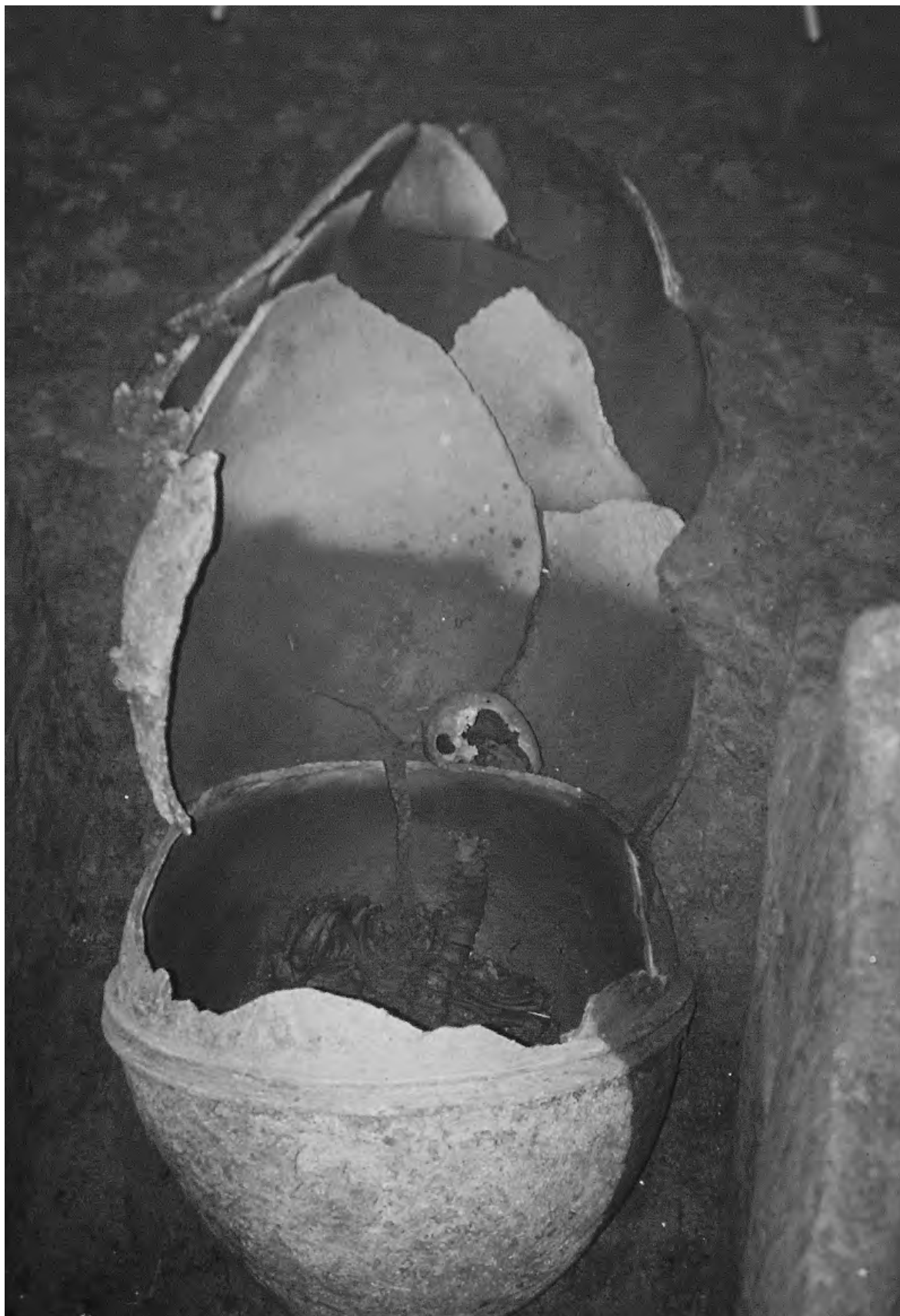
4号甕棺墓発掘状況 (銅戈・鉄剣出土状況)
(南から)



4号甕棺墓人骨出土状況（西から）



4号甕棺墓人骨出土状況（西から）



4号甕棺墓人骨出土状況（東から）



4号甕棺墓人骨出土状況（東から）



4号甕棺墓人骨出土状況（東から）



4号甕棺墓人骨出土状況（東から）
頸椎・胸椎除去後



4号甕棺墓管玉出土状況（東から）
肋骨除去後アップ・肋骨上部と下部に管玉がハマっている。



4号甕棺墓管玉出土状況（東から）
貝輪・腰椎除去後



4号甕棺墓管玉出土状況（東から）
肋骨・椎骨除去後管玉出土状況



4号甕棺墓管玉・勾玉出土状況（東から）
寛骨・仙骨除去後



4号甕棺墓管玉・勾玉出土状況（東から）



4号甕棺墓勾玉出土状況（東から）



4号甕棺墓発掘状況
(東から)



4号甕棺墓発掘状況 (北から)



5号甕棺墓発掘状況（東から）



5号甕棺墓発掘状況（東から）



5号甕棺墓発掘状況（真上から）



5号甕棺墓人骨出土状況（真上から）



5号甕棺墓人骨出土状況（西から）



5号甕棺墓人骨出土状況（北から）



5号甕棺墓人骨出土状況（北から）
頭部付近



5号甕棺墓人骨出土状況（西から）
頭部方向を見る



5号甕棺貝輪出土状況（東から）



5号甕棺貝輪出土状況（北から）



5号甕棺墓発掘状況（真上から）
人骨除去後



5号甕棺墓勾玉出土状況（真上から）



6号甕棺墓石組検出状況（西から）



6号甕棺墓発掘状況（西から）



6号甕棺墓発掘状況（北から）



6号甕棺墓発掘状況（東から）



6号甕棺墓発掘状況（北から）



6号甕棺墓発掘状況（東から）



7号甕棺墓発掘状況（北から）



7号甕棺墓発掘状況（西から）



① 1号甕棺スタンプ



② 2号甕棺スタンプ



③ 3号甕棺スタンプ



④ 4号甕棺スタンプ



⑤ 5号甕棺スタンプ



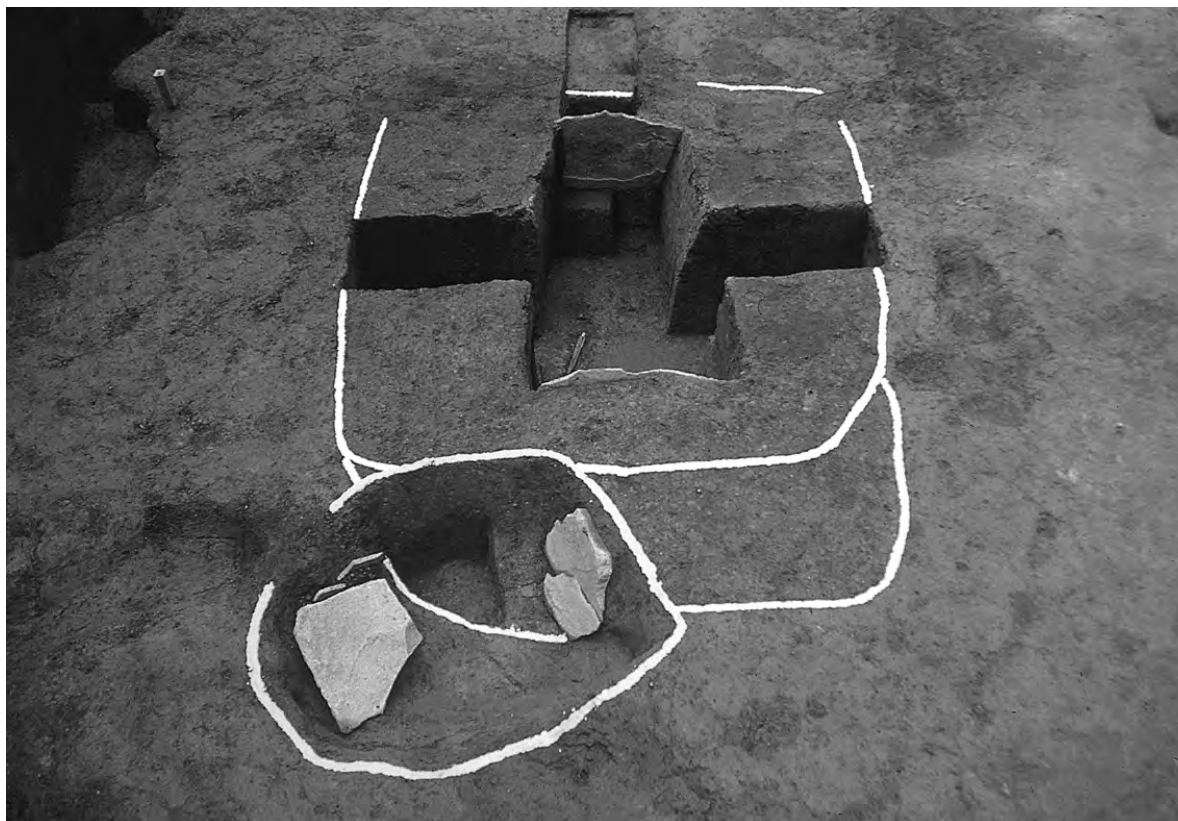
⑥ 6号甕棺スタンプ



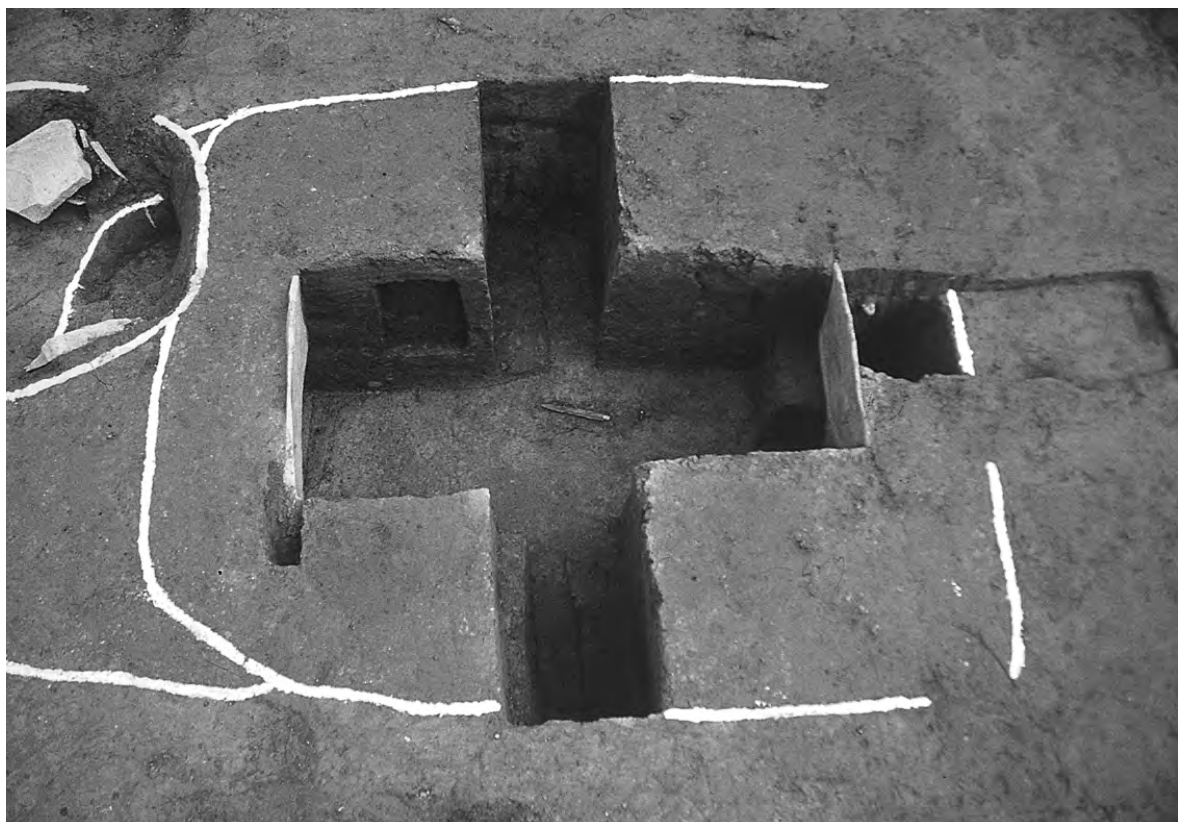
⑦ 7号甕棺スタンプ



⑧ 甕棺のスタンプ保存状況



1～3号木棺墓発掘状況（東から）



1号木棺墓発掘状況（北から）



1号木棺墓銅剣・把頭飾出土状況（北から）



1号木棺墓銅剣・把頭飾出土状況（東から）



1号木棺墓銅劍・把頭飾出土状況（北から）



1号木棺墓銅劍取上げ後



1号木棺墓木棺南侧土层



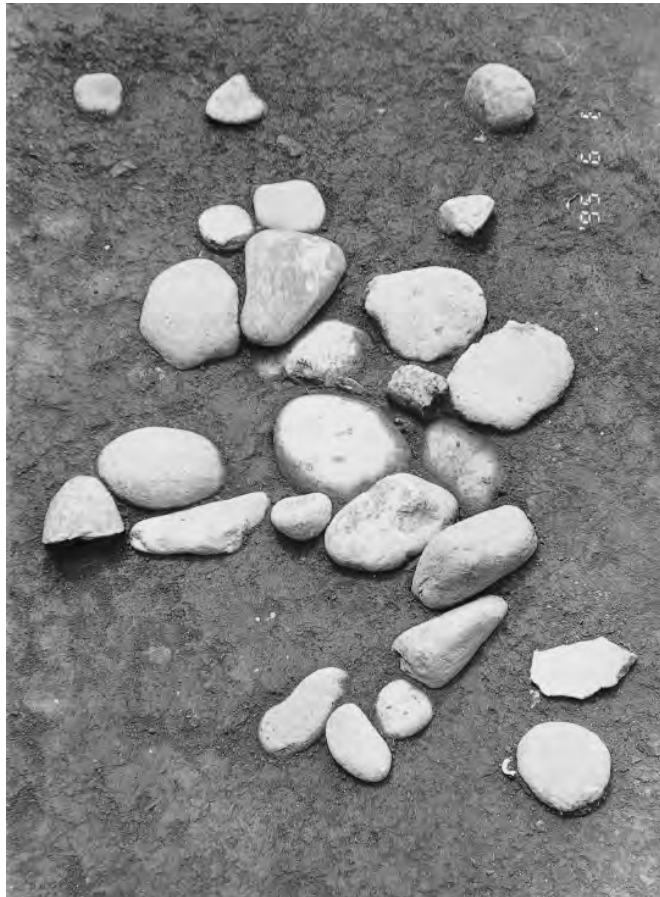
1号木棺墓木棺北侧土层



2号木棺墓発掘状況（北から）



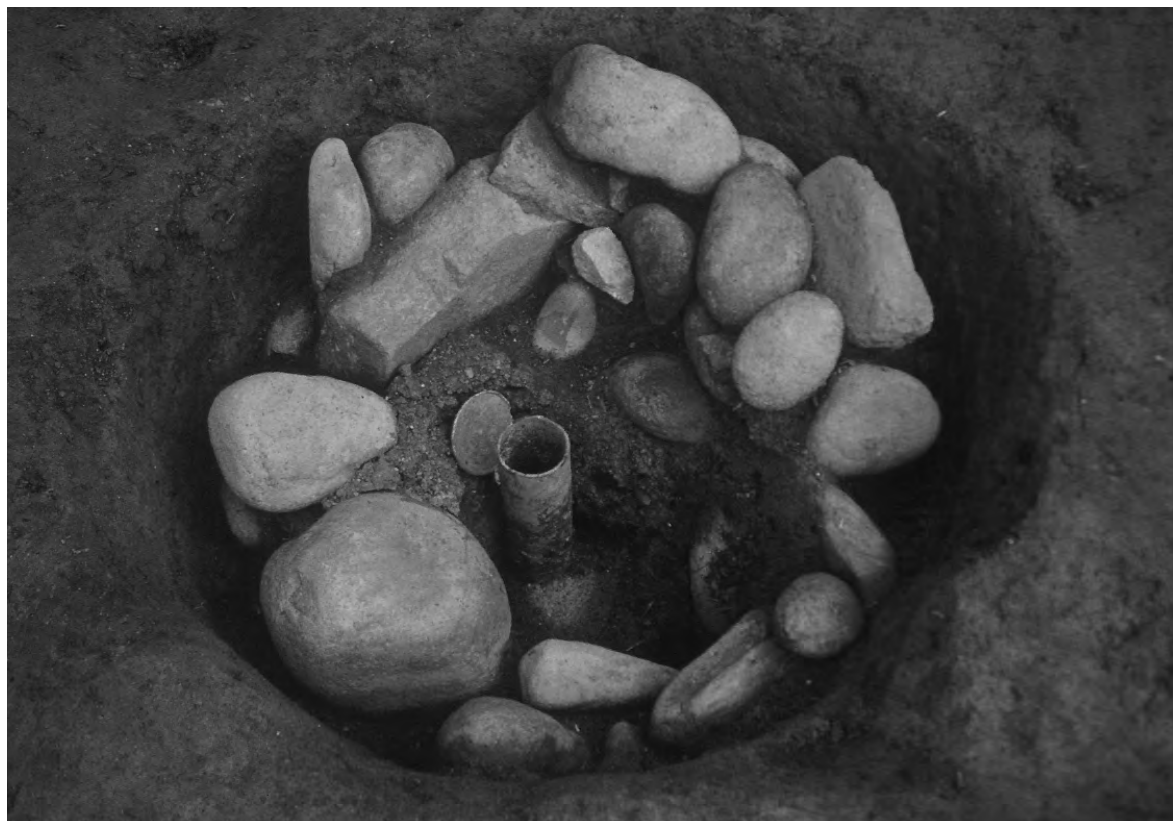
2号木棺墓発掘状況（東から）



経塚検出状況（南東から）



経塚発掘状況（北西から）



経塚発掘状況（北から）



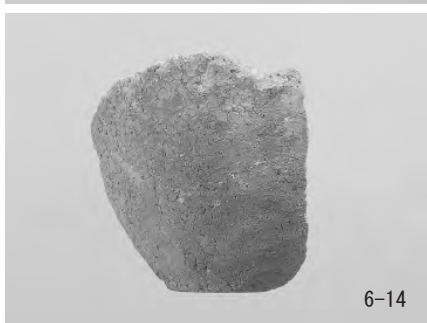
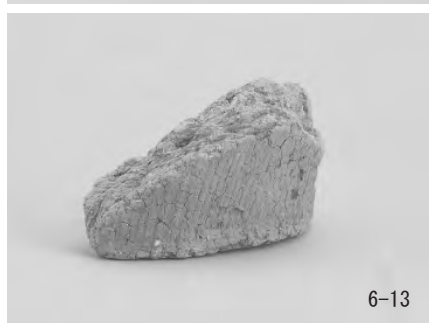
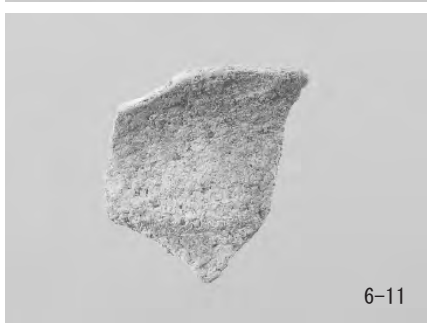
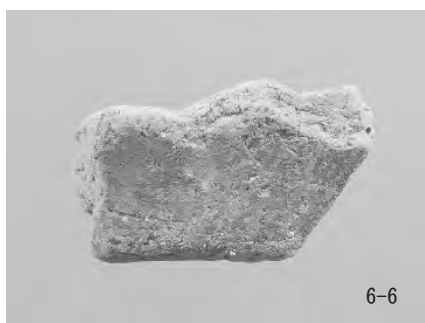
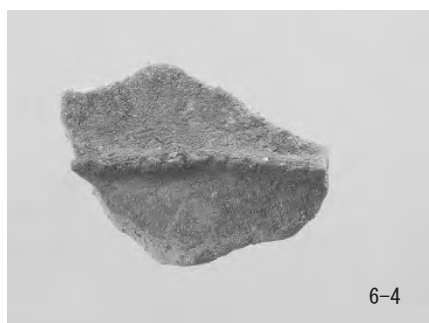
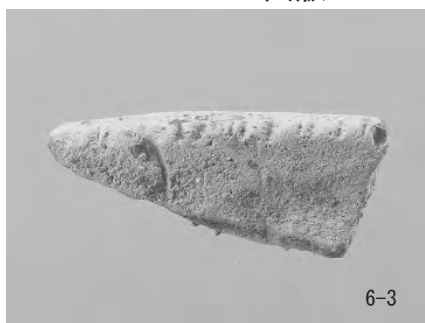
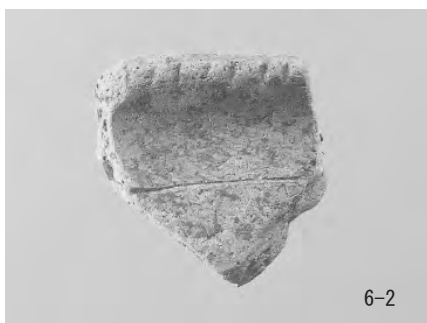
経筒発掘状況（北から）



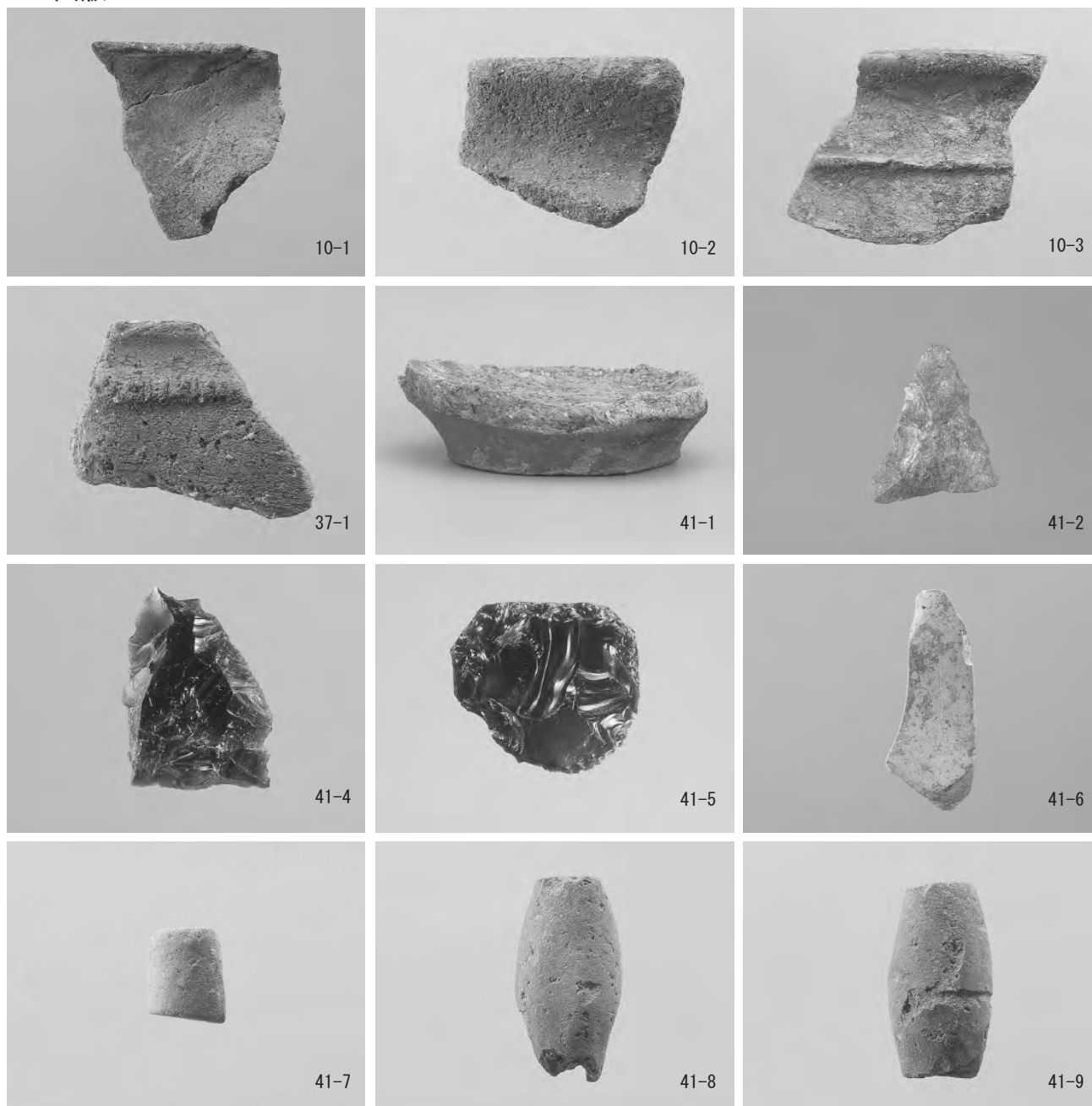
経筒発掘状況（北から）



経塚発掘状況（北から）



図版 44



溝・木棺・その他の出土遺物

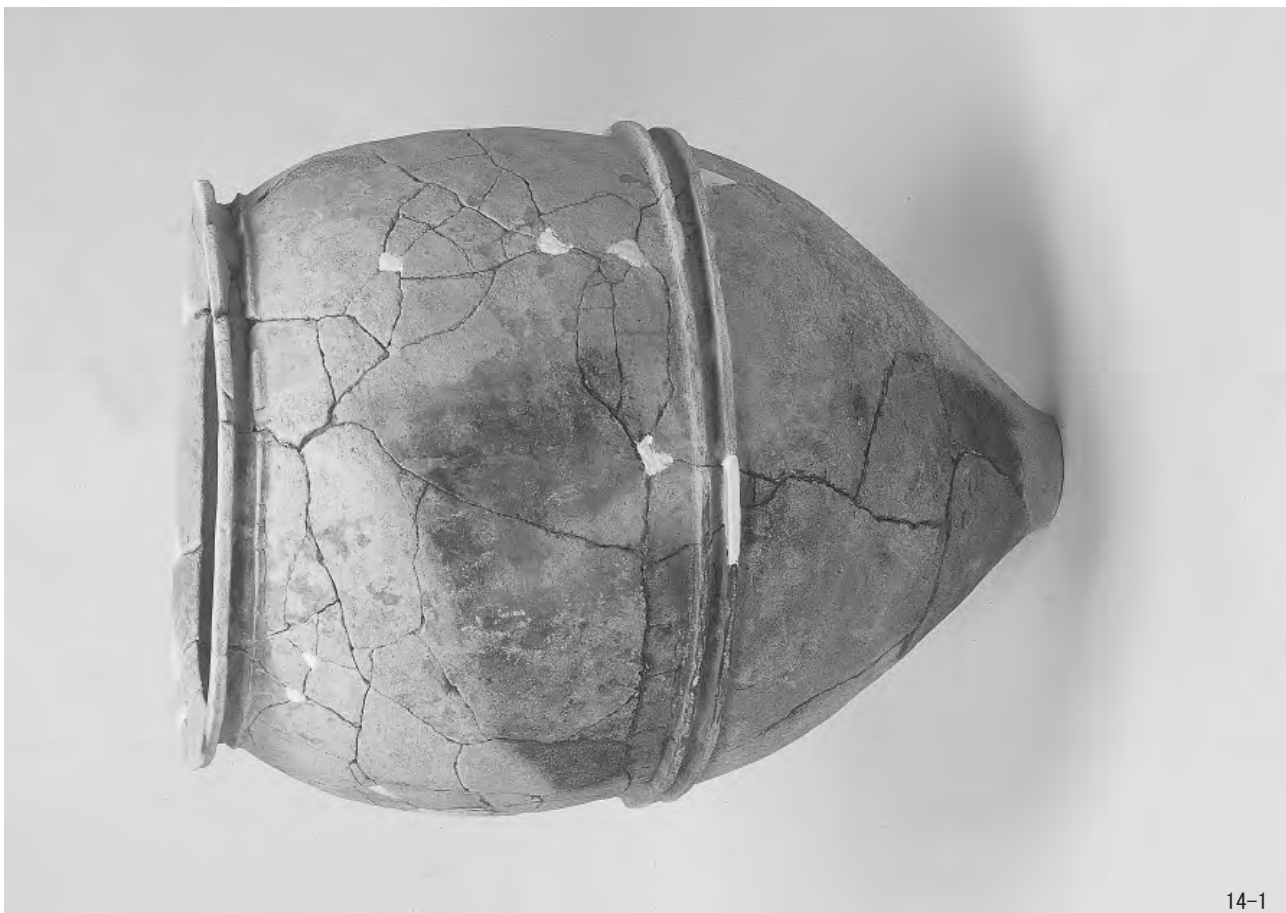


12-1



12-2

1号甕棺



14-1



14-2

2号甕棺



15



15

2号甕棺墓出土銅戈



18-1



18-2

3号甕棺



18-1



18-2

4号甕棺



18-3

4号甕棺



23-2



銅戈切先の研ぎ出し



銅戈附着の木質

4号甕棺墓出土銅戈

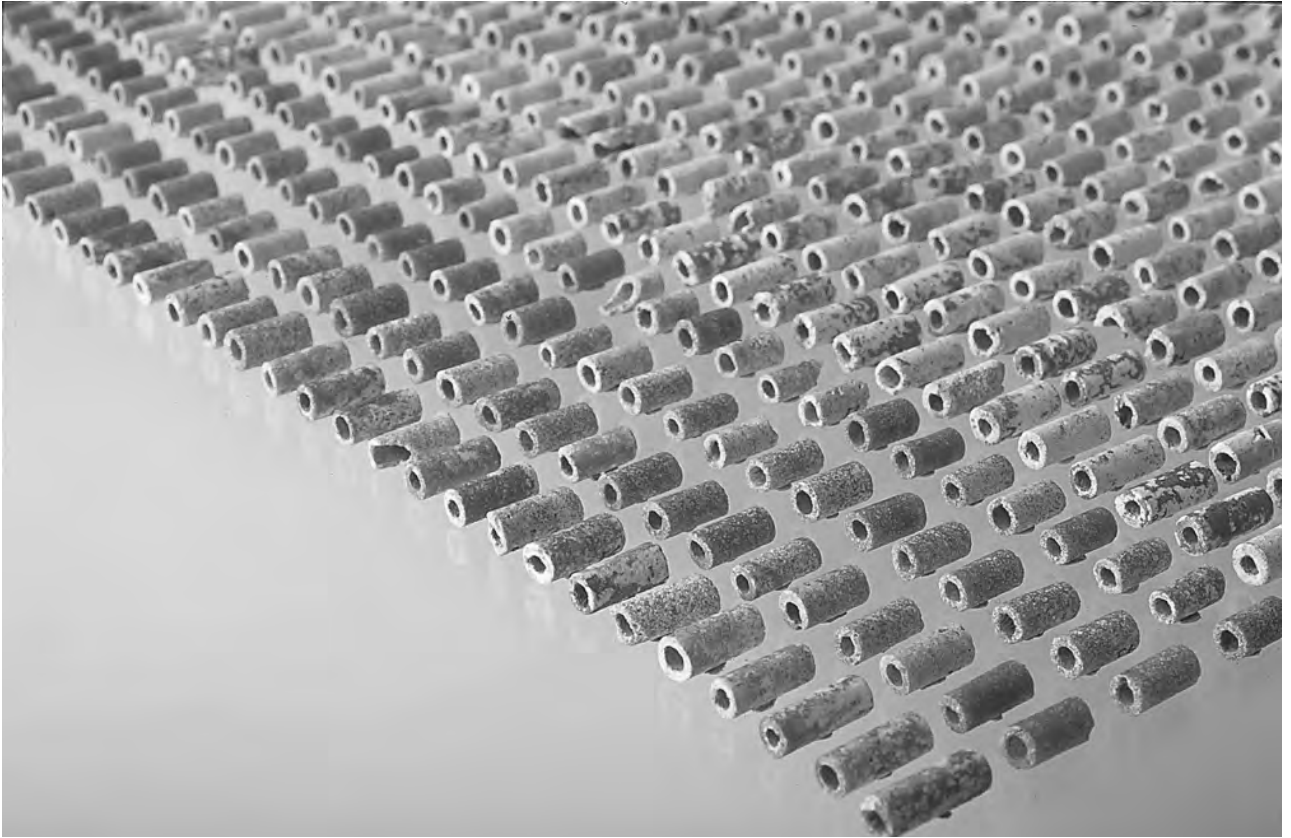


23-1 (表)

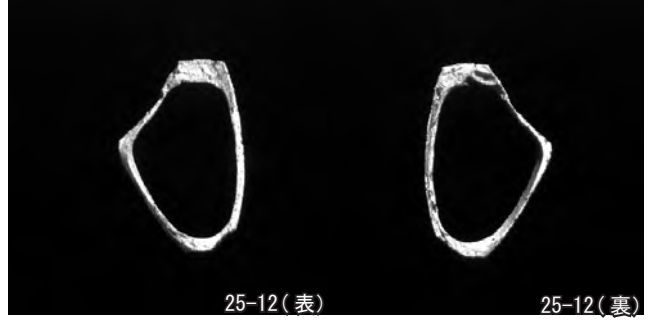
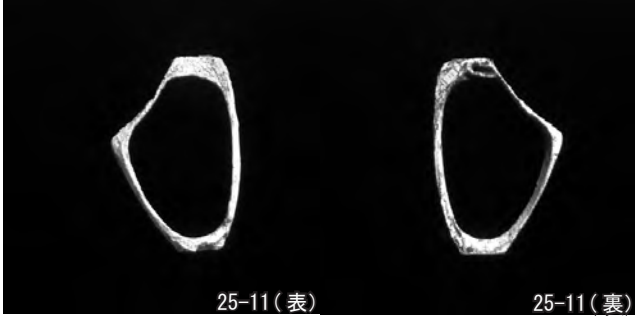
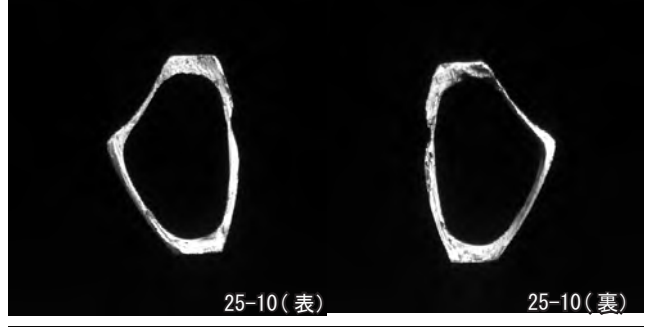
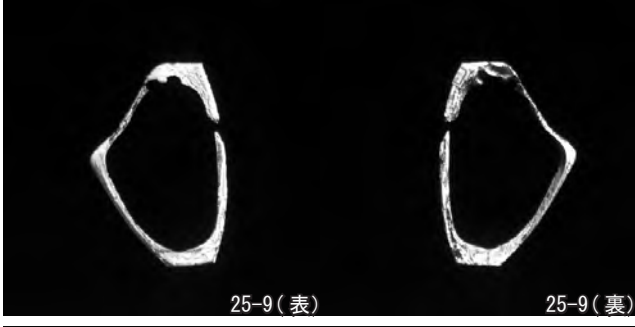
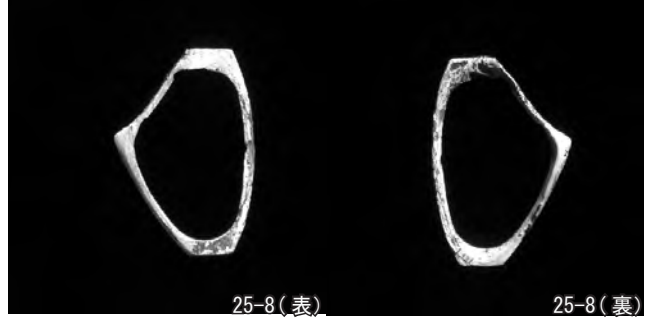
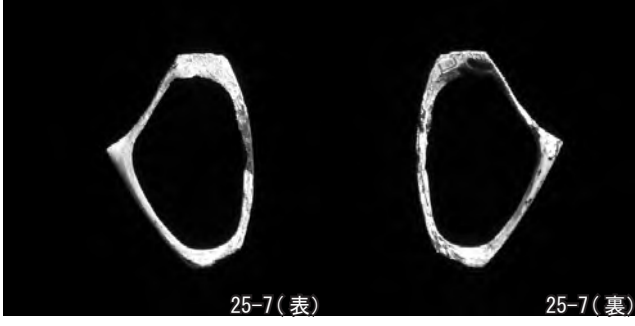
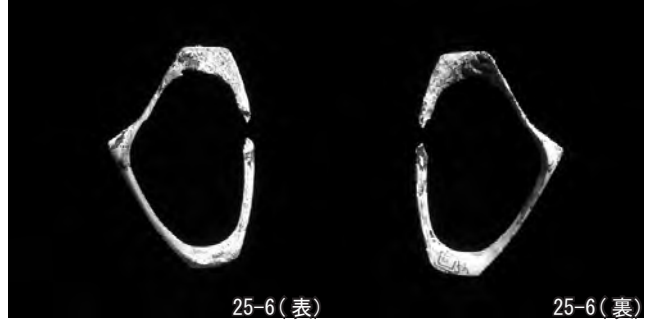
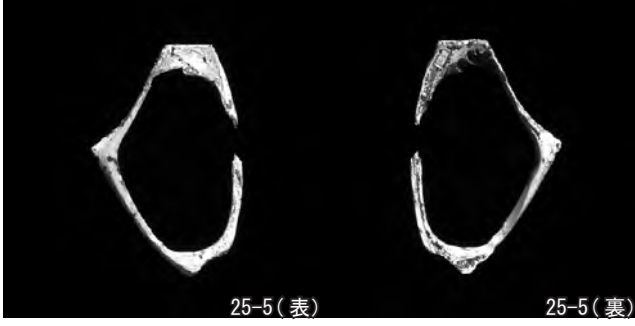
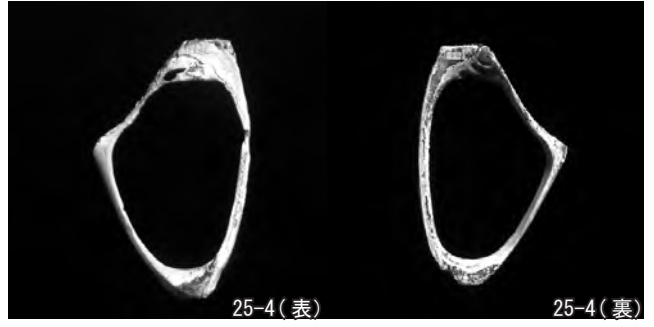
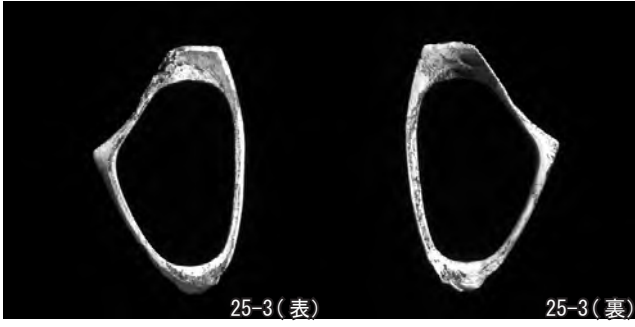
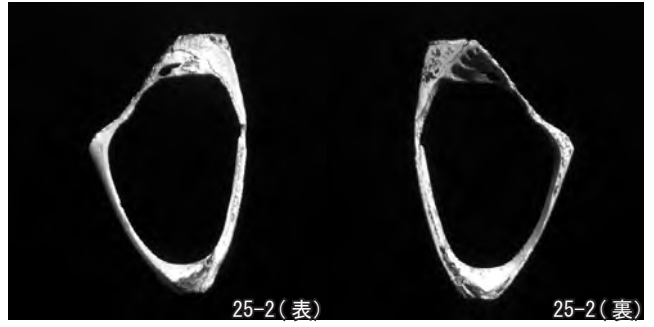
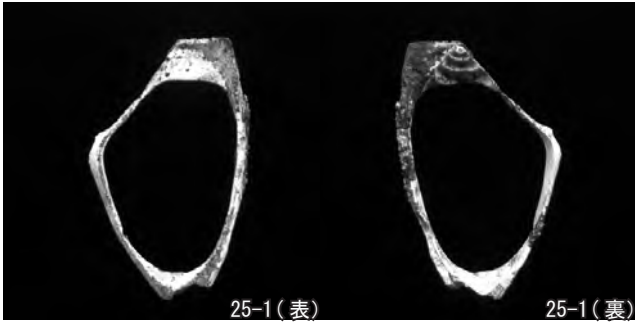


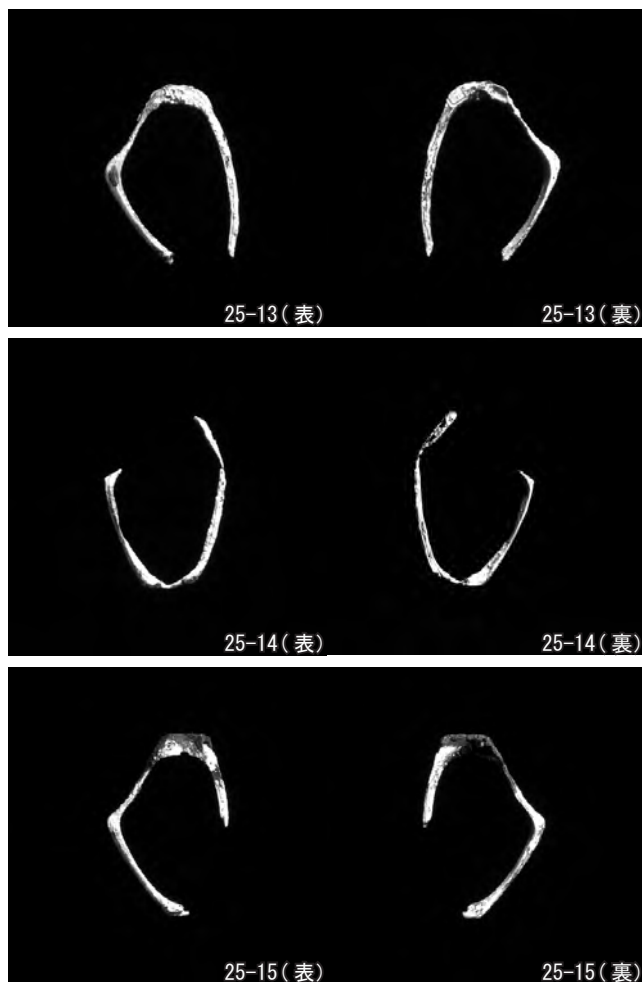
23-1 (裏)

4号甕棺墓出土鉄剣



4号甕棺墓出土管玉 (24)





4号甕棺墓出土貝輪②・勾玉

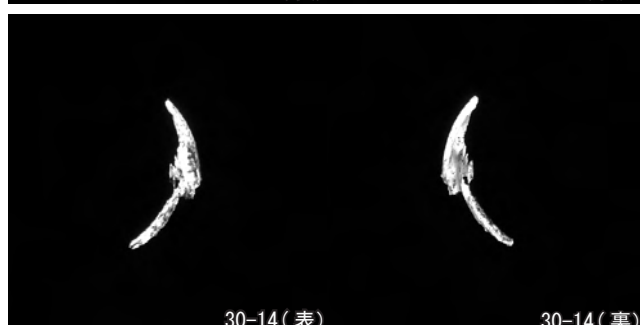
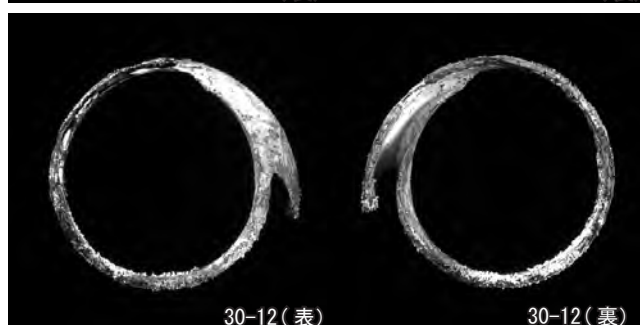
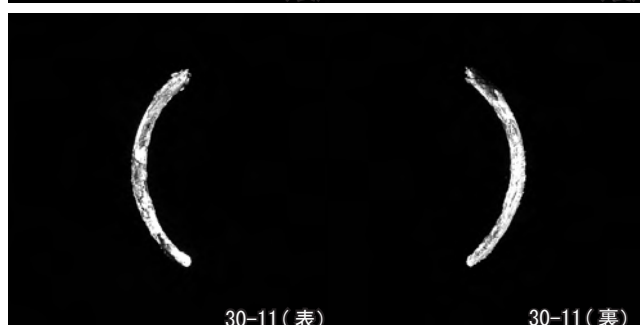
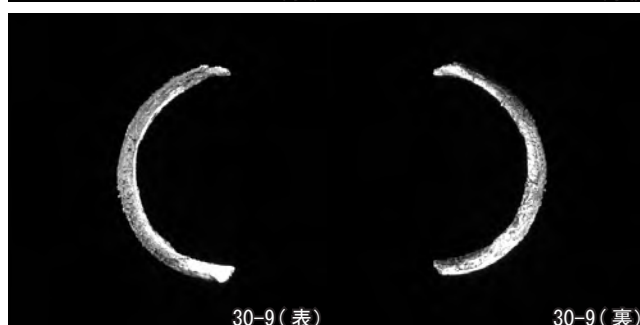
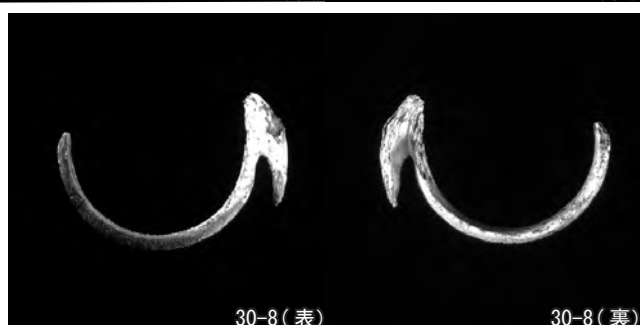
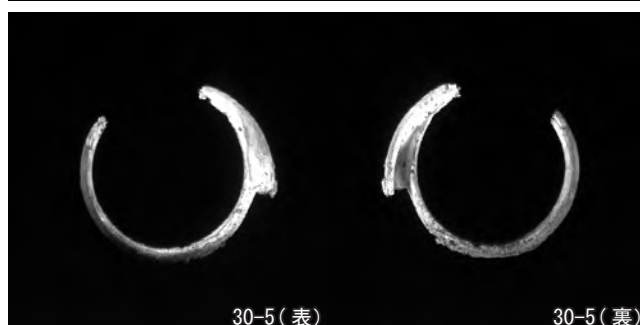
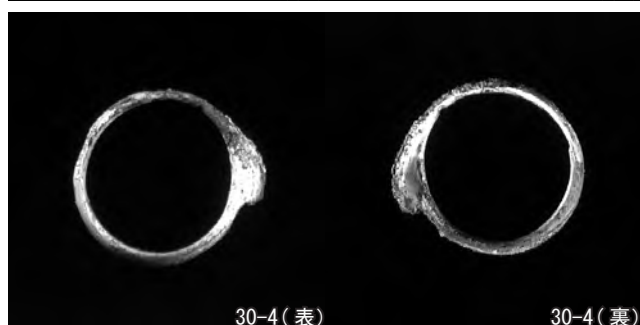
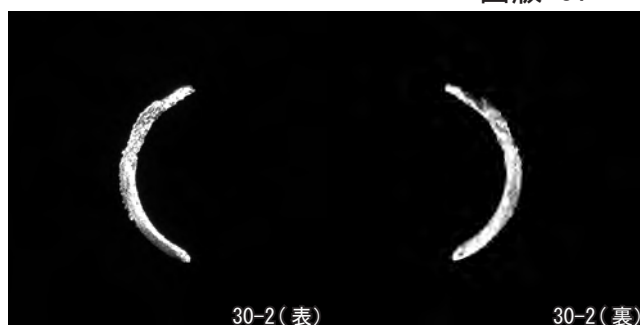
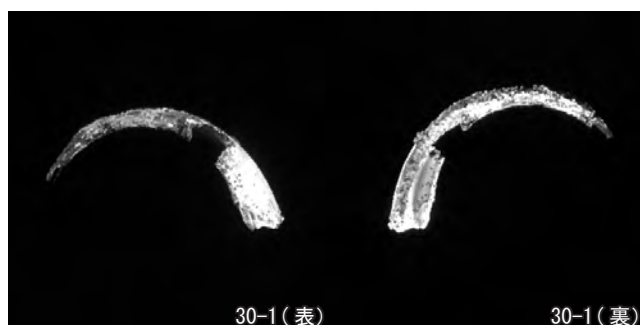


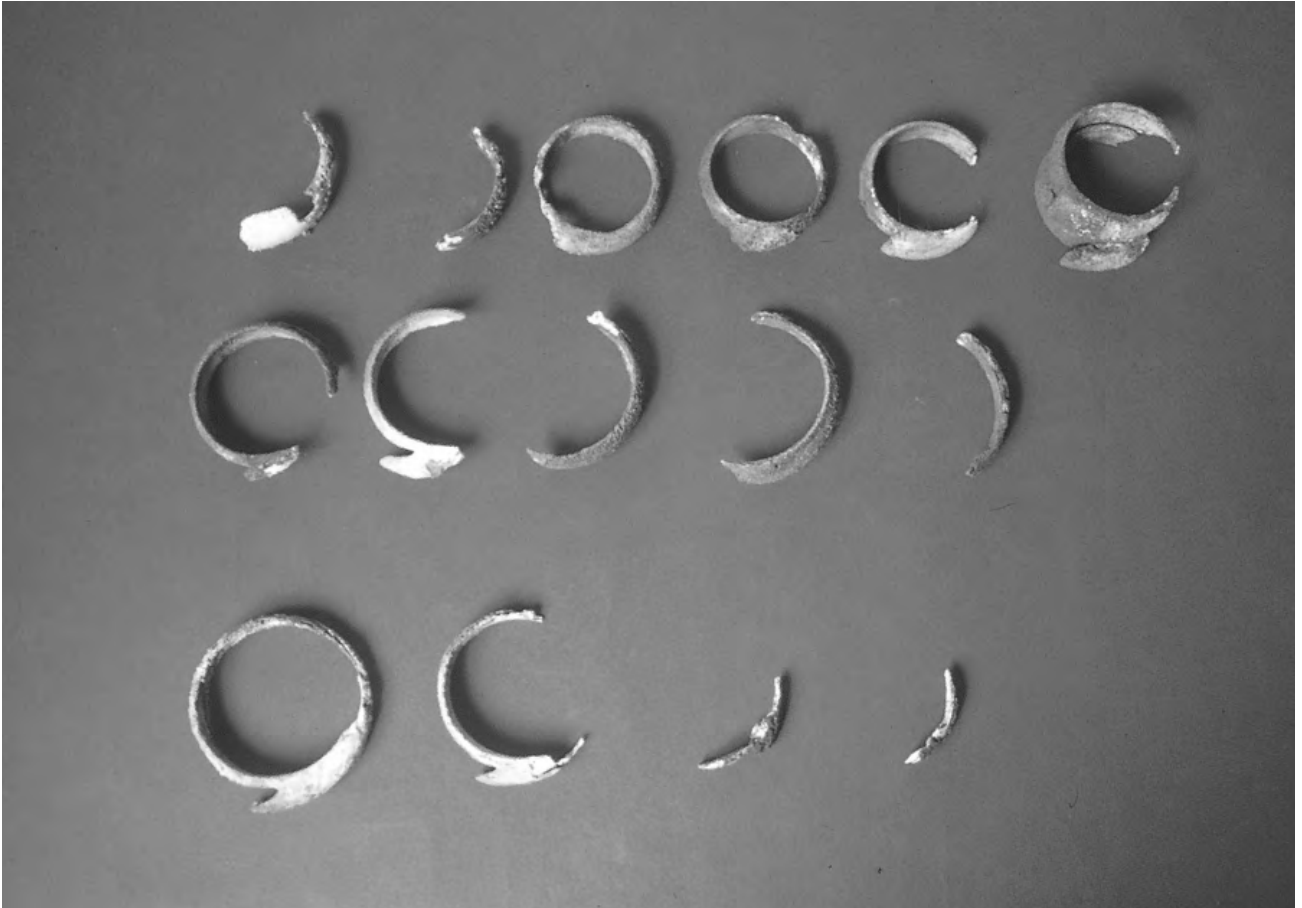
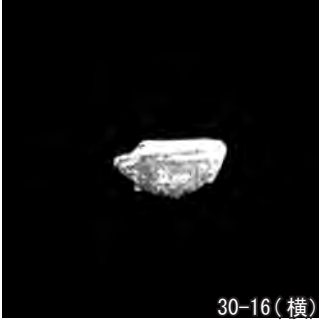
28-1



28-2

5号甕棺





5号甕棺墓出土貝輪②



5号甕棺墓出土勾玉

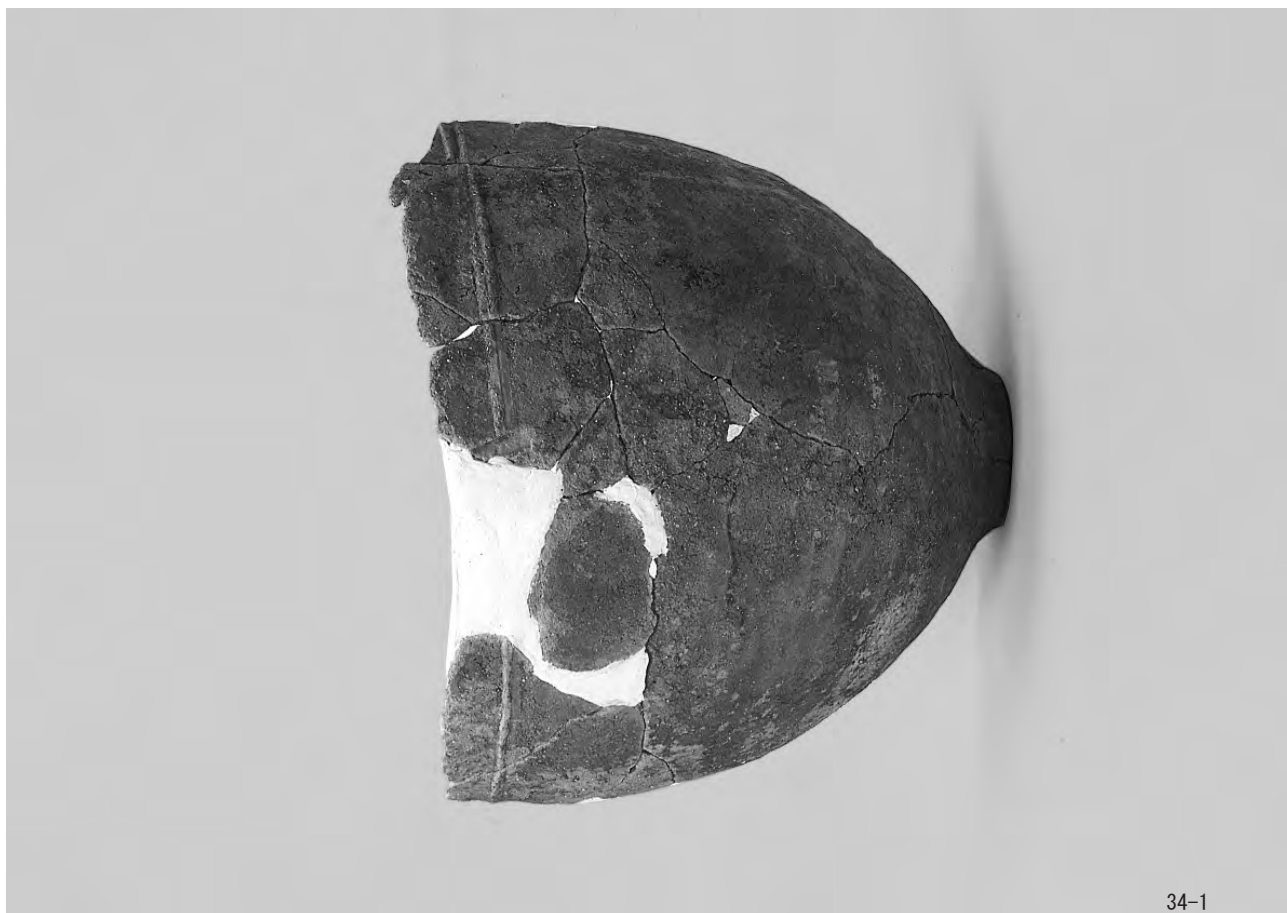


32-1



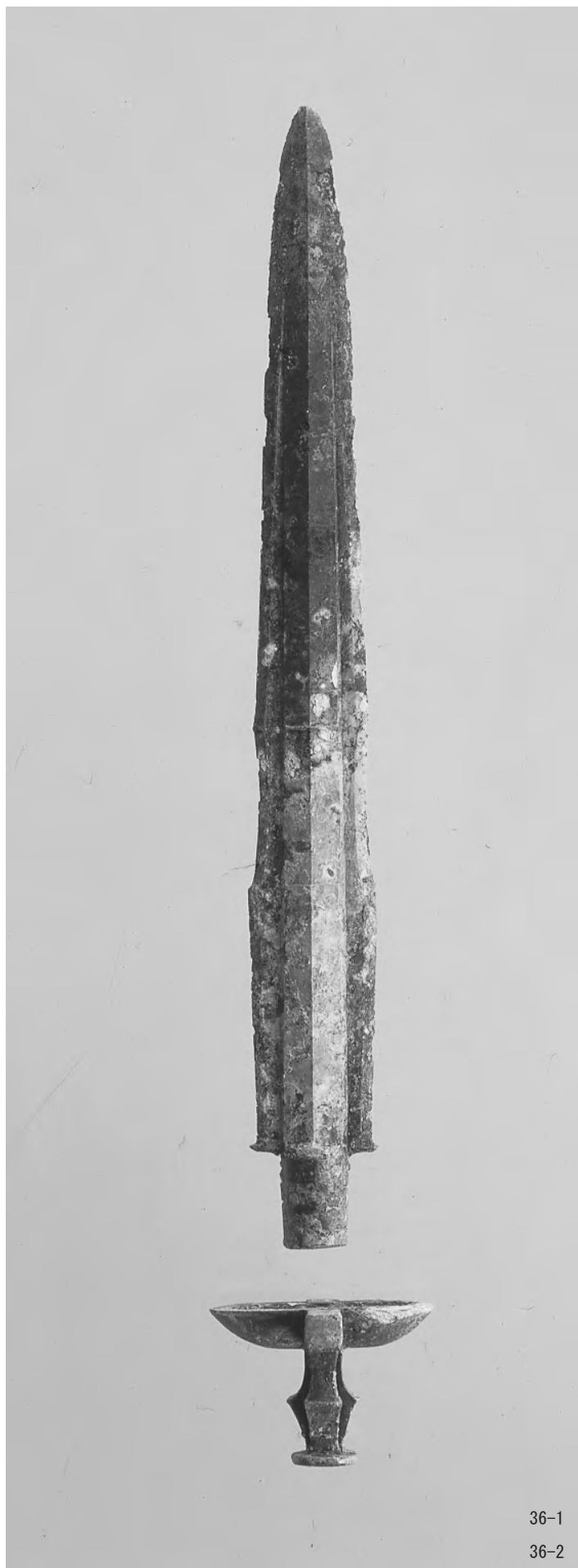
32-2

6号甕棺



34-1

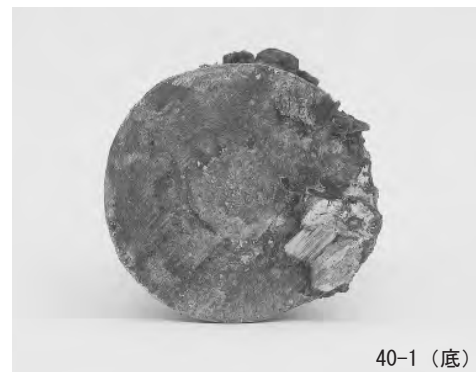
7号甕棺



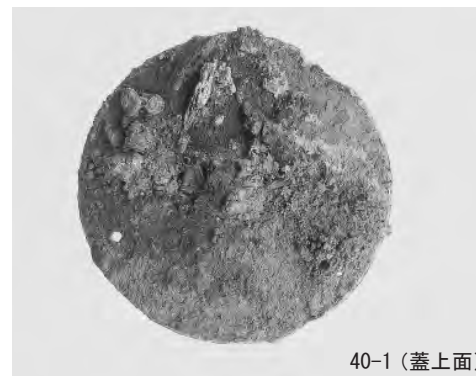
1号木棺墓出土銅劍・把頭飾



40-1・2



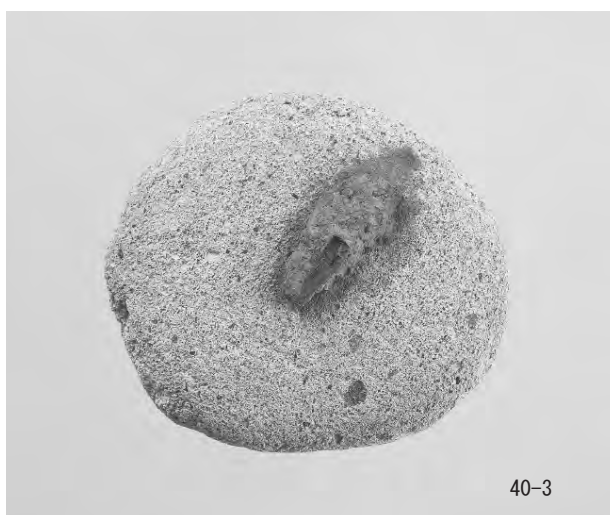
40-1 (底)



40-1 (蓋上面)



40-4



40-3

1号経塚出土遺物

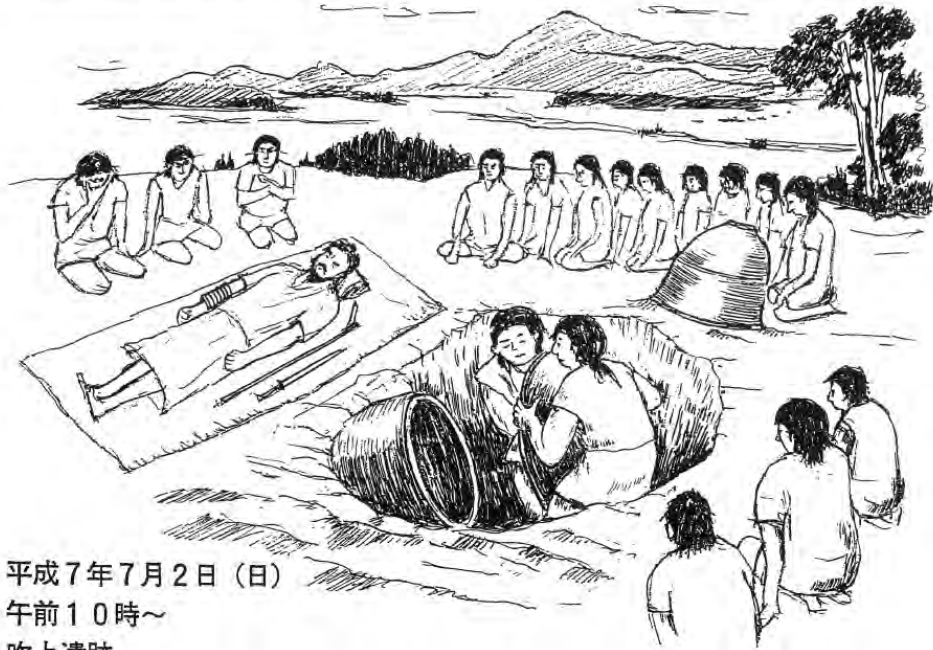
報告書抄録

ふりがな	ふきあげ
書名	吹上IV
副書名	6次調査の記録
巻次	
シリーズ名	日田地区遺跡群発掘調査報告／日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	8 / 70
編著者名	渡邊隆行
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	しまざいち 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
吹上遺跡	大分県日田市 大字渡里・吹上・ 友田	44204-6	651090	33° 18'08"	130° 92'64"	19950508 ～ 19960123	6次 227 m ²	鉄塔 建設 重要遺 跡確認 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吹上遺跡	集落跡 墳墓群	弥生時代	貯蔵穴5基、溝2条、土坑10基 木棺墓3基、甕棺墓7基 経塚1基	弥生土器、石器、銅戈 銅剣、把頭飾、鉄剣 管玉、勾玉、貝輪 経筒、白磁壺	人骨

吹上遺跡現地見学会資料



(日時) 平成7年7月2日(日)

午前10時～

(場所) 吹上遺跡

(主催) 日田市教育委員会

6

吹上Ⅳ

— 6次調査の記録 —

日田地区遺跡群発掘調査報告8

日田市埋蔵文化財調査報告書第70集

平成18年3月31日

発行 日田市教育委員会
大分県日田市田島2-6-1

印刷 日田時報紙器印刷(株)
大分県日田市二串町345-3